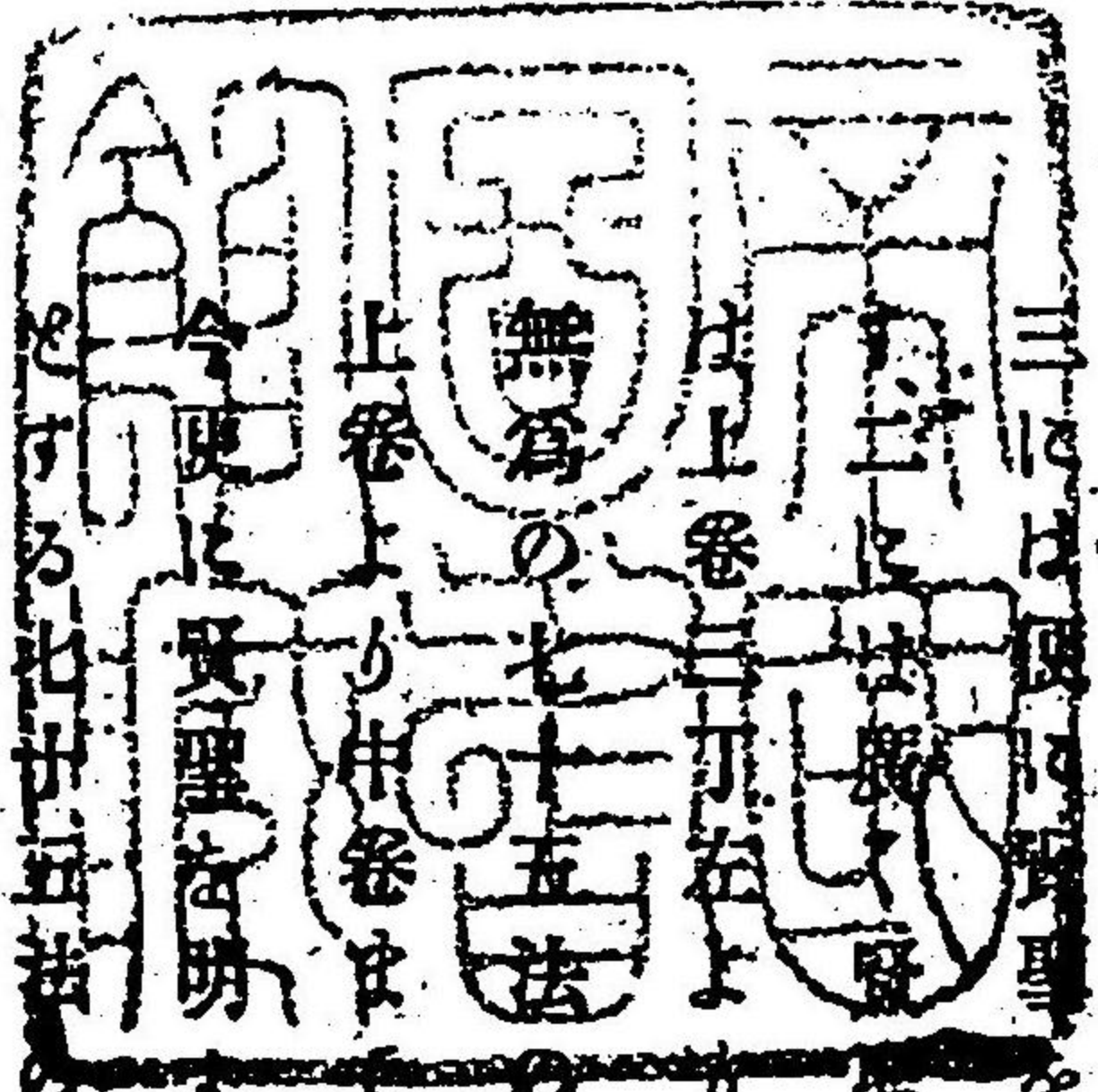


187
48

十五法記講義
下卷

有宗七十五法記卷下

第三。便明賢聖者。賢謂賢和。聖謂聖正。七加行位。爲賢聖已去名聖。



三には便明賢聖を明す此の中に大に分て二とす初には總じて賢聖の名義を釋す二には賢聖の行位を明す今は即ち初なり第三。便明等とは謂らく此の科は上卷三行位より來るものなり便に明すとは元來此の書は有部宗所立の有爲無爲の七十五法の名義を明し初學者の便に供するを以て目的とす然るに既に止卷より中卷までにて正釋及び義門分別を以て七十五法の名目は釋し畢れり今更に賢聖を明す故に便に賢聖を明すと云ふなり然るに今記の正しく目的とする七十五法の名義は明し了り今更に賢聖を明すは不用の如くなりと雖も決して然らず賢聖の行位を明されば斷或證理轉迷開悟の理法を知るに由なし故に此の一科は學佛の徒の爲めに最大必用なり學者とれ此の一科を以て修學の次第斷或證理の理法を了知せよ決して等閑に附し去る勿れ賢聖和等とは抑も佛道を修行する人々は皆共に戒法を受けて不和諍論なとすべからざる

ものなり故に皆々和合して親密にし修行すべきものなり梵には之を名けて僧
伽と云ふ此には和合と云ふ然るに五停心などの三賢の位に到る行者は殊に和
合の義勝るべきものなれば賢と云ふ賢とは賢和の義とて和合する義なりさて
此の和合に就いて二種あり一に理和合二には事和合なり理和合とは理は擇滅
無爲の理を云ふ一切の聖者がたは同じく擇滅無爲を證するが故に各聖者同一
に理和の義あり是れは見道已上の聖者がたのことなり今の正しく所用にはあ
らず二には事和合とは是れは有爲の事相の和合するを云ふ是れ今の正しく所
用なり是に六種あり一には戒和謂らく同じく戒を受けて共に戒を守ることな
り二には見和謂らく共に一師に隨ひ見解を同ふす三には身和四人已上同じく
住す四には利和謂らく分衛托鉢などして利益を平均にす五には謂らく共に和
して諍論などをせず六には意和謂らく相共に意見を同うして異心なきを云ふ
名義集の一卷五十五丁右に律鈔を引て曰はく此の和合に二義あり乃至意和し
て同じく悦ぶと云へり對見を要す聖謂聖正等とは正は即ち涅槃の理なり聖者
は此の理に於て決定を得るが故に聖は聖正を云ふなり即ち見道已上の無漏智
の起りし人を聖と云ふ所謂凡聖の別は無漏智の起不起に依るものなり故に見

道已前即ち世第一法の位までは凡位なり見道已上即ち苦法智忍已上は聖者な
りと知るべし然るに大乘義章十七本初丁に賢と聖との同異に就き三種を明せ
り一には賢と聖とは體同名異にして眼と目の異の如し二には賢聖は別體な
り大乘なれば地前三賢四善根を賢とし地上を聖と云ふとあり三には通局分別
賢は通なり即ち地前地上に通じて賢と云ふ聖は局なり見道已上に局り地前に
は通せざるなり(取)俱舍賢聖品の所明は大乘義章の第二の賢聖別體の義に當る
が故に通途は無漏智の起不起を以て凡聖を分ち三賢四善根の七加行の位まで
凡位にして賢とは云ふべし聖とは云ふべからず見道初無漏苦法智忍已去を聖
者と名づくべしと心得べし。

初七加行者。一五停心。二別相念住。三總相念住。四煖。五頂。六忍。
七世第一法。亦名七加行。入聖之方便故。

二には廣く賢聖の行位を明す此の中に二初には賢を明す二には聖を明す初の
中に三初には總じて七加行を標す二には別釋三には重ねて三賢四善根を分つ
今は即ち初なり初七加行等とは謂らく加行とは無漏聖道に悟入せんとする功
用の行を加ふるを云ふ世俗の所謂前支度と云ふ如きものなり即ち此の七加行

を修するは見道に入るの前支度なり加行と云ふは新譯家の立名なり舊譯家には七方便と云ふ方便とは唯識述記二末六十五丁右に四義を出しあり一には所以の義二には因の義三には安立施設の義四には善巧の義とあり今此の方便は彼唯識述記の第二の因の義に當る即ち三賢四善根の七方便は後の無漏道に入るべき因縁となる所以なり其の他方便を釋すること大乘義章十九卷十二丁には四義を以て釋し法華玄贊三卷二丁左等廣く釋あり若し詳知せんとせば進で對照すべし。

五停心者入修門略有五種謂多貪衆生不淨觀多瞋衆生慈悲觀多癡衆生緣起觀著我衆生六界觀尋伺衆生持息念。

二には別釋の中に二初には三賢を釋す二には四善根を釋す初の中に二初には五停心を明し二には四念住を明す初の中に二初には正しく五停心を釋す二には要畧の二門を明す今は即ち初なり五停心者等とは謂らく無漏の聖道を修行し悟入する門口に五種あり故に五停心と云ふ停とは息止安住の義とて貪等の五種の過失を息止め不淨等の五種の法に心をして安住せしむるを云ふ故に大乘義章十卷二丁に曰はく此の五は經には五度門と名づく度は出離至到の義なり

り此の五觀を修し能く貪等の五種の煩惱を出で、涅槃の處に到るが故に名けて度と爲す亦是停心とも曰ふ停は是れ息止安住の義なり貪等を息離して意を制して不淨等の法に住せしむるが故に停心と曰ふとありさて五停とは一には美人などの顯形の色を緣じて貪愛の多き人は不淨觀を修して其の貪煩惱を止む二には怨人などを緣じて瞋恚の多き人は慈悲觀を修して此の瞋煩惱を止む三には因果の理法を會せずして癡煩惱の多き人は十二緣起の理法を觀じて其の癡煩惱を止む四には我依身などを緣じて我執の多き人は六界觀を修して着我の執を止む六界とは地水火風空識なり此の我々の依身は皆是れ地水などの六界の假和合せしものにして決して眞我と云ふべきものなしと觀じて實我の執を止む五には種々境界に向て心が散亂し尋求し同察し寂靜ならざる人は持息觀を修して此の尋伺散亂の心を止む持息とは出入の息を觀するを云ふなり斯の如く應病與藥の法門にて五種の病あるが故に五種の藥を施して各自に貪等の煩惱の病を治し無病健全の無漏聖道に悟入するなり。

然最略要但二門。一不淨觀。二持息念。

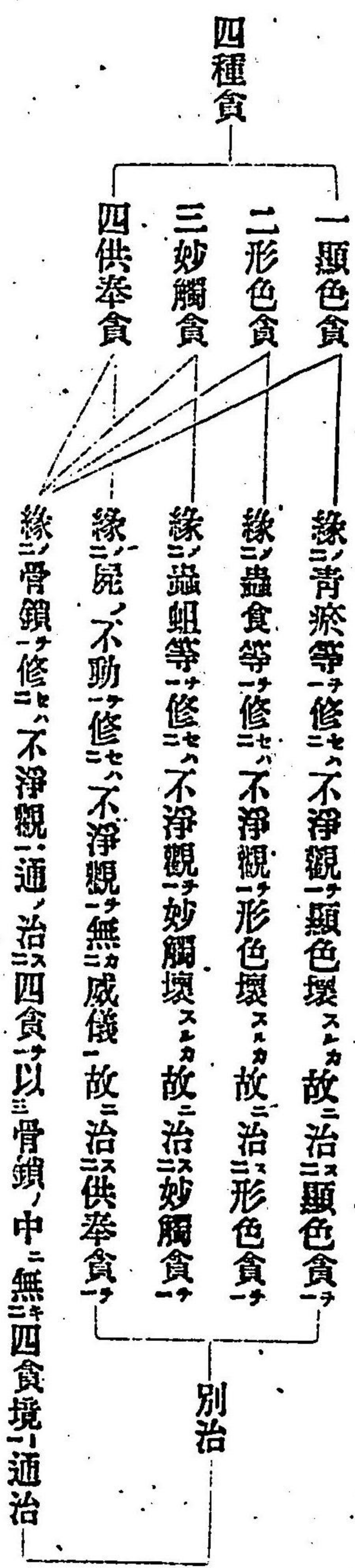
二には要畧の二門を明す此の中に二初には標二には釋今は即ち初なり上に明

せし五種の入修の門に就き最も畧せば肝要の入修の門は、但だ二門のみなり、故に惠暉五卷四十二丁右に、入修に就き、廣は八萬四千あり、中は五停心なり、要は二なりと云へり、即ち所對治の塵勞に八萬四千あれば、能治の法門も亦八萬四千ありと雖も、極々之を畧して至て肝要のもののみとせば、但此の不淨持息の二觀なりと云ふ意なり。

修不淨觀正爲治貪。貪有四種。一顯色貪。謂妙、青、黃等。二形色貪。謂好、形狀等。三妙觸貪。謂妙、軟、滑等。四供奉貪。謂妙、俯、仰等。若緣骨鎖、修不淨觀、通治四貪。以骨鎖中無四貪境故。

二には釋此の中に二、初には不淨觀を明す、二には持息念を明す、初の中に三、初に所對治の四種を明す、二には能對治の行相を明す、三には能對治の體性を明す、今は即ち初なり。修不淨觀等とは謂らく不淨觀を修するものは、正しくは貪煩惱を對治せんが爲めである、然るに其の所對治の貪に四種の不同あり、一には顯色貪とは男女相互に貪愛に耽り、互に其の面貌などの微妙なる青、黃、紅、白などの色を緣じて起る貪なり、二には形色貪とは互に形貌の長短、高下などの形狀を緣じて起る貪なり、三には妙觸貪とは男女互に其の膚などの柔軟にして微妙なる觸覺

あるに貪着を起すを云ふ、四には供奉食とは自分に供給し奉事して其の威儀の端正微妙なるを緣じて起る貪を云ふ、さて之に就いて論二十二卷十四丁に別治と通治とを明してある、今畧圖を以て其の相を示さん。



斯の畧圖の如く論文には別治と通治との二種を明しありと雖も、今記は但通治の一種を出せり、即ち骨鎖を緣じ不淨觀を修するものは通治なり、謂らく肉も皮も爛れ落ちて唯真白く骨のみ連鎖してあると觀するときは、今まで面色が白いか赤いとか美麗なとか貪着せし顯色貪も骨鎖に對しては起らず、乃至今までは立居動作が立派である、威儀が端正であるとか貪愛せし煩惱も此の骨鎖に對しては起らず、故に骨鎖を緣じて不淨を觀すれば通じて四種の貪を對治するなり。

謂觀行者欲修如是淨觀時。應先繫心於自身分。或於足指或額。或餘隨所樂處。心得住。已。依勝解力於自身分。假想思惟。皮肉爛墮。漸令骨淨。乃至具觀全身骨鏤。見一具。已。復觀第二。如是漸次。廣至一房一寺。一村一國。乃至徧地。以海爲邊。於其中間。骨鏤充滿。爲令勝解得增長。故漸略而觀。乃至唯觀一具骨鏤等。此爲不淨觀。

二には能對治の觀行の相を明す。謂觀行者等とは。謂らく上に明せし食等の五種の煩惱を對治せんが爲めに不淨觀を修せんと欲するとき先づ心をして自の身の何れの處にか繫ぐべし。繫ぐとは心を其の境界に括り附ける義なり。或は足の指とか。或は額ひとか。乃至其の餘處にでも自分の意樂どころに隨て心をして住せしむ。斯く自の身分に於て心が住し。已て後ち勝解の心所の力に依て自の身分を觀じて假りに思惟し分別して先づ皮肉爛墮して漸く自の身分をして白骨と觀じ自身の全體は骨鏤なりと觀せしむ。勝解の力とは眼識などを以ては白骨と觀すること能はず。故に第六意識相應の勝解の心所の力に依りて白骨なりと假想思惟せしむるなり。見一具。已等とは此れは漸廣觀の相を明す。謂らく上の如

く自の身分を漸々觀じて全く自の身分は不淨なる白骨なりと一具の身を觀じ已て復第二の身を觀じ第三の身を觀じて不淨なる白骨とならしめ乃至大地にも河海にも白骨充滿せりと觀するなり。之に就いて論廿二卷の十四丁には漸廣觀と漸畧觀と轉畧觀との三種の觀相を明せり。今記は唯漸廣と漸畧との二種のみを抄出せり。今文は正しく漸廣觀の文なり。若し婆娑論四十二卷二丁の意に依り其の相を釋せば不淨觀を爲す行者は先づ塚間などに行き能く死屍の青瘀或は骨鏤等の相を密かに視察して而かして後ちに自の觀床に歸り來り徐るに結跏趺坐し自の身心を調べ先きに審視せし青瘀骨鏤等の相を己れの身分に移し來り皮肉爛墮せしめ先づ足指の骨を觀じ次に踝骨次に脛骨を觀じ次に膝骨次に腔骨乃至髑髏の骨を觀す斯く全身を白骨に觀じ成し而して後に他身を觀じ漸々廣く觀じて一房をして白骨を充滿せしめ次に一寺一村一國をして皆白骨ならしめ乃至大地も河海も皆其の間に白骨をして充滿せしむ。是れ漸廣觀の相なり。爲令勝解等とは此は漸略の觀相を明すなり。上には一具の身より漸々廣く觀じて大地に徧せしめ大海を以て邊際として其の間に白骨をして充滿せしめたり。今は之に反し其の大地大海に徧在せし白骨を漸減漸畧して觀じ唯一具の

骨鏤とならしむ斯く若しくは一具の白骨より漸廣して大地大海に徧在せしめ若しくは大地大海に徧在せし白骨より觀じ漸減漸畧して一具の骨鏤とならしむるは全く勝解の心力をして增長し自在ならしめんが爲めなり之を不淨觀の行相と云ふなり。

此觀以大善地法中無貪爲性。

三には能治の體性を明す此の不淨觀は大善地法の中の無貪の心所を以て體性とす之に就いて婆娑四十卷七丁に曰はく問ふ不淨觀は何を以て自性と爲すや答ふ無貪善根を以て自性と爲す(第一)修定者は説く慧を以て自性と爲す契經に説くが如し眼色を見已て隨て不淨を觀ず觀は是れ慧の故に(第二)有餘師の説く厭を以て自性と爲す所縁を厭ふが故に(第三)評して曰く此の不淨觀は無貪善根を以て自性とす慧に非ず(非第二)厭に非ず(非第三)所以のもの何ぞや貪を對治するが故に若し眷屬を辯せば四蘊五蘊を以て自性とすと云へり即ち今記の抄出する所は婆娑評取の第一説に當る正義説なり然るに論廿二卷十五丁右には此の不淨觀に就いて八門分別を爲せり今や繁を恐れて畧圖を以て示さん。

不淨觀、八門分別

- 一體性 謂、無貪す。
- 二依地 謂、四靜慮、四近分定、中間定、欲界す。
- 三所縁境 謂、欲界一切、色境す。
- 四依身 謂、人、三洲(南、北、東)
- 五行相 謂、觀、不淨す。
- 六三世緣 謂、自世緣(過去、緣、過去)、(等也)
- 七有漏 謂、勝解作意、相應、故、有漏す。
- 八得 謂、通、離染得、加行得す。

問ふ不淨觀を修する初起は唯人趣の三洲にして如何んぞ天女等になさや答ふ婆娑四十卷七丁に云はく、尊者無滅天女に對して不淨を觀するも不淨勝解成せず天女の淨色も亦尊者を保すること能はず等の因縁に依りてなり。
二持息念者。即經中所説阿那阿波那念也。阿那此云持來。謂持息入。是引外風令入身義。阿波那此云遣去。謂持息出。是引內風令出身義。

二には持息念を釋す此の中に三初には名義を釋す二には體用を釋す三には修

相の圓滿を釋す、今は即ち初なり。二持息念等とは謂らく持とは憶持にして念の用を云ふ、即ち息の出入を憶持して觀念をなすこと、舊譯家の所謂數息觀なり、さて衆生の心は散亂龜動なるが故に坐禪して自己の出入の息を數へて漸々に心をして寂靜ならしむるなり、經とは雜阿含經の廿九卷二丁の文なり、阿那阿波那とは阿那とは此の土の語に翻せば持來と云ふ、即ち息を持して内に入る、義なり、是れ身外の風を引て身内に入らしむる義なり、即ち入息のことなり、阿波那とは此土の語に譯せば遣去と云ふ、即ち息を持ち出すを云ふ、是れ身内の風を引て身外に出さしむる義なり、即ち出息のことなり、斯の出入の息を數へて漸次に散亂の心を靜かならしむるが故に持息念とも數息觀とも云ふなり。

此正治亂尋以大地法中慧爲性。而名念者慧由念力觀此爲境故。

二には體用を明す、此の持息念は大地法の中の慧の心所を體性とし、能く散亂の尋伺を對治するを以て作用と爲すなり、而名念者等とは此の持息念は慧の心所を以て體性と爲すにも係らず、持息慧と云はずして持息念と云へるは慧は念力に由て此の出入の息を觀じて境と爲すが故に、即ち念の心所の助力に依り方め

て慧の心所が出入の息を觀ずるとを得るなり、故に念と云ふなり、其の理由は念の心所が一息二息等と息の數量を記憶するが故に、慧が一々それを觀じらるゝなり、若し念の心所が記憶せざれば慧の心所と其の息を觀ずることが出來ざるなり、故に慧を體とすれども同時の勝用ある念を以て名を立つるは隣近釋の得名と知るべし、論廿二卷に此の持息念を明すには八門を以て分別せり、今畧圖を以て其の相を示さん。

持息念八門分別

- 一釋名門 謂念持息念故名持息念實應名息念
- 二辨體門 謂以慧爲體
- 三依地門 謂五地即初二三定、近分、中間、欲界
- 四境界門 謂緣風
- 五依身門 謂欲界人、三洲(除北洲)六欲天
- 六辨得門 謂通離染得、加行得
- 七假實門 謂眞實作意相應
- 八内外門 謂内佛徒修之

又次に息の差別に就いて六門分別あり、今畧圖を以て其の相を示さん。

息差別
六門分別

- 一 依身門 謂隨身繫息身中風大ナカカ故
- 二 依息門 謂依身心一起開ヲ爲レ四
- 三 依情門 謂有情數ナリ
- 四 非執受門 謂非執ナリ與根離故
- 五 五類門 謂等流性ナリ同類因所生果ナカカ故
- 六 息觀門 謂自ト上地ト心ノ所緣ナリ

身差別
 一 有入出息之所依身
 二 毛孔開
 三 風道通
 四 入出息地、麁心現前
 心差別

上の所明の如く種々の義門差別あり、詳知せんと欲せば往て見るべし。
 此相圓滿由具六因。一數二隨三止四觀五轉六淨。

三には修相の圓滿を明す、此の中に二、初には標列、二には列釋、今は即ち初なり、此の持息念の修相の圓滿なるは、六種の因由を具足するときを圓滿の修相と名づくるなり、六種の因由とは一には數乃至六には淨なり。

數者謂繫心緣出入息。從一至十。此有三失。一數減失。於二謂一。二數増失。於一謂二。三雜亂失。於入謂出。於出謂入。離此三失。是名正數。中間錯亂復應從一次第數之終而復始。乃至得定。

二には初の數を釋す。數者謂繫等とは、謂らく數は數へることにて心を出入の息

に専ら止めて、數へ方の間違はぬ様に數へ、一より十に至り復た還りて一より十に至り幾度となく數へて決して間違ひのなきを正數と云ふなり、是に就き動もすれば左の三種の過失が起る、一には減數の過失とて二息を一息と謂ひ乃至十息を九息と謂ふなり、二には増數の過失とて之は上に反し一息に於て二息と謂ひ二息に於て三息と思ふなどを謂ふなり、三には雜亂の失とて入息に於て出息と思ひ出息に於て入息と思ふを云ふなり、已上の三種の過失を離れたるを正數と云ふ、若し亦中間に至て心が錯亂して數などが分明ならざるに至れば復應に一息より漸次に之を數へ十息に至り、數へ終て復一より始むべし、斯く幾度となく數へ幾千返に及ぶまで數息觀を爲せば終に定を得るなり、此の定は奢摩他にして欲界散の善心中の定の分際にして色界無色界などの定のことに非ず、下の文に七加行の中の前三は散善なりと云ふを對照し悉すべし、さて此の持息念の息を數ふるに就き入息を數ふるや出息を數ふるやと云ふに天台家などにては出入何れにもせよ宜きに隨て觀すと云ふ、今有部の意なれば先きに入息の五を數へ後に出息の五を數へて十となす、故に婆娑論の二十六卷十一丁に云はく、淨數とは五の入息に於て數へて五の入と爲す、五の出息に於て數へて五の出と爲

十二卷十丁等も亦之に同じ意味なり、今之を畧す。
隨謂繫心緣出入息不作加行隨息而行止謂繫念唯在鼻端或
眉間或足指隨所樂處安止其心觀謂觀察此息風已並觀息俱
大種造色及依色住心心所法具觀五蘊以爲境界轉謂移轉緣
息風覺安置後々勝善根中乃至世第一法位淨謂昇進入見道
等。

二には隨等の五因を釋す。隨謂繫心等とは謂らく此は第二の隨を釋す。隨とは息
風に任せておくこと、心を出入の息に繋ぎ止めて、出入の息のまゝに緣じて、加行
を加へず、即ち強て息をして緩ならしめたり、又強て息をして急ならしめたりす
ることなく、唯息に任せて現行せしむ、現行とは息を出入するを云ふなり、止謂繫
心等とは第三の止を釋す、止とは心を止め安くことなり、即ち心を鼻端とか或は
眉間とか或は足指とかに止め、とは自己の所樂の處に隨て其の心を安住せしむ

るを云ふ。觀謂觀察等とは第四の觀を釋す、觀とは觀察の義にて、息風を觀じ已て
而かして息風と俱時なる身内の能造の大種所造の五塵及び色を所依として住
する心王心所法までを觀察し、具さに色受想行識の五蘊を觀察し境界となす、此
の觀までは息念に屬するものなり、轉謂移轉等とは第五に轉を釋す、轉とは移轉
の義なり、即ち慧を移して後々の位に安く、後々とは四念住已去を云ふ、此の息を
觀察する覺慧を移して、後々の勝善根即ち四念住より乃至世第一法の位にまで
轉じ安くなり、去りて世第一法の位までも息風の觀慧を起すに非ず、然るに彼
の世第一法の位の觀慧は息風覺の増上に由て展轉して起るものなり、故に假り
に義を以て息風覺を移して世第一法にまで安くと云ふなり、喩へば大臣の位ま
で書生には非ざれども、書生が展轉榮進して大臣の位置となる、故に書生を轉じ
て大臣に安くと云ふとを得るが如し、淨謂昇進等とは第六淨を釋す、淨は清淨の
義にて無漏法を指す、即ち息風覺が展轉昇り進んで見道に悟入するなり、此も亦
上と同じ理にて、見道の無漏智が息風覺を起すに非ざれども、息風覺が増上する
に由て終に見道に入るが故に、假に息風覺が進んで見道に入ると云ふ等とは修
道無學道を等取するなり、息風覺が展轉進んで終には修道無學道まで到るなり、

由^二上^二門^二心便得定。此名修成。止已後爲觀修四念住。

(三百五十八)

二には四念住を釋する中に二初には釋次出體釋名初の中に二初には略して觀相を釋す、二には廣く總別相を釋す、初の中に二初には結前生後、二には正しく略釋す、今は即ち初なり。由上二門等とは上に明せし不淨觀と持息念との二の觀門に由て行者の心定を得る、定とは奢摩他なり、奢摩他とは梵語にて此には止と翻す、乃ち多食等を止むるは皆定の用なり、此より已下は觀を成せんが爲めに心受身法の四念住を修するなり、さて定の用は多食等の煩惱を止め或は持息念を以て散亂心を止むるのみ、然るに觀の用は諸法の性相の理法は簡擇するものなり、故に先づ上の二門に依て定を修し諸の煩惱を止め已に奢摩他を修成するが故に此に於てか毘鉢舍那を修し觀を成就して、一切諸法の道理を證せんとするなり、毘鉢舍那とは梵語なり、此に觀と翻するなり、是れ即ち結前生後なり、由二門云は結前なり、已後爲云は生後なりと知るべし。

一身念住。二受念住。三心念住。四法念住。治淨樂我常四顛倒故。謂觀身不淨。觀受是苦。觀心無常。觀法無我故。

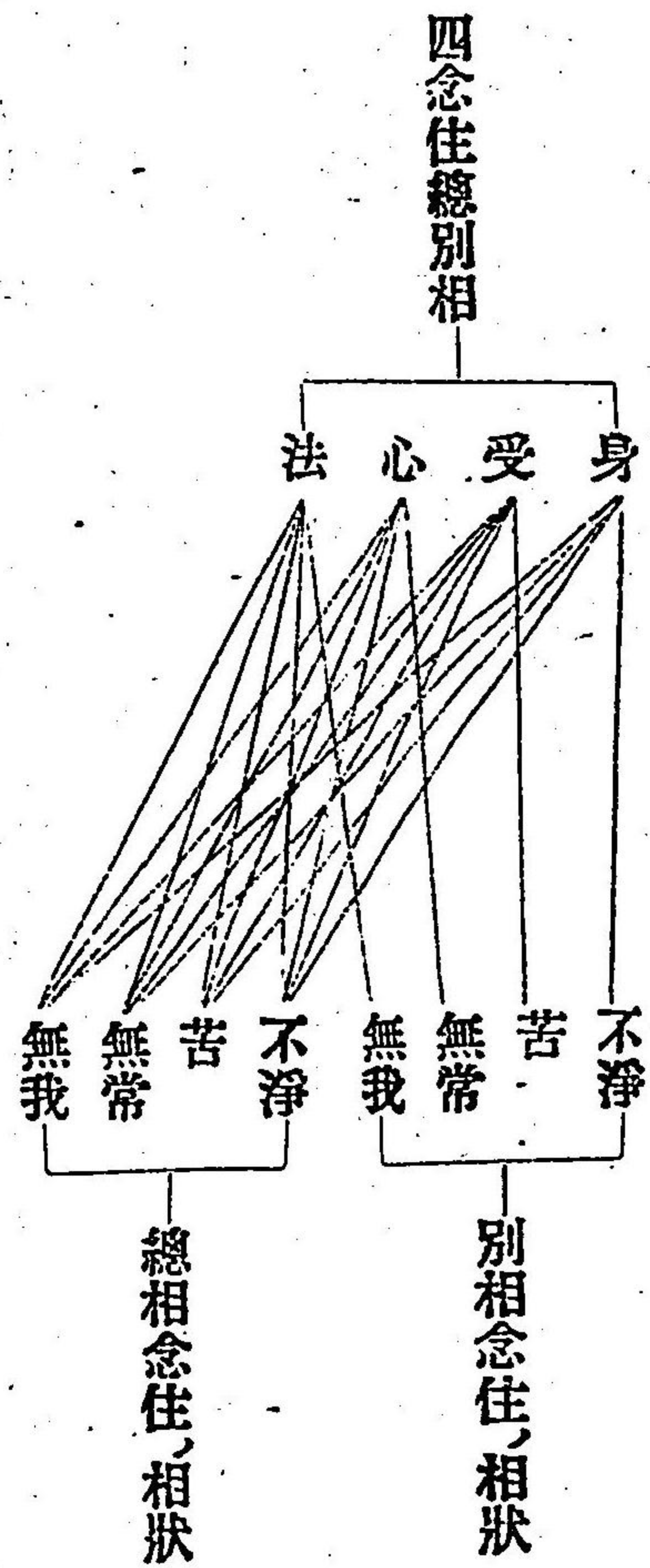
二には正しく釋釋す。一身念住等とは謂らく四念住は新譯家の立名なり、舊譯家

此有二種。一別相念住。二總相念住。

二には廣く總相別相の二念住を釋す、此の中に二初には標列、二には別釋、今は即ち初なり。此有二種等とは謂らく此の四念住を分つて二種とす、一には別相念住、二には總相念住なり、別相念住とは別は各別の義なり、即ち身受心法の四境不同にして、各々別々なるが故に別と云、相は能緣の行相なり、行相は自分の心の上に身受心法の四境を浮べるを云ふ、即ち身受心法の所緣の境を各々心の上に浮べ縁じて身は不淨なり、受は苦なり、心は無常なり、法は無我なりと各々別々に觀す、

除くなり。には之を四念處と云ふ、是れ七科の菩提分法の中の最初に列ねてあり、大小兩乘を論せず、觀行者の最初門とす、さて四念住とは凡夫外道の輩は一切の諸法の苦空無常無我の道理を知らずして淨樂我常の四顛倒の妄解を生ず、即ち不淨なるものを淨と思ひ、苦なるものを樂と思ひ、無我なるものを我と思ひ、無常のものを常住なりと思ひ、顛倒の見解を起し、これに由て惑を起し業を造り生死に流轉す、故に佛道行者は先づ觀門の最初に四念住を觀して、吾身は是れ不淨なり、受は是れ苦なり、心は是れ無常なり、法は是れ無我なりと觀じ以て淨樂我常の四顛倒を除くなり。

るを別相念住と云ふ、總相念住とは總は時に一身受心法の四法を合して緣じ此の身受心法は四法ながら皆不淨なり、四法ながら皆苦なり等と觀す、猶し別觀總觀と云ふが如し、故に總別相の名を分つなり。



初別相念住。或以自相。或以共相。觀身受心法。

二には別釋の中に二初には別相念住を釋す、二には總相念住を釋す、初の中に二、初には自共相の觀を明す、二には雜不雜緣を明す、初の中に二、初には標、二には釋、今は即ち初なり、初別相念住等とは謂らく初の別相念住とは身受心法の四法の自相を別々に觀じ、或は身受心法の共相を別々に觀するなり、さて自相共相とは古

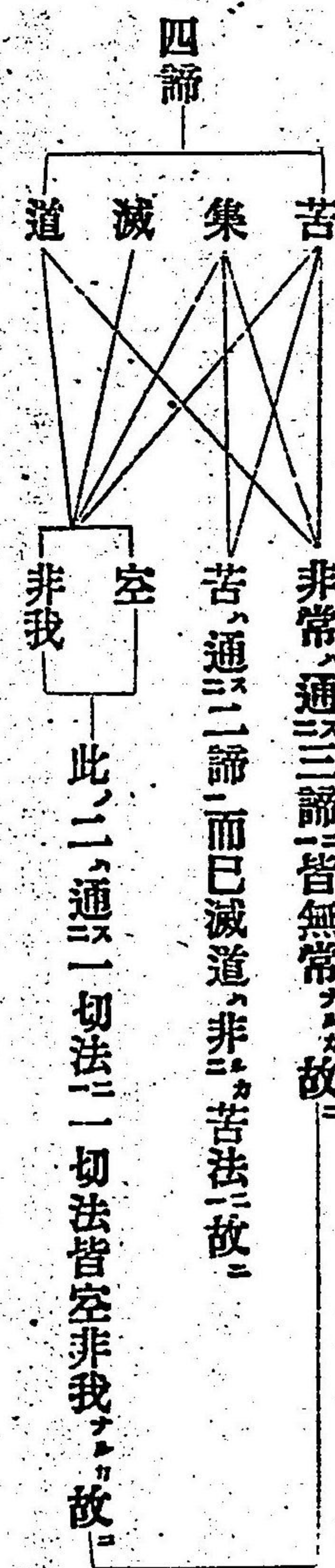
自相別觀者。大種造色是身自性。受是受性。受是心性。除此三外、所餘諸法、名法、自性。

二には釋の中に二、初には自相別觀を釋す、二には共相別觀を釋す、今は即ち初なり、自相別觀等とは謂らく身受心法の四法を各々別々に其の自性を觀するなり、即ち身の自性は能造の大種及び所造の五塵なり、即ち五根と五塵となり、乃至身受心の三法を除きし餘の一切法は皆是れ法の自性なりと各々別に觀す、故に自性別觀と云ふ。

共相別觀者。謂且觀身與餘有爲同、非常相。與餘有漏同、是苦相。與一切法同、空非我相。受等亦爾。解云非常、通道諦、苦性、唯苦集

諦。空非我通四諦及空非擇滅。

二には其相別觀を釋す。其相別觀等とは謂へらく其相別觀を以て身受心法の四法を具さに觀する相を釋すべきを先づ且らく其相別觀の相を釋せば此の身と餘の有爲法とは皆同じく非常なりと觀す(非常は廣く通するが故苦集道の三諦を攝じ身と餘の一切の有漏法とは皆同じく是れ苦なりと觀す(苦は狭きが故に唯苦集二諦の有漏法のみ同居)又身と餘の一切の法とは皆同じく空なり非我なりと觀す(空非我は至て廣くして一切有爲無爲の法皆空非我ならざるはなし一法として非空のもの及び實我のものなし故に空非我は四諦及び虛空無爲非擇滅無爲までを攝じ)受等亦爾とは身法が餘の一切法と非常苦空非我なりし如く受心法の三も亦餘の一切法と同じく皆非常苦空非我なりとは身に準じて知るべし。解云。非常等とは非常等の相の通局を示すなり。今圖を以て示さん。



通局相應知

さて上に畧して明せし自相別觀と今明せし其相別觀とに就き古來圖あり今此に示さん。



又有雜緣不雜緣。四中前三唯不雜緣。第四所緣通雜不雜。若唯觀法名不雜緣。若於身等二三或四總而觀察名爲雜緣。

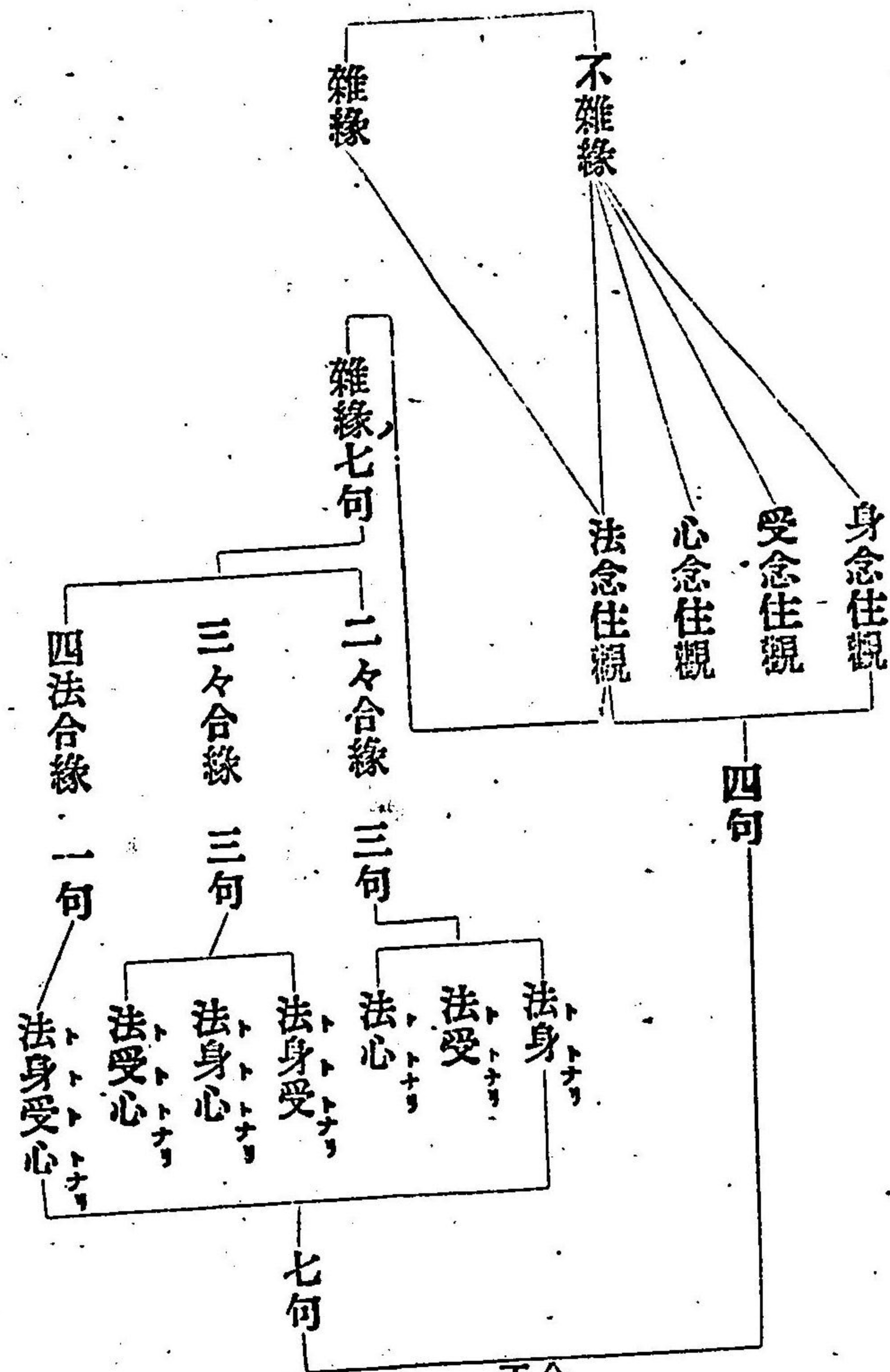
二には雜緣と不雜緣とを釋するに二初には正しく釋し二に句數を以て釋す。今は即ち初なり。又有雜緣等とは謂へらく此の別相念住の中に於て雜緣と不雜緣と云ふことあり。雜緣とは境を雜へ緣するを云ふ。不雜緣とは境を雜へ緣せずし

て唯一法のみを縁するを不雜縁と云ふなり。さて此記の釋は慧暉の謬りを傳へしものなれば未だ穩かならず。故に今は光記二十三卷の正義説に據りて辯すべし。此の身受心法の四念住の中にて前の身受心の三法は唯不雜縁に限るなり。即ち身念住は唯身の一法を縁して身は是れ不淨なりと觀じ、受念住は唯受一法を縁じて受は是れ苦なりと觀じ、心念住は唯心の一法を縁じて心は是れ無常なりと觀じて、決して身と受と一時に合觀するとか受と心と合縁するなどのなきを云ふ。若し身と受と雜へ縁するときは最早や身念住受念住の名は失して法念住と云ふべし。合縁するときは法と云ふ名が附く故に前三念住は唯不雜縁にして雜縁に通せざるなり。第四所縁等とは此の第四の法念住の所縁は雜縁と不雜縁との二種に通ず。とは前の身受心の三法を除いて餘の心所不相應無爲等を縁するは不雜縁なり。唯法の一を縁するが故に、又或は身と受と合縁し或は身と心と合縁等の如きを雜縁と云ふなり。即ち二々合縁も三々合縁も四法合縁も皆雜縁なり。次下の句數分別の下に詳なり。

解云。四法一一別縁爲四句。名不雜縁。二二合縁爲三句。謂一法身。二法受。三法心。三三合縁爲三句。謂一法身。受。二法身。心。三法

受心。四法合縁爲一句。此雜縁也。

二には句數分別を以て釋す。解云。四法等とは謂らく此の句數分別に就いて、諸未疏の説不同なり。今記は惠暉の説に依り十一句を以て分別せり。俱舍論光記は總して十五句を作れり。要解師は十四句を作れり。然るに光記の十五句の説最も盡理なり。惠暉今記及び要解の説は何れも非なり。先づ今記の説を畧釋し以て其の非を辯じ、次に光記の正義説を辯せんとす。今記の釋は身受心法の四法を各々別々に縁するを以て不雜の四句とす。是れ可なり。然るに二々合縁三々合縁を各三句とし二々合縁にもあれ三々合縁にもあれ皆必ず法念住と合縁するものと執せり。是れ元と惠暉六卷初丁の謬説に出でしものにして、獨り今記主の罪とのみには非らざるなり。然るに惠暉と今記との異りは惠暉は三々合縁を二句とし、今記は三々合縁を三句となすなり。今記の説に依り圖示せば、



合爲三十一句今記不正義也

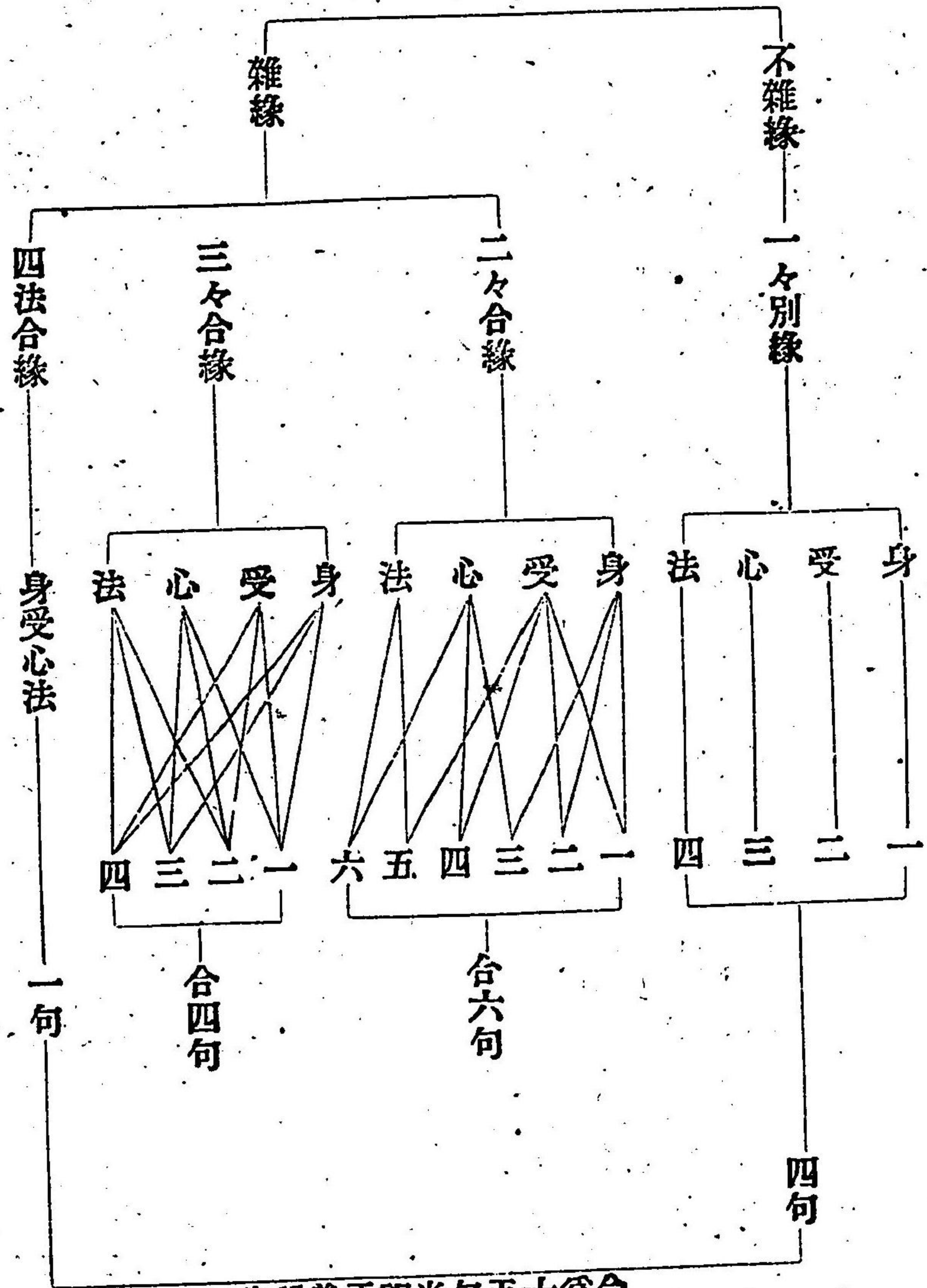
今記所執の如く二々合縁にもあれ三々合縁にもあれ必らず法念住と合縁するが故に法念住には雜縁不雜縁の二種に通すと云は、前三念住も亦雜縁不雜縁の二種に通すべし如何となれば且らく身念住の雜不雜に通すべしと云ふを示さば唯身の一法を縁するときは身念住の不雜縁なるべし若し身と受と合縁し

身と心と二々合縁するが如きは身念住の雜縁なるべし若しも前三念住も雜縁に通すと云は、論の二十三卷の前三唯不雜縁と云ふ自教の文に違するなり故に今記の釋は未盡理なり次に光記二十三卷の盡理說に依りて釋せば身受心法の四種何れにもせよ唯一法のみを縁するは不雜縁なり或は二々或は三々或は四法と合縁するときは雜縁と云ふ而かも二法已上縁するものは皆是れ法念住と名つくるなり例せば身と受との二法の合縁の如きも法念住と名けて身念住とは云はざるなり決して今記等の如く必ず法と合するを以て法念と云ふには非ず苟も二法已上合縁するときは何れの法にもせよ法念住と云ふなり故に前三念住は唯不雜縁にして第四の法念住のみ雜不雜の二種に通するなり故に光記の正義說に依りて今記の本文を改り正して左の如くせよ。

解曰。四法一一別縁爲四句。名不雜縁。二二合縁爲六句。一身受。二身心。三身法。四受心。五受法。六心法。三々合觀爲四句。一身受心。二身受法。三身心法。四受心法。四法合觀爲一句。是雜縁。故總合爲十五句。

此の改めし光記の文に依りて圖示せば

已上畧して雜不雜に就き正不正を判せり學者とれ再三熟讀し以て悉すべし決して等閑に附し去る勿れ。



次總相念住者。此但四合緣故。總雜法念住也。前別相位有雜緣者。或二三四。今唯總相緣四。故與前別。

二には總相念住を釋す。次總相念等とは謂へらく此の總相念住は身受心法の四法を總合して緣じ此の四法は非常なり苦なり空なり非我なりと觀するが故に總雜法念住と云ふなり。次上の別相念住の中の雜緣は或は二々合緣三々合緣四法合緣などの別あり。今は爾らず唯總相に四法を合緣するのみ。故に前の雜緣とは各別なりと知るべし。

此四念住亦以大地中慧爲性。而名念住者。慧令念住。是故於慧立念住名。隨慧所觀念能明記故。

二には出體釋名なり。此四念住等とは謂らく此の四念住も亦大地法の中の慧の心所を以て體とするなり。亦とは上に明せし持息念に亦するなり。即ち上の持息念も大地法の中の慧の心所を以て體となせり。今此の四念住も亦慧の心所を以て體とする。と云ふ意なり。而名念住等とは此れは釋名なり。既に大地法の中の慧の心所を以て體とせば何が故に四慧住と云はすして四念住と云ふやとの疑難あり。是れを通釋するに就き論に一説を擧げたり。今記の擧る義は論主の正義説

なり、即ち四念住は慧を以て體と爲せども慧が念を住せしむ故に念住と云ふ、是れ念の果に從ひて名を立つるなり、即ち慧は能く念をして境に住せしむる能合のものなり、念は慧の爲めに境に住せしめらるゝ所合のものなり、所合の果の名を能合の因の上に立つるものなれば隣近釋なり、畧圖を以て二義の相を示さば、

一云此品念増故是念力持慧得轉義(是從果) 並隣近釋也

二云理實應言慧念住故於慧立念住名(是從果)

上に明せし五停心別相念住總相念住との三を三賢の位と云ひ、又資糧位の位とも云ふ、即ち聞思の位なり。

第四煨法者、修總相念住、已次生煨善根。此法如煨立煨法名。聖道如火能燒惑薪。聖火前相故名爲煨。

二には四善根を釋す、此の中に三初には正しく四善根を釋し、二には四善根の勝利を明す、三には四善根の體性を明す、初の中に四初には煨法を明し、二には頂法を明す、三には忍法を明す、四には世第一法を明す、初の中に二初には得名を釋す、二には觀行を明す、今は即ち初なり、第四煨法等とは謂へらく第四煨法と云ふは七加行の中に於て煨法は第四に位するが故に今茲に第四と云ふか、然るに今記

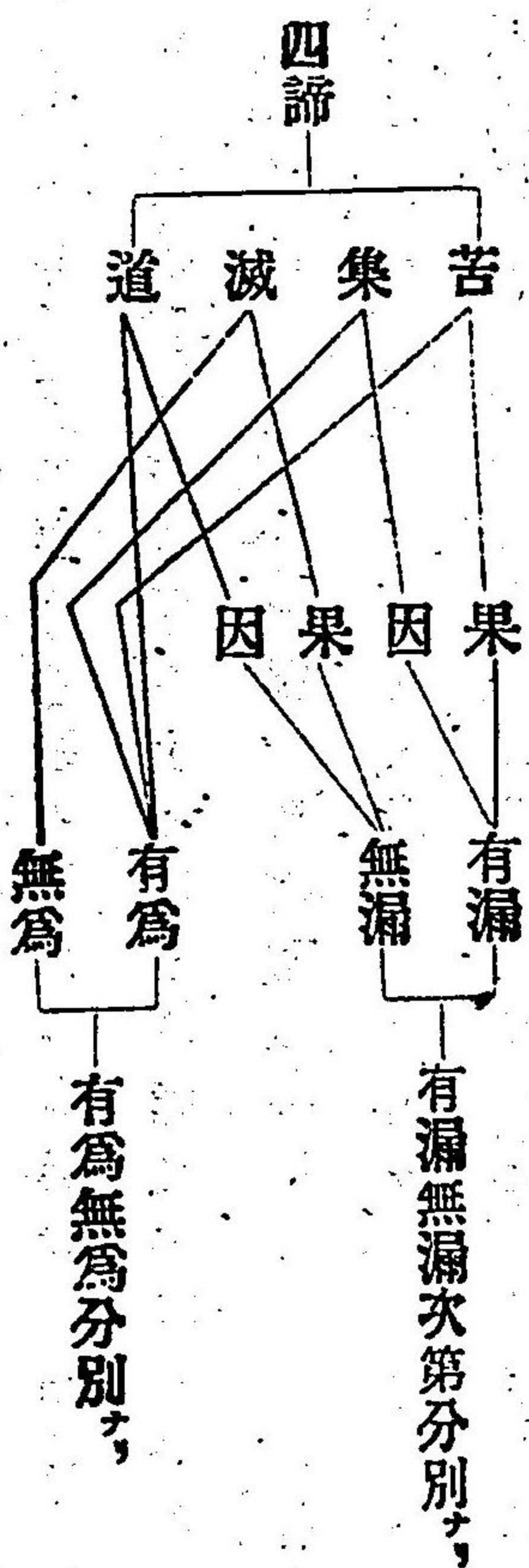
の前後の文例に準ずるに、何の處にも第一第二などの標目なし、獨り煨法のみ、第四と云ふは文體を破りたるものなり、故に第四の二字は削除して可なり、さて煨善根とは上の總相念住を修し已り漸々と修行が進み來り、將さに無漏の聖道が起らんとする位なり、然るに此の煨善根も亦大地法の中の慧の心所を以て體とす而かも煨と名づくるは喩に約して名を立てしものなり、火の能く薪を燒き盡すが如く、無漏の聖道は能く一切の煩惱を斷盡するなり、火を聖道に喩へ、薪を煩惱に喩ふるなり、即ち四加行位の初位に至れば稍と觀解が勝れ、無漏見道の聖火の前相として、有漏の觀慧が起り具さに四聖諦の理を觀するなり、是れ即ち聖火の前相なれば煨法と名づくるなり、さて聖道とは無漏智を指す、是れ涅槃の果に赴くべき因路なれば道と名づく、眞理に契ふが故に聖と云ふ、聖即道の持業釋なり。

此善根分位長故、能具觀察、四聖諦境、及能具修十六行相。觀苦聖諦、修四行相。一非常。二苦。三空。四非我。觀集聖諦、修四行相。一因。二集。三生。四緣。觀滅聖諦、修四行相。一滅。二靜。三妙。四離。觀道聖諦、修四行相。一道。二如。三行。四出。

二には觀行を明す、此の中に二初には正しく觀行を明す、二には行相の義を釋す、今は即ち初なり、此四善根等とは謂へらく此の四善根の中の初の煥善根より初めて四聖諦を觀す、此の煥位は修行の時間長さが故に能く具さに四聖諦の理を觀じ十六行相を修するなり、四聖諦とは所緣の境を擧げ、十六行相とは能緣を擧るなり、四聖諦とは正しく聖者がたの觀すべき法なるが故に聖諦と云ふなり、茲に十六行相と云ふと雖も理實には欲界の四諦の下の十六行相と上界の四諦の十六行相と涉り觀するが故三十二行相となる、其の相狀を示さば、先づ欲界の苦諦を觀じて非常なり苦なり空なり非我なりと觀じ、次に上界の苦諦を非常なり苦なり空なり非我なりと觀じ、又次に欲界の集諦を因なり樂なり生なり緣なりと觀じ、次に上界の集諦をも因樂生緣の四行相を以て觀じ、滅諦道諦も亦各々八行相を以て觀す、即ち上下八諦の境を各々四行相を以て觀するが故に、四八三十二行相となるなり、行相とは光記一餘三十三丁に釋して曰はく、所緣の境界の影像が能緣の心上に現じたるを云ふ、心々所は明淨なる鏡の如きものなれば境界に對する時能緣の心々所の上に其境の影像が其の儘現るなり、一例を示さば眼識を以て青黃な色の境を緣するとき、其の青黃の心外の境の影像が其の儘眼識

上に現るなり、其の現れし青黃などの影像を能緣の行相と云ふなり、若し大乘なれば之を心中現の相分と謂て所緣に攝屬さつぷくひ小乘は能緣に攝屬さつぷくひ今苦諦を緣するときは能緣の心々所の上に苦諦の影像が現す是を行相と云ふなり、他は準じて知るべし、さて四諦を畧辨せば初の苦諦とは諸の有漏の五蘊の果を指す即ち我々の身體等なり、之を苦と名くるは苦々壞苦行苦の苦あるが故なり、即ち欲界の衆生には苦々壞苦行苦の三苦皆あり、色界の衆生には苦々はなしと雖も壞苦行苦の二苦あり、無色界の衆生には色身なきが故に苦々壞苦の二苦はなしと雖も刹那々に遷流し無常なるが故に行苦の一あり、故に三界皆苦と云ふなり、即ち三界の衆生の身體などは皆苦諦に攝するなり、集諦とは諸の有漏の因を指す即ち三界生死の苦果を感ずべき感業を指すなり、樂は招集の義とて、三界生死の苦果が因となりて當果を招き集むるものなり、さて此の苦諦と集諦とは其の體を論せば相違のものに非ず、同じく我々の五蘊の色心を以て體となすなり、若し此の五蘊の色心を過去の業に望むれば苦諦となり、未來の苦果に望むれば集諦となるなり、謂らく此の我々の五蘊の色心の法は皆是れ過去世の善惡業に報いたる果なれば苦果の依身と云ふ、即ち苦諦に攝めらる、又此の我々の色心の善惡

業に由り未來の果を得るものなれば未來の果に望めては因となるが故に集諦に攝ひべし之を苦集是一物因果差別故と云ふ即ち苦諦と集諦とは其の體を論ずれば一物體なれども唯因となるも果となるとの差別のみと云ふ意なり滅諦とは無漏の聖智の爲めに證得せられたる果にして有漏の繫縛を滅盡せる擇滅無爲の法と云ふ即ち涅槃の果なり道諦とは無漏の聖智にして擇滅無爲の涅槃の果を得べき因なりさて諦とは種々の義釋あれども今唯一義を擧れば眞實不妄の義なり苦諦は苦に相違のなきこと集諦は三界生死の果を招集するに相違のなきことなるが故に諦と云ふなり餘の二諦も準知せよ今畧して四諦を分別圖示せば、



問ふ何が故に此の四諦は果を前にし因を後にするや答ふ凡て果は麗顯なるも

のにして知り易し因は微隱にて知り難し故に果を前にし因を後にするなり。釋此相義者待緣故非常逼迫性故苦違我所見故空違我見故非我如種理故因等現理故集謂因果集果令現也令果相續理故生成辨理故緣譬如泥團輪繩水等衆緣和合成辨瓶等諸蘊盡故滅貪瞋癡三火息故靜無衆患故妙脫衆災故離通行義故道契正理故如正趣向故行能永超故出。

二には行相の義を釋す釋此相義等とは謂へらく初の苦諦を觀するに四の行相あり一には非常なりと觀す此苦果の法は六因四緣などの衆多の因緣を待て生ずるが故に刹那々に遷流して常住不變の法に非ず故に非常なりと觀するなり二には苦なりと觀す此の苦諦は苦々壞苦などの苦みあり其の衆苦の爲めに逼迫り惱まざるものなれば苦なりと觀するなり三には空なりと觀す大乘の法空とは全く異れり注意せざるべからず此の苦諦は我所見に相違す此の我所有的ものなきを空と云ふのみ我所有的ものとは我が爲に須ふる所の具なり然るに一切萬法の中に於て求むるも一個の常住なる我體なるものなし即ち諸法は無我である既に我體なければ我所有的のものも亦無なり其の我所有的の法のな

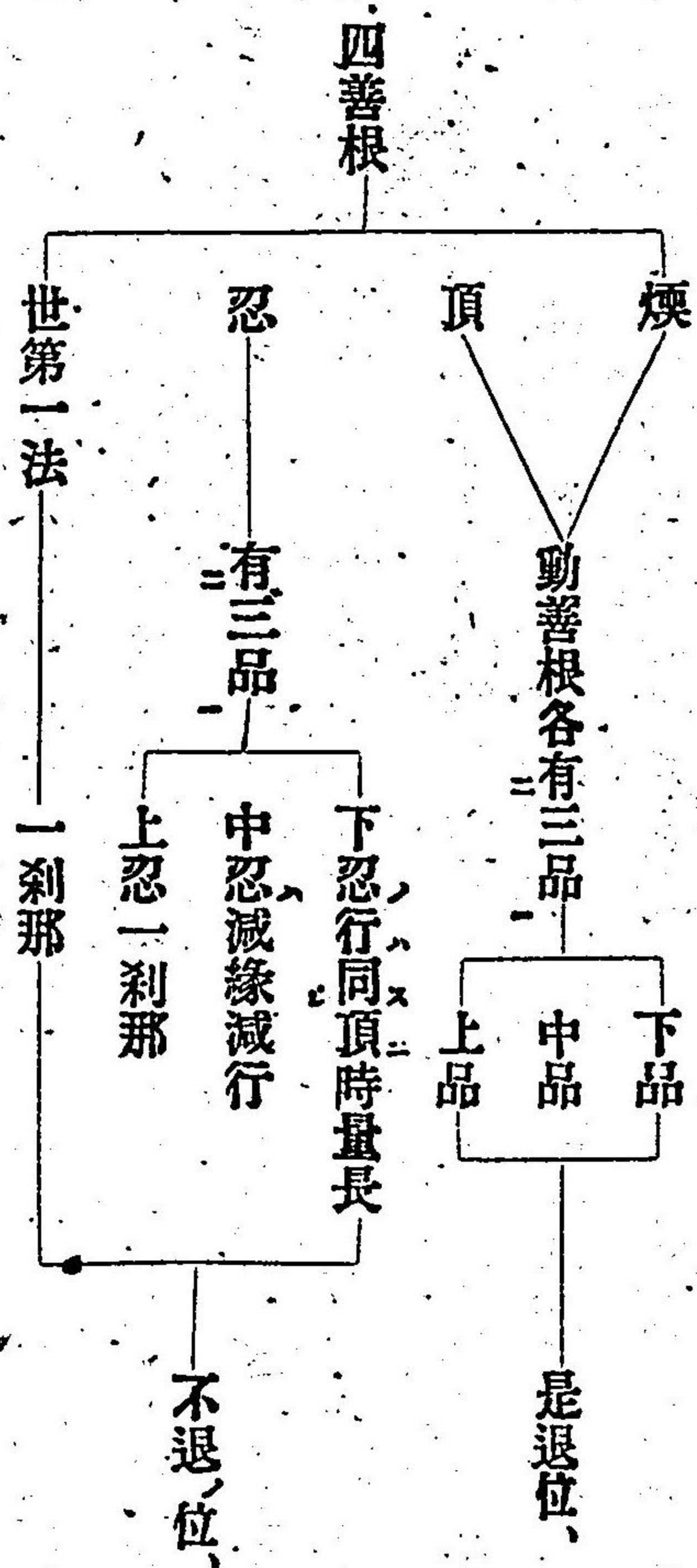
きを且らく空と云ふなり、法體は空無なりと云ふには非すと知るべし、四には非我也と観ず、此の苦諦は我見に違す我々凡夫の輩は無始より已來此の苦果の依身を執して我なりくと我見を起しつゝあるなり、然るに此の苦諦は五蘊假和合のものにして、決して常一主宰なる實我なるものなし、故に非我と観するなり、此の非我と空とは獨り苦諦のみに非ず餘の三諦にも通ずと雖も且らく勝れに就き苦諦に屬す、如種理故等とは集諦の四行相を明す、一には此の集諦は因なりと観ず、此の集諦は煩惱業にして能く當來生死の苦果を生ずること恰も種の芽を生ずるが如し、故に因なりと観ず、三には集なりと観ず、此の集諦即ち惑業の力に由て能く當來の苦果を招き集め現せしむるなり、故に集なりと観ず、三には生なりと観ず、此の集諦は能く當果を引て相續せしむ即ち生死相續せしむるなり、故に生なりと観ず、四には緣なりと観ず、此の集諦は能く當果を成辨する緣となること喩へば泥團と器械の輪などの衆緣が和合して一個の瓶等を生ずるが如く、能く此の集諦即ち惑業は當果を生ずる緣となるなり、故に緣なりと観ず、なり、諸蘊盡故等とは滅諦の四行相を釋す、一には滅なりと観ず、此の滅諦涅槃の理は五蘊の繫縛が盡き一切の煩惱が離れ寂滅なるものなれば滅なりと観ず、二に

は靜なりと観ず、此の滅諦は貪瞋癡の三毒の火焰が息滅するが故に靜なりと観ず、三には妙なりと観ず、此の滅諦涅槃の理の上には衆多の過患なく即ち憂喜苦樂尋伺入息出息など八災患を離れたるものなれば妙なりと観ず、四には離なりと観ず、此滅諦は生老病死などの衆災を離脱するが故に離と観ず、なり、通行義故等とは道諦の四行相を釋す、一には道なりと観ず、此の道諦は通行する義なり、即ち無漏智に由て涅槃の都に通行するを道と云ふ、二には如なりと観ず、如に如實とか契如とかの義ありと雖も今は契如の義なり、即ち無漏智は苦は苦なりと知り、非常は非常なりと知り、道理に契合ふが故に如と云ふなり、故に道は如なりと観ず、なり、三には行なりと観ず、行は進趣の義なり、即ち無漏智に由て邪路に馳す直に涅槃の果に進趣するなり、故に道は行なりと観ず、四には出なりと観ず、出は出離の義なり、即ち無漏道諦に由て永く三界生死を離脱超出するが故に道は出なりと観ず、なり、

此煖善根下中上品漸次增長至成滿時有善根生名爲頂法。此亦如煖具觀四諦及能具修十六行相煖頂二善根俱名動善可退動故動善根中此法最勝如人頂故名爲頂法。又忍位是進煖

位是退。此頂在進退兩際猶如山頂故名爲頂。

二には頂法を釋す、此の中に二初には釋名、二には初後の修相を明す、今は即ち初なり。此煥善根等とは謂らく上に明せし煥善根を下中上の三品に漸次に修行し即ち智の明昧に依て三品と分つ、煥法の最初の智は稍々蒙昧なるが故に下品と云ふ、漸次に智が明了になるを中品上品と云ふ、斯く下中上の三品次第に増進して煥位成滿する位に至て更に一の善根が起るを頂善根と云ふ、是れ煥法が益々進み轉た明了になるが故に別名を立つるなり、此の頂法も亦上に明せし煥善根の如く時量が長さが故に、具さに上下の四諦即ち八諦の境を觀し、上下各々十六行相を修す、即ち三十二行相を以て上下八諦の境を觀するなり、煥頂二善等とは上に明せし煥法と此の頂法との二善根は俱に動善根と名づく、退動するが故に此の動善根の二種の中にては頂法最も勝れたること人の體中にて頂の最も勝れたるが如し故に頂法と云ふ。又忍位是等とは、是れ後義なり、後義の意は、忍と世第一法とは前に進んで退かず、又煥法は退墮するものなり、此の頂法は忍世第一法の進と煥の退との進退の兩際にあること猶し山の絶頂の如きが故に、頂法と名づく、婆娑論六卷初丁に云はく、山頂には人久しく住せず若し此れ諸難なければ更に餘山に至る若し諸難あれば還て退下するが如し、是の如く頂位の中に至て必ず久しく住せず、若し諸難なければ進んで忍位に至る、若し諸難あれば還て退して煥に住すと云へり、さて四善根の退と不退との位を圖示せば、



右の圖の如く、煥頂の二善根は退くことあり故に動善根と云ふ、忍と世第一法との二善根は退轉することなく、必ず見道に入るなり。

如是、二善根初安足時、皆法念住、後増進時、通四念住。謂見道中唯法念住、見道速疾、無容別觀、故以此煥頂位順見道、故初安足、唯法念住、後増進時、稍容豫、故得通修四念住也。言初安足、

者最初遊踐四聖諦迹也。

二には初後の修相を明す。如是二善等とは謂へらく次上に明せし煥頂の二種の善根は初安足として觀行の最初の間は法念住なり、何んとなれば此の煥頂の二善根の初位は具さに上下の四諦を觀じ十六行相を修す、此の四聖諦觀は必ず法念住なり、其の所以は苦諦を觀するも有漏の五蘊を總じて苦非常等と觀じ集諦等を觀する亦復斯の如し、故に此の二善根の初安足の時は皆法念住なり、後ち増進の位に到ては身受心法の四念住に通ずるなり、謂見道中等とは此の煥頂二善根の初安足の時唯法念住なる所以は此の二善根は見道に順すればなり、見道は刹那觀にして速疾の觀行なれば別々に身受心法を觀する猶豫なく唯總じて四聖諦の境を苦なり非常なり等と觀す、總じて苦なり非常なり等と觀するは法念住なり、今此の煥頂の位は見道に順する觀なるを以ての故に見道の如くに此れも亦法念住なり、後増進時等とは此煥頂の二善根が後ちに漸々増進し即ち觀行が進步せし時に到ては觀行が稍々容豫ゆるぎになるが故に通じて四念住を修することを得るなり、即ち別して色蘊を觀する如きは是れ身念住なり、受蘊を別觀するが如きは是れ受念住なり、識蘊を別觀するが如きは是れ心念住なり、通じて身受心

法を觀するが如きは是れ法念住なり、此の煥頂の二位は見道に稍々遠きが故に法念住のみに非ずして餘の三念住が雜るなり、次下の忍位の如きは爾らず稍々見道に近きが故に唯法念住のみなり、下に到て知るべし、言初安足等とは初めて四聖諦の境を觀せしことを云ふ、四聖諦迹の語は雜含十五卷十七丁に出づ、四諦は恰も象の四個の足跡の如し、故に四諦を足跡に喩へて四聖諦迹と云ふなり、左れば四諦を觀するは象の足跡を踐み行くが如くなるが故に、初めて觀するを初安足と云ふ歟。

此頂善根下中上品漸次增長。至成滿時有善根生名爲忍法。於四諦理能忍可中此最勝故。又此位忍無退墮故名爲忍法。

三には忍位を明す、此の中に二初には釋名、二には觀行を釋す、今は即ち初なり、此頂善根等とは謂らく次前の頂法が漸次に下中上品と増進し觀慧が明了になり來り頂法成滿の時に至りて一の善根生ずることあり之を名けて忍法と爲す、於四諦理等とは此の忍の得名に就いて二義あり、第一義は忍は忍可の義とて、なるは苦諦は苦空非常非我なものであると認許し、なるは集諦は集因生縁のものであると認許し滅道二諦も各々認許決定して自分の心に印持するを云ふ今

記の文相に依れば忍可の義あることは煖法より起れり、即ち既に煖法の位より四聖諦の理に於て認許決定する心はあるなり、然るに今此の忍法の位が認可する中に於て最も勝れるが故に獨り此の位に忍と云ふ名を與へたるものなり、又第二義の意に依れば忍可の力強くして能く忍持し耐忍して退墮することなきが故に名けて忍法と爲す、即ち之れは耐忍の義なり、然るに今家の通途の釋に依れば第一義の忍可の義を以て勝となす、玄義四六二二十四丁等には耐忍の義と出しあり、但し今家の所用に非らざる歟。

此忍善根初安足後増進唯法念住近見道故初與後皆法念住已上三善根皆能具緣三界苦等後世第一法唯觀欲苦然此忍法有下中上品下中二品與頂法同謂具觀察四聖諦境及能具修十六行相上品有異唯觀欲苦與世第一相隣接故。

二には觀行を釋す、此の中に二初には總じて明し、二には正しく明す、今は即ち初なり、此忍善根等とは謂らく此の忍善根は次上の煖頂の二善根と殊にして初安足も亦は後ち増進する位と皆唯法念住なり、即ち觀行の最初も後ち漸々進歩したるときも何れも唯總じて四聖諦の境を觀し苦諦を觀しては苦なり空なり等

と總じて觀し、集諦を觀しては集なり因なり等と總じて觀する等なり、此れは後の見道と隣近なるが故に、見道は速疾の觀解なり、故に唯法念住なり、今の忍法は見道に隨順し隣近なるが故に、又見道の如く法念住なり、故に初安足にもあれ、後ち増進の時にもあれ、皆唯法念住なり、已上三善等とは已上に明せし煖と頂と忍との三善根は皆能く具さに三界の苦等を觀するなり、即ち此の三善根は具さに最初欲界苦諦の下の苦の行相より乃至最後に上界道諦の下の出の行相即ち上下八諦の境を四八三十二行相を以て緣するなり、後の世第一法の位は唯欲界の苦を觀するのみなり、とは次下に明す、滅緣滅行にて緣を滅じ行を滅じて唯欲界の苦の一行を止むるが故なり、然此忍法等とは然るに此の忍法にも亦下と中と上との三品あり、其の三品の中に於て下と中との二品は上に明せし頂法と同じく具さに上下八諦の境を緣じ及び能く具さに十六行相を修するなり、但上品に到ては異にして唯欲界の苦を緣するのみ、即ち中忍品の時に滅緣滅行して唯欲の一行を止むるのみなれば、上品の忍と世第一法とは唯欲界の苦諦の下の一行を以て苦諦を觀するのみなり。

今略明忍位下中上品者若下品忍具觀四諦修十六行。

二には別釋此の中に三初には下品の忍を明し、二には中品の忍を明し、三には上品の忍を明す、今は即ち初なり、此の下品の忍の位は、未だ減緣減行せざる位なれば具さに上下八諦の境を觀じ、四八三十二行相を修す、謂らく最初欲界苦諦を觀するに非常なり、苦なり空なり非我なりとの四行相を以て觀じ、次に上界の苦諦を觀するも亦同じ、次に欲界の集諦を觀するに因なり集なり生なり緣なりとの四行相を以て觀じ、次に上界の滅諦を觀するも亦同じ、次に欲界の滅諦を觀するに滅靜妙離の四行相を以て觀じ、次に上界の道諦も亦道如觀じ、次に欲界の道諦を道如行出の四行相を以て觀じ、次に上界の道諦も亦道如行出の四行相を以て觀するなり、此の下品の忍の位に於て斯く上下八諦の境を各々四行相を以て觀すれば、四八三十二行相を以て觀するものなりと知るべし。

中品忍位減緣減行。上下八諦名之爲緣。所緣境故。上界四諦有十六行。欲界四諦有十六行。總計合成三十二行。名之爲行。能緣行故。謂欲苦上苦。欲集上集。欲滅上滅。欲道上道。各有四行。

二には中品の忍を明す、此の中に二初には緣と行との差別を示す、二には正しく漸畧の相を明す、今は即ち初なり、中品忍位等とは、謂らく此の中品の忍の位に於

て所謂減緣減行を明すなり、上下八諦の境之を名けて緣となすなり、緣とは所緣の義にて、緣せらるゝ境を云ふ、即ち欲界の四諦の境と上界の四諦の境とは觀行者の所緣の境なるが故に、緣と云ふなり、又上界の四諦を觀するにも十六行相を以て觀じ、欲界の四諦を觀するにも十六行相を以て觀じ、上下八諦の境を觀するに合して三十二行相を以て觀するなり、行とは行相のことにて、能緣のことなり、

餘文は解し易し、知るべし。

如其次第從後向前減行減緣。第一周以四行相觀欲界苦。如是乃至以四行相觀欲界道。後以三行觀上界道。減上界道下一行。相第二周以二行觀上界道。復減一行。第三周以一行觀上界道。復減一行。第四周以四行相觀欲道。諦不觀上道。名曰減緣。減緣之時亦雖減行。減緣攝故。不名減行。如上道諦餘七諦亦爾。唯於緣中不除欲苦及與一行。總而言之。上下八諦。諦減三行三八二。十四周減行。七周減緣。唯留欲苦及與一行。解云。緣行名殊。故云。留欲苦及與一行。其實唯一行相。何以知之。云二十四周減行。七周減緣。故又寶法師釋云。乃至欲界苦下三行各減行。所緣已。唯

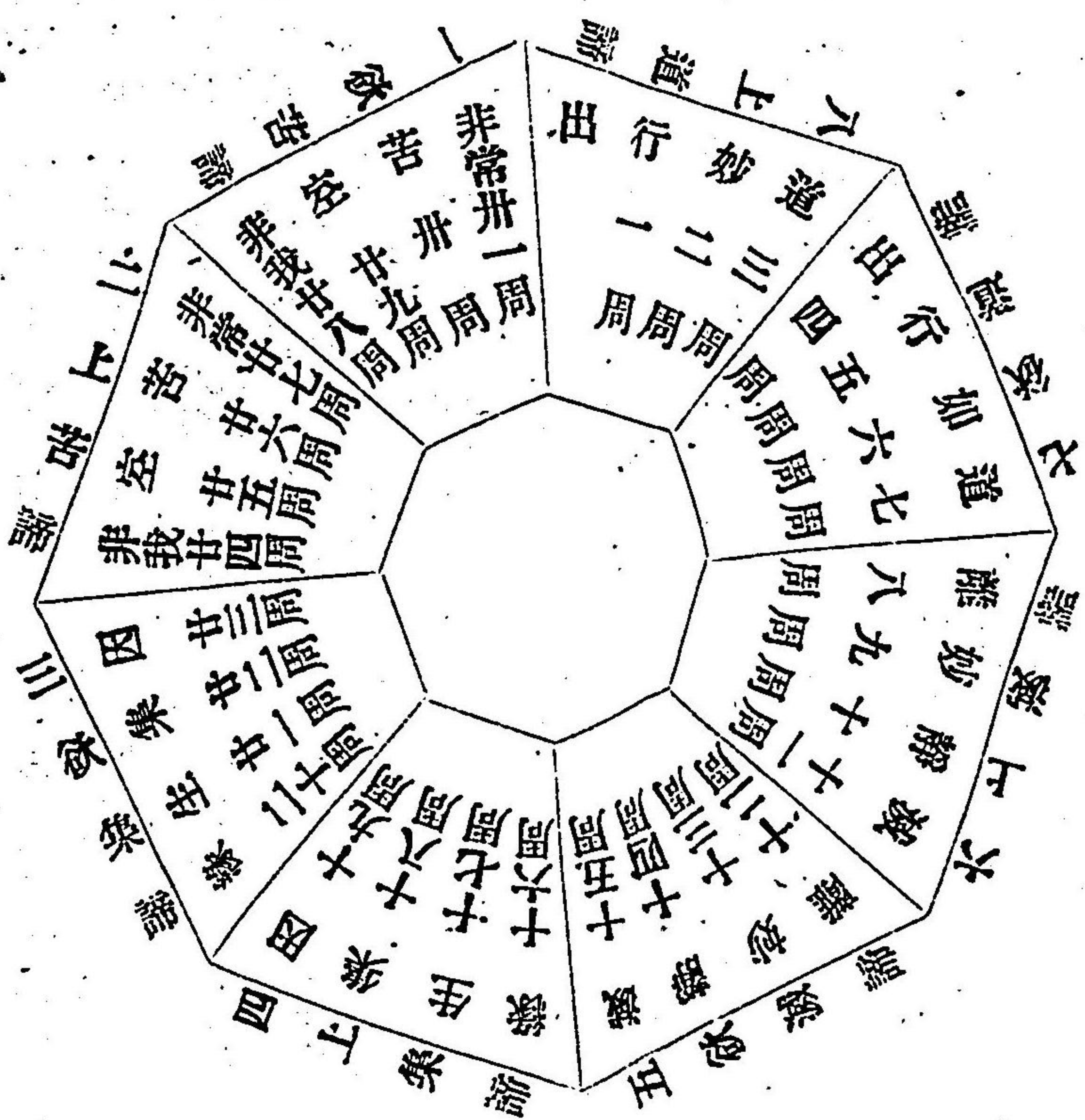
一行二念名爲中。此減將滿時二刹那心以觀二行。減已中忍正滿時唯餘一行。此所餘一行有二刹那心觀。一卽上忍。一卽世第一也。

二には正しく漸畧の相を明す。如其次第等とは謂らく此の中品の忍位に於て減縁減行を明すなり。此の減縁減行に就き古來の學者各々異議を立て春蘭秋菊各各其の美を競ひ是非の評判も亦一定せざるなり。今や此減縁減行を釋せんとするに略して四門を以て分別せんとす。第一には減縁減行の所爲。第二には正しく減縁減行の相狀を示さん。第三には異説を擧げ示し。第四には正不を判せんとす。初に所爲とは此の減縁減行は何の爲めに爲すやと云ふに婆娑論五卷十八丁に曰はく譬へば人あり己が國より他國に適かんと欲するとき多くの財産あり持ち去る能はず遂に以て錢に易へ猶其の多きを嫌ひ復以て金に易へ猶其の重きを嫌ひ復以て大價の寶珠に貿易へ此の寶珠を持し意の往かんと欲する所に隨ふが如し行者も亦然り先づ廣く上下の四諦を觀察し後ち之を漸畧し乃至唯一刹那を以て苦界の苦を觀じ次に世第一法を生じ次に法智忍を生じ展轉乃至道類智を生ずと云へり。第二正しく減縁減行の相狀を示すとは今此の本文は正しく減縁減行の相狀を明せし文なり。減縁減行とは光記二十三卷に曰はく能縁の邊に望めては減行と云ふ所縁の邊に望めては減縁と名くと云へり。茲に減ずるとは修せざるることなり。而かして減縁も減行も皆次の如く後より減じ始めるなり。先づ第一周到に非常なり苦なり空なり非我なりとの四行相を以て欲界苦諦を觀じ次に又非常苦空非我の四行相を以て上界の苦を觀じ次に因なり集なり生なり縁なりとの四行を以て欲界の集諦を觀じ次に又因集生縁の四行相を以て上界の集諦を觀す。次に減なり靜なり妙なり離なりとの四行相を以て欲界の減諦を觀じ次に又減靜妙離の四行相を以て上界の減諦を觀じ次に道なり如なり行なり出なりとの四行相を以て欲界の道諦を觀じ次に又道如行の三行相を以て上界の道諦を觀じて上界道諦の下の出の一行相を減ずるなり。卽ち出の一行相をば修せざるなり。第二周も亦第一周の時の如諦欲界の苦諦より順次に觀じ來り上界道諦の下の道如の二行を以て上界の道諦を觀じ行の一行相を減ず。第三周も亦第一周の如く欲界苦諦より觀じ始め順次に上界道諦の下の道の一行を以て上界の道諦を觀じ如の一行を減ず。第四周も亦欲界苦諦より觀じ始め順次に欲界の道諦の下の四行相を以て欲界の道諦を觀じて上界の道諦をば觀せ

く減縁減行の相狀を明せし文なり。減縁減行とは光記二十三卷に曰はく能縁の邊に望めては減行と云ふ所縁の邊に望めては減縁と名くと云へり。茲に減ずるとは修せざるることなり。而かして減縁も減行も皆次の如く後より減じ始めるなり。先づ第一周到に非常なり苦なり空なり非我なりとの四行相を以て欲界苦諦を觀じ次に又非常苦空非我の四行相を以て上界の苦を觀じ次に因なり集なり生なり縁なりとの四行を以て欲界の集諦を觀じ次に又因集生縁の四行相を以て上界の集諦を觀す。次に減なり靜なり妙なり離なりとの四行相を以て欲界の減諦を觀じ次に又減靜妙離の四行相を以て上界の減諦を觀じ次に道なり如なり行なり出なりとの四行相を以て欲界の道諦を觀じ次に又道如行の三行相を以て上界の道諦を觀じて上界道諦の下の出の一行相を減ずるなり。卽ち出の一行相をば修せざるなり。第二周も亦第一周の時の如諦欲界の苦諦より順次に觀じ來り上界道諦の下の道如の二行を以て上界の道諦を觀じ行の一行相を減ず。第三周も亦第一周の如く欲界苦諦より觀じ始め順次に上界道諦の下の道の一行を以て上界の道諦を觀じ如の一行を減ず。第四周も亦欲界苦諦より觀じ始め順次に欲界の道諦の下の四行相を以て欲界の道諦を觀じて上界の道諦をば觀せ

ざるなり此の時を減縁と云ふ何んとなれば上界の道諦の一縁即ち一の所縁の境を減ずるが故に減縁と云ふなり此の減縁の時實は道なりと觀する能縁の行をも減せば減行とも云ふべしと雖も減行は減縁の攝なるが故に但減縁と云ふて減行とは云はざるなり故に麟池に曰はく此の縁と行とは名異體同なるが故に此の八縁も亦是れ行の攝なり謂らく所托に約して之を名けて縁となし行解の相狀之を名けて行となす縁と行と合して一なりと云へり此の上界の道諦を三周にして行を減じ一周に縁を減じ而かも減縁の時も減行の義はありと雖も唯減縁とのみ名けて減行と名けざるが如く餘の七諦も亦爾り即ち餘の七諦を減縁減行するも亦上界の道諦の如く三周に行を減じ一周に縁を減じ而かも縁を減ずるときにも行を減ずる義はありと雖も唯減縁と名けざるなり斯の上下八諦の境に各々三周に行を減じ一周に縁を減ずるが故に七周に縁を減じ二十四周に行を減ずると云ふなり即ち欲界苦諦の下の一行を留むるが故に欲界苦諦の一をば減縁せず上下八諦の中欲の苦諦の一を除くが故に七周に縁を減ずると云ふ又上下八諦に各々四行相あり實を尅せば四八三十二周に減行すと云ふべしと雖も三十二周の中欲界苦諦の下の一行をば留めて減せず故に三十一周と

なるなり又其の三十一周の中七周の減縁を除くが故に二十四周となるなり故に七周に縁を減じ二十四周に行を減ずると云ふなり斯く二十四周に行を減じ七周に縁を減じ合して三十一周にして上下八諦を減縁減行し即ち最後の第三十一周には唯欲界苦諦の下の非常なりとの行相を起して苦の一行相を減じ又闇み直して更に非常なりとの行相を起す乃ち其の時に局りて再度同じく非常なりとの行相を起す是れ此を一行二刹那の觀を以て中忍の滿位と云ふ今畧圖を以て其の相狀を示さば



此の圖と上の説明とを對照熟考し、次で漸畧の相狀を知るべし。
 第三には異説を擧げ示さん、此の中忍滿する位に二行二刹那を觀するか、一行二

刹那を觀するか、此れが古今の異論なり、先づ一行二刹那の説文を出さば、婆娑論
 五卷十七丁、舊婆娑論四卷四丁、妙立三之二、俱舍論寶疏廿三卷八丁、釋籤三之二十
 二丁、四教儀集註中卷二十四丁等なり、次に二行二刹那の文を示さば、大乘義章十
 一卷三丁、俱舍論頌疏二十三卷九丁、釋籤三之二十二丁等なり、次に唯二刹那と云
 て一行とも二行とも云はざる文を擧ぐれば、新俱舍論二十三卷五丁、舊俱舍論十
 六卷、順正理論六十一卷、顯宗論三十卷、文句六之二、光記廿三卷等なり。
 第四に正不を判せん、次上に明す如く、中忍滿する位に、一行二刹那を觀するか、二
 行二刹那を觀するか、何れの義を以て正と爲すや、答ふ古哲未だ容易に正不を判
 せず、末學豈に容易に正不を判して可ならんや、然りと雖も、且らく古哲の指南に
 依り一行二刹那の義を以て正義となす、問ふ若し爾らば何を以て頌疏等に二行
 二刹那と云ふや、答ふ、此の文を會釋するに、西谷名目の眞超鈔には總じて五義を
 出せり、其の第五義に云はく、頌疏及び釋籤等に二行と云ふは文字の寫誤にして
 一の字なるべしと云へり、況や頌疏などは非常の誤謬の多き書なり、信を置き難
 きこと、豈此の一事のみならんや、既に婆娑俱舍などの論疏の中に一行二刹那の
 文證あり、學者とれ異求することなかれ、然るに今記の中に唯一行二念と云ふは

好し但し上忍と世第一法とに寄せて論ずるは不可なり今案するに中忍の満位に於て一行二刹那の心觀あるべし然るに中忍已外の上忍世第一法に寄談するの理あらんや。

中忍無間起勝善根。一行一刹那名上品忍。

三には上品の忍を釋す。中品の忍の位に滅緣滅行して唯欲界苦諦の下の一行相を留めたり故に此の上品の忍の位に来て其の留めし一行を以て觀するなり。若し中忍の満位に非常の行相を留めたる行者なれば此の上忍の位に於ても亦非常を以て一刹那を觀するなり。

上品忍無間生世第一法。亦如上忍。一行一刹那。言世第一者。此有漏故名爲世間。是最勝故名爲第一。此有漏世間中勝。是故名爲世第一法。有士用力離同類因引聖道生故名最勝。

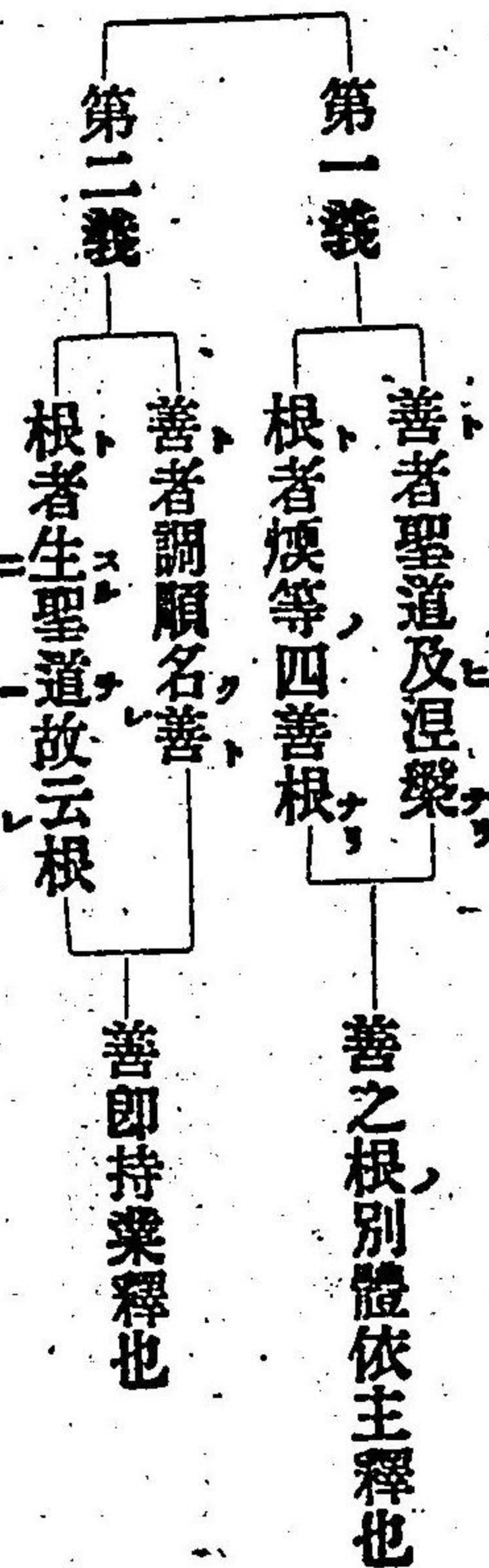
四には世第一法を釋す。上品忍無等とは謂へらく上品の忍の次刹那即ち上品の忍の無間に世第一法の善根を生ず。此の世第一法も亦上の上品の忍の如くに又一行一刹那なり。即ち滅緣滅行の時に留めし一行を以て一刹那間の觀心なり。言世第一等とは世は世間のこと毀壞すべき義なり。即ち四相の爲めに毀壞せられ

及び無漏能對法の道の爲めに毀壞せられる。此の二義を具するものを世と名づく。第一とは第は居の義なり。即ち一番に居ると云ふことにて最勝の義となるなり。此の世第一法の善根は有漏の世間の中にて最勝位なるが故に世第一と云ふ。得名を釋せば先づ世第一の三字を釋せば世が第一の同體簡濫の依主釋なり。世第一法の四字釋せば世第一即法の持業釋なり。有士用力等とは此の世第一法は何が故に有漏世間の中に於て最勝なるかと云ふにそは有漏の世第一法に強勝の作用ありて能く見道の無漏智を引き起す力あり故に最勝と云ふ。此の世第一法の前までは同類因等流果とし前念も有漏後念も有漏にして前後同類の法なりしに今は爾らず前念の有漏の世第一法が能く後念の見道の無漏智を引き起すなり。即ち前念は有漏後念は無漏にて前後異類である故に同類因を離れて後念の聖道を引くと云ふなり。

此四善根。若得煥法。雖有退斷善根。造無間業。墮惡趣等。而無久流轉。必至涅槃。

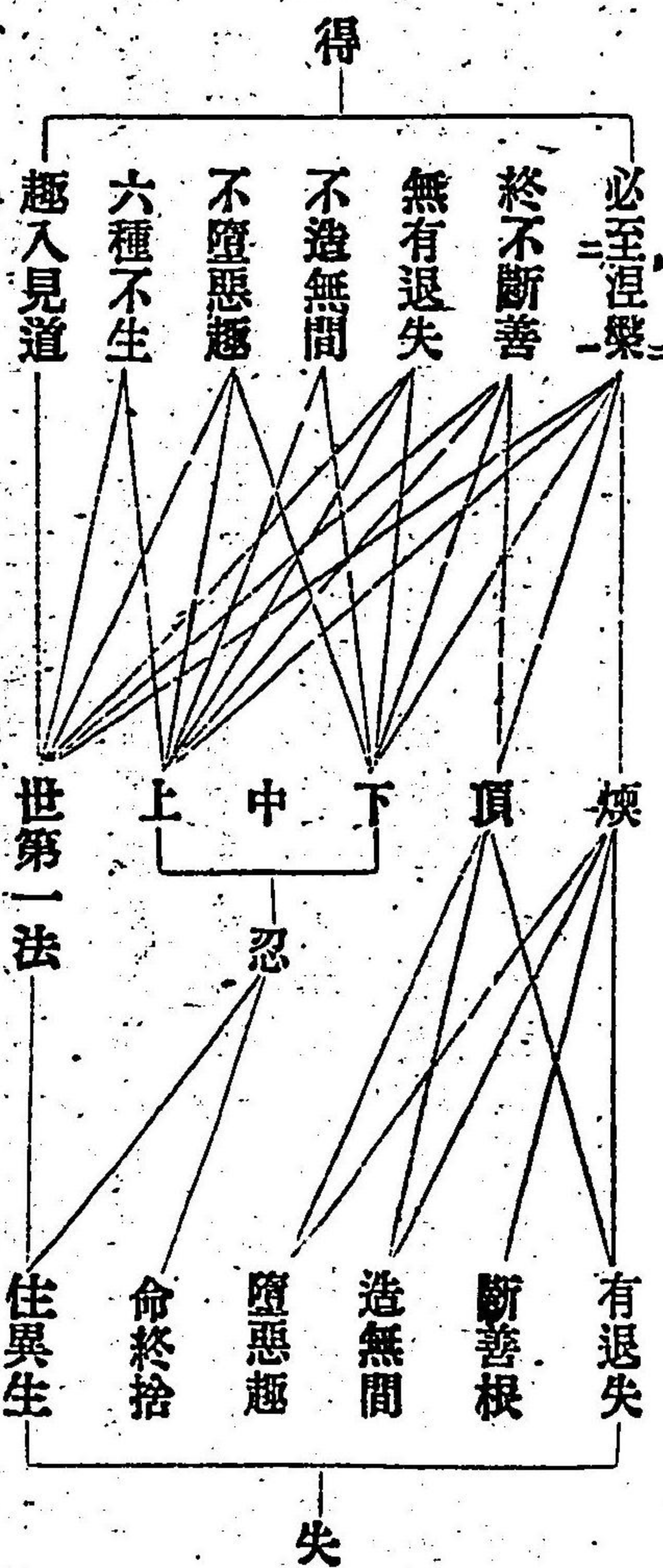
二には四善根の勝利を明す。此の中に三初には煥善根の勝利を明す。二には頂善根の勝利を明す。三には忍善根の勝利を明す。今は即ち初なり。此四善根等とは謂

へらく上に明せし煥等の四善の中にて若し行者煥善根を得しければ設ひ異縁に遇ふて退て因果の理を廢無して無間地獄の業因を作り惡趣に墮するなどのことありと雖も必ず久しく惡趣に墮し生死に流轉するとなくして涅槃の妙果に至るなりさて善根とは婆娑論の六卷中に曰はく聖道は是れ善なり涅槃は是れ善果なり煥等の四善根は是れ彼の初の基なるが故に善根と名づく又此の四種(煥等の)調順を善と名づく能く聖道を生ずるが故に根と名づくと云へり即ち二義の意に依り得名を釋せば、



更に四種善根の得失を圖示せば左の如し。

若得頂法雖有退等而增畢竟不斷善根。



二には頂善根の勝利を明す。若得頂法等とは謂へらく頂法を得せば三失二徳あり三失とは一には退あり二には五無間業を造るなり無間とは樂の間ることなきを云ふ三には惡趣に墮す二得とは一には涅槃に至る二には善根を斷せず畢竟とは必ずと云ふことなりさて増すとは増加の義にて即ち勝得の前の煥位より増進することを云ふ。

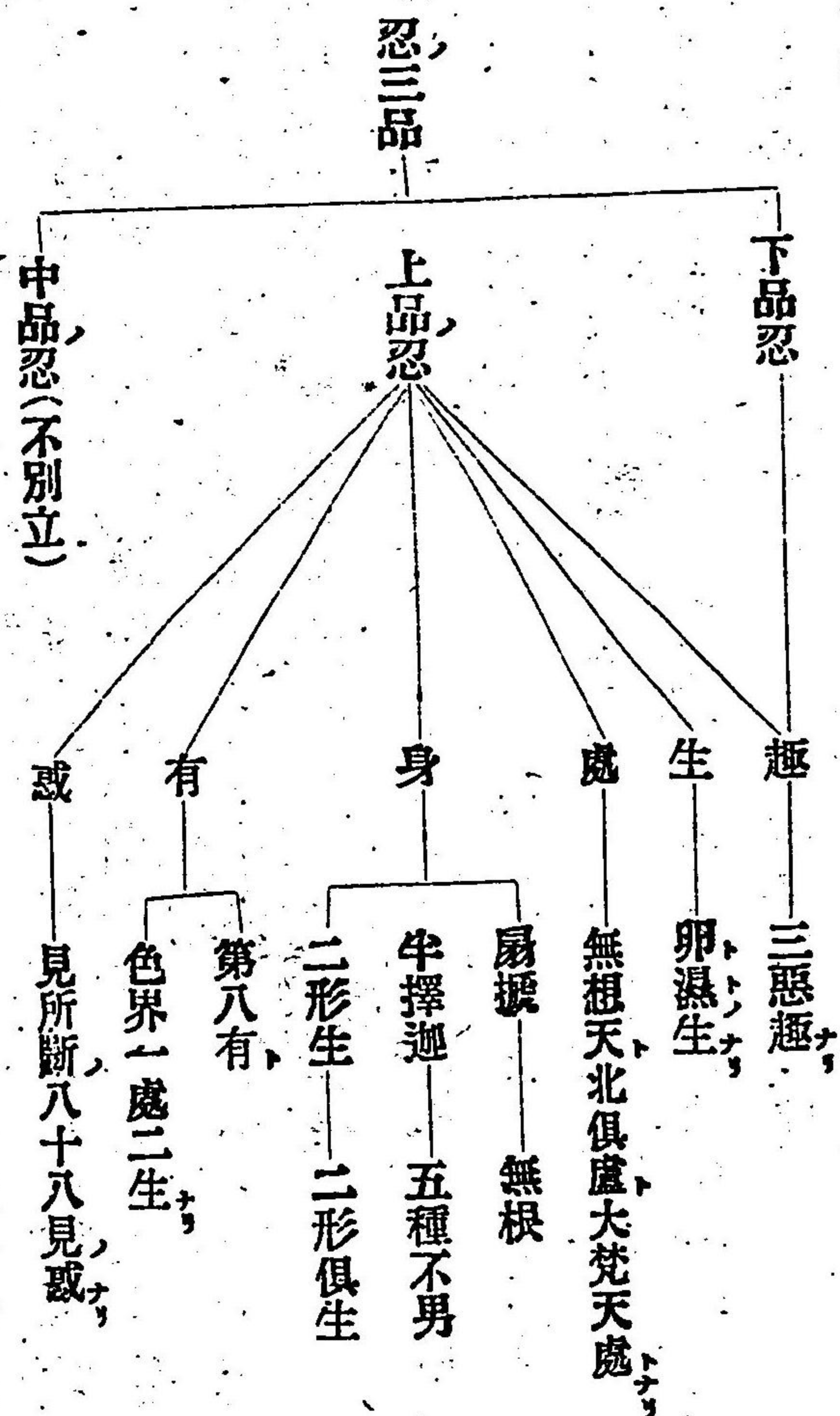
若得忍時雖命終捨住異生位而增無退不造無間不墮惡趣。

三には忍善根の勝利を明す此の中に二初には二失三徳に約す二には六不生に

約す、今は即ち初なり。若得忍時等とは、爾へらく若し行者が忍位を得たるときは、二失三徳あり、二失とは一には命終捨として凡夫が未至定に入りて忍善根を修したるも命終したるとき其の忍善根を捨す、是を失同分捨とも名く、是れ命終せば同分をも捨す故に隨て善根をも捨するなり、但し聖者には失地捨はあれども命終捨はなし、然るに捨に二種あり、一には退捨、是は惑を起して善根を捨するものと云ふ、二に命終捨、是は命終して善根を捨するを云ふ、前の煥善根を得し人は退捨と命終捨との二捨ともあり、今の頂善根を得たる人には唯命終捨のみありて退捨なし、二には異生に住す、此の忍位の人未だ凡夫たることを免れず、即ち内凡の位なり、さて異生に就いて婆娑論四十五卷二丁左に曰はく、尊者世友、是の如き説を作す能く有情をして、異類の見を起し、異類の煩惱を起し、異類の業を造り、異類の果(五趣異類の生(四生)を受けしむ故に異生と名づく)と云へり、三徳とは一には退なし、二には無間業を造らず、三には惡趣に墮せず、是れ其の煩惱を伏せる所以なり、今記の文には世第一法の得失をば畧せり、此の世第一法には一失一徳あり、一失とは異生に住す、設ひ世第一法の位なりと雖も未だ有漏位なれば異生を免れず、此の位には異生の非得は未來生相の位までは來りてあれども、異生

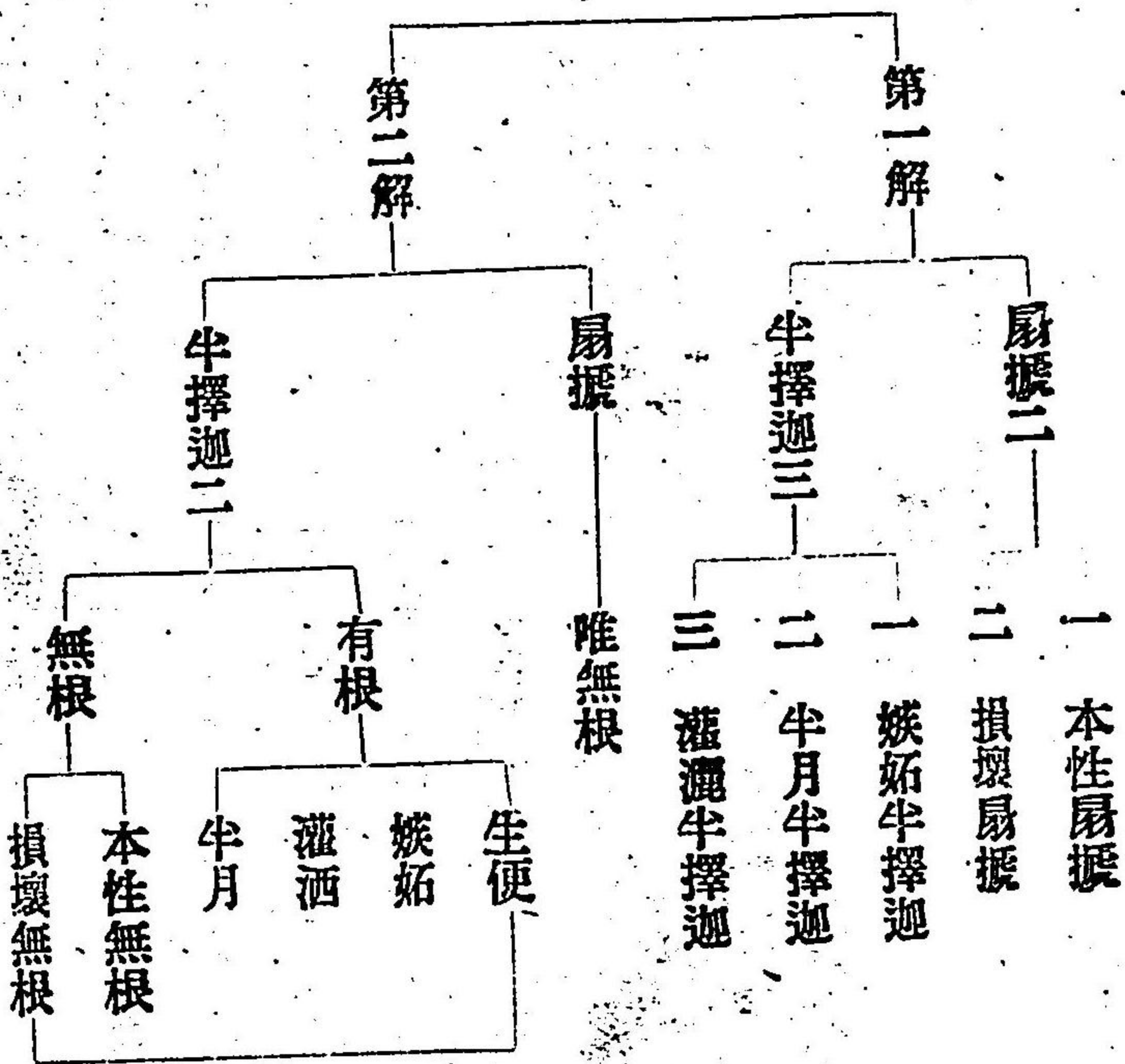
の最後念が猶現在前しあり、一徳とは必ず見道に趣入るなり。若下上忍合得六種不生。此中下忍得一不生。謂於三惡趣得非擇滅。若至上忍得餘五不生。一者生謂卵濕生。二者處謂無想天。大梵王處。北俱盧洲。三者身謂扇搥半擇迦二形身。四者有謂第八有等。五者惑謂見所斷惑。於此五種得非擇滅。中忍無別不生。故不說也。解云卵濕二生多愚癡故。無想大梵僻見處。故。北俱盧洲無現觀故。扇搥等多諸煩惱故。扇搥半擇迦並是梵語。扇搥謂無根損根。半擇迦謂無勢損勢。第八有者此上忍必入見道。成初果。初果聖欲惑極潤七生故。等者等取色界一處二生業。此等如後所明。若見斷惑雖即未斷。以必不起故。

二には六不生に約す。若下上忍等とは、爾へらく下忍と上忍とを合して六不生を得す、中忍は別立せざるなり、此の六不生の中に於て下忍は唯一の不生を得す、即ち下忍の位まで來りし行者は決して三惡趣(地獄、畜生、餓鬼)に生せず、三惡趣に於ては緣缺不生の非擇滅を得するなり、若至上忍等とは此の上忍の位まで進み來りし行者は餘の五不生をも得するなり、畧して圖示せば、



此の圖解の如く既に上品の忍まで進み來りし行者は餘の五種の法に於ても縁
 缺不生の非擇滅を得し、再び三惡趣とか卵生と濕生とか生は受けざるなり。解云
 卵濕等とは此より下は上品の忍位の行者の五種不生を得する所以を釋するな
 り、一には生不生謂らく四生の中に於て卵生と濕生との二生に生せざるなり、即
 ち鳥類の如く卵殼より生せしもの及び濕氣より生せし有情は殊に愚癡多きが
 故に此の二生に生を受けざるなり、二には處の不生謂らく無想天の如きは外道

か出離想作意に由り彼の天を計して眞の涅槃なりと執して生ずる處なり、故に
 上品の忍位の人は生せざるなり、大梵天處は大梵王は一切作者なり、能者なりな
 どの僻見處なるが故に上忍の人は生せざるなり、要するに無想大梵の二處は僻
 見の處なるが故に上忍の行者は生せざるなり、北俱盧洲は四諦の現觀なき處な
 るが故に又生せざるなり、三には身不生謂らく凡て人身にして男なれば男根、女
 なれば女根を立派に成就したる人は惡戒をも得し、斷善根をもなし得、或は善戒
 をも得し得果をも成ず、渾て善惡法に於て勇猛なり、世俗に所謂る惡に強き人は
 善にも強しとは此の事ならんか、然るに扇搩半擇迦のものなどは其の心柔弱に
 して渾ての善惡二法に於て猛強なることなし、故に此等の人は惡戒若しくは斷
 善根の如き惡法をも作す能はず、又善戒若しくは得果の善法をも亦作す能はず
 るなり、加之此の扇搩などの人は却て諸の煩惱多し、故に上忍の位までも進み來
 りし人は斯る不完全なる身は受けざるなり、さて扇搩等は梵語なり、故に麟記十
 五卷七丁に曰はく、扇搩此には翻して無根と云ふ、半擇迦此には樂欲と云ふとあ
 り、又光記三卷三丁左に二釋を作れり、



圖解の中に於て先づ第一解の意に依れば、扇據に二種あり、一には本性無根なり、此は生來男女根のなきものを云ふ、二には損壞無根なり、此は生じて而して後に根を破損し爲めに無根となりし人なり、即ち支那で所謂宮中に驅使する宦官の

如き類なり、又半擇迦の有根無勢用の中に三種あり、一には嫉妬半擇迦、是は他人の姪事を行ずるを見て根勢が起る、然らざれば根勢なきものを云ふ、二には半月半擇迦、是は唯半月のみ根勢が起り、半月は根勢なきものなり、三には灌漑半擇迦、是は湯の中に身を浴せし時根勢が起るなり、光記の二解ある中第一解可なり、其他俱舍論寶疏三卷三丁右、倫記十四卷十六丁等に種々の釋あり、今は繁を恐れ、て之れを畧す、四には有不生、謂らく有とは因果不亡の義にて、因にも果にも通ず、彼の十二緣の中の有支は因に約す、今は果に約す、其の體を論せば、有情の衆同分なり、是は預流果の聖者が欲界に經生することは、第七有を限りとして、必ず涅槃に入り、決して第八有は受けざるなり、即ち今の上忍の人は、必ず見道に入り、預流果を成ず、初果の聖者の極めて多く生死する者も、七生に限りて、決して欲界の第八有は受けざるなり、但し第八有不生とは、欲界の生を遮するのみにして、決して上界の生を遮するには非ず、上流那含の聖者なれば、色界十六天に於て、一處に一生を受け、決して二處に二生は受けざるものを等取するなり、とは、次下の釋に譲るなり、五には、惑不生、謂らく上忍の位まで來りし行者は、未だ見惑を斷せずと雖も、既に見惑を伏して、決して現行せざるなり、故に惑不生を得すと云ふなり。

此四善根並慧爲性。

三には四善根の體性を明す上に明せし四種の善根は皆第六意識相應の慧の心所を以て其の體性と爲す若し其の眷屬の體を擧れば五蘊に通ずるなり。七加行中前三是散善唯在欲界唯人三洲三惡趣天趣北洲無者惡趣無般若故諸天雖有般若無厭苦故北洲無般若及厭苦故後四是定善。

三には重ねて三賢四善根を分別す此の中に四初には定散分別二には依地分別三には依身分別四には順解脫分等を分別す今は即ち初なり七加行中等とは謂らく三賢四善根の七加行の中に於て五停心別相念住總相念住との前の三は修得の慧なれども欲界所起の善なれば散善に屬するなり唯在欲界等とは此の散善に屬する五停心等の三賢は欲界中の人の三洲に局るなり地獄餓鬼畜生の三惡趣と六欲天趣と北洲とは三賢の善法をば起さざるなり如何んとなれば三惡趣は厭苦の心は切なれども勝依の身なきが故に聞思修得の勝慧は起らざるなり又六欲天趣の如きは果報稍々勝れたれば勝慧はあれども至て苦が輕きが故に厭離心を生ぜず故に三賢の善法を初起せざるなり又北洲の如きも亦果報

若依地者四靜慮未至中間欲界中無非定地故無色亦無謂煖等四見道眷屬無色無見道故無煖等也。義準四靜慮中上三近分亦無見道故無煖等也。

二には依地を分別す若依地者等とは謂らく煖等の四善根の依地は四根本靜慮と未至と中間との六地を所依として起るなりさて未至とは初靜慮の近分定のことなり是は欲界散地より未だ上界定地の根本靜慮に至らざる位なるが故に初定の近分のことを未至と云ふなり欲界中無等とは此の四善根は唯未至と中間と四根本との六地を依とするのみにして欲界及び無色界をば依地とすることなし如何なれば欲界の中には禪定なし故に四善根の定善なし又無色界には

見道なきが故になし、元來此の四善根は見道の眷屬なり、無色界には見道なきが故に見道の眷屬たる四善根も亦依地とするの義なしと知るべし、さて此に心得置くべきことあり、謂らく依地と依身との別あり、依身とは肉體の欲界散地にあるを云ふ、依地とは欲界の煩惱を或は伏し或は斷じたる人なれば、肉體は欲界にありながら上界の定に入るとを得る、今は則ち依身門に非ずして依地門なり、則ち上界定地を所依とする邊を云ふなり、義準四靜等とは、道理に順じて考ふれば、四靜處の中の二禪の近分、三禪の近分、四禪の近分の三近分定も亦見道なきが故に見道の眷屬たる煖等の四善根も依地として起る義なし、其の所以は三近分は有漏なるが故に、彼れには起らぬ、元來無漏地は未至と中間と四根本と下三無色の九地に局れり、さて未至定の無漏なる所以は、初禪の自地を厭背するが故なり、初禪は欲界に隣近して諸の災患あり、一切の欲食は尋伺と相應すれば、自地の法を厭背するに由て、無漏が起るなり、上三近分は自地の法を厭背せぬが故に無漏なし、無漏なきが故に見道なし、見道なきが故に見道の眷屬なる煖等の四善根も依地として起ることなしと知るべし。

若、依身者、唯欲界人天九處身也。除北俱盧唯依欲身者能厭苦

故唯欲身入見道故。四中前三三洲初起後生天處亦續現前。天處無初起者無勝厭離等作意故。惡趣雖有勝厭離等作意無勝依身故。第四善根天處亦起。此無初後一剎那故。

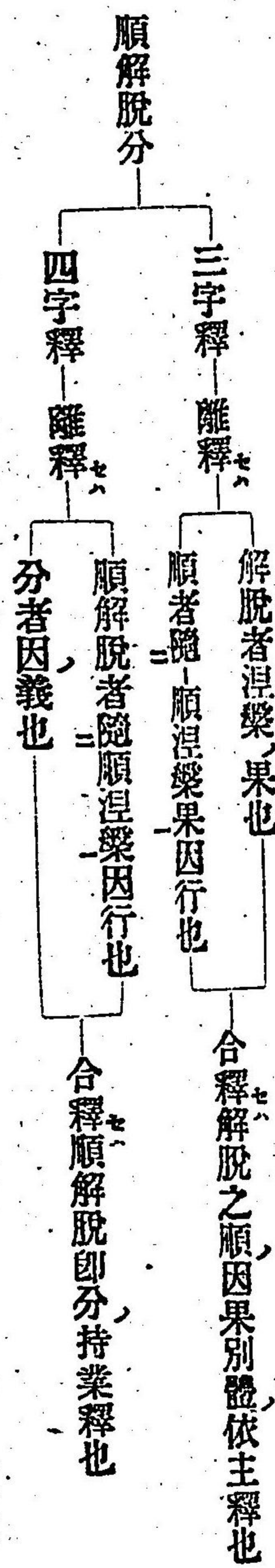
三には依身分別なり。若依身者等とは、謂らく此の煖等の四善根を起す依身は、唯欲界の人の三洲除北洲と六欲天との九處の依身なり、此の欲界九處に依るものは、欲界九處は災患多きが故に、能く苦を厭ふが故に、唯欲身を以て見道に悟入するが故に、欲の九處を依身とするなり。四中前三等とは、此の煖等の四善根中に於て前の煖と頂と忍との三は、人の三洲にて初起す、後起は天處に於ても續起するなり、天處に初起なきものは、天處は果報稍々勝れたれば、殊勝なる厭離等の作意なきが故なり、又惡趣の如きは殊勝なる厭離心はありと雖も、勝れたる依身なきが故に、惡趣の依身とせず。第四善根等とは、第四の世第一法の善根は、人の三洲と天處にも亦起すなり、而かして此の第四の世第一の善根には初起後起の別なし、唯一剎那なるが故に。

又七加行中前三順解脫分攝。後四順決擇分順解脫分者。解脫謂涅槃分是因義。此善順彼與彼作因故。此善名順解脫分有施

一食持一戒等深願解脫願力所持便名種植順解脫分

(四百六)

四には順解脫と願決擇分とを分別す此の中に二初には順解脫分を分別し二には願決擇分を分別す初の中に二初には正しく釋し二には解脫の速遲を分別す今は即ち初なり又七加行等とは謂らく前の三賢のことを順解脫分の攝在と云ひ後の四善根のことを願決擇分の攝屬と名づくさて順解脫分とは解脫は涅槃のことにして果なり願は隨順不違の義にして解脫の果に隨順する因行を願解脫と云ふ俱舍光記廿三卷二十五丁上の順解脫の三字を釋して分の一字を釋せず寶疏二十三卷二十二丁右に分の字を釋して因の義なりと云へり左すれば願と分とは皆是れ因行に屬す先づ三字合釋せば解脫之願の因果別體の依主釋なり又四字釋なれば願解脫即分の持業釋なり畧圖を以て示さば



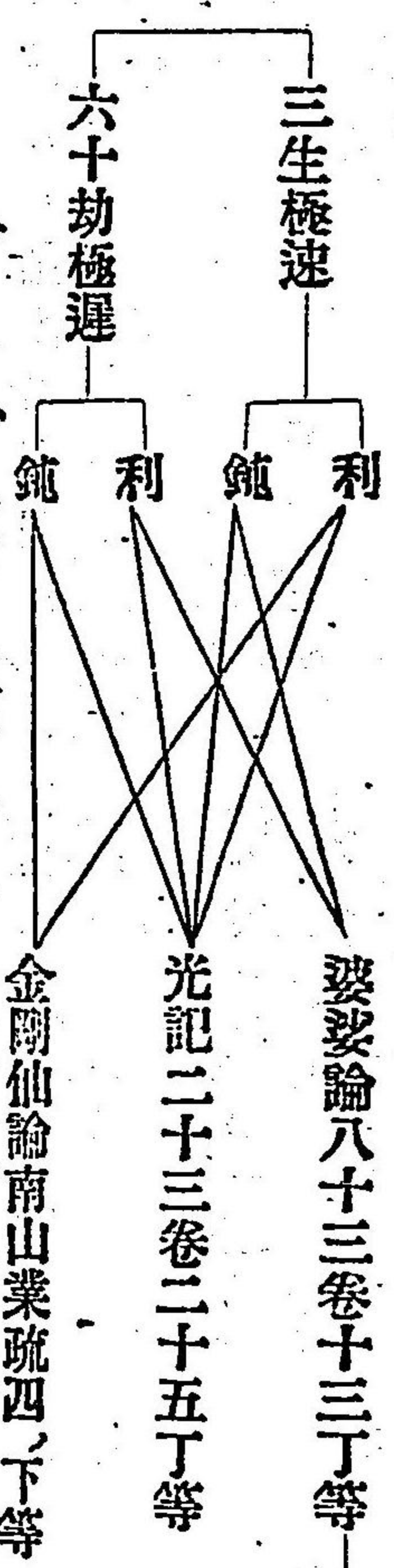
有。施。一。食。等。とは、一食を施し一戒を持するだも深く解脫の妙果を得たき願求心

あれば其の願力に持せられて皆解脫の勝因縁となる即ち願解脫分の善根を種植と名づくるなり俱舍論二十三卷九丁左又光記二十七卷五丁左等對見すべし。諸、植、順、解、脫、分、者、極、速、三、生、方、得、解、脫、謂、初、生、起、順、解、脫、分、第、二、生、起、順、決、擇、分、第、三、生、入、聖、乃、至、得、解、脫、若、極、遲、者、經、六、十、劫、

二には解脫を得する速遲を明す諸植順解等とは謂らく諸の願解脫分の善根を植ゑたる人は極めて速かなるものは三生にして得脱す即ち第一生に願解脫分の善根を起す是は不淨觀數息念已去なり第二生に願決擇分の善を起す是は煙等の四善根なり第三生に入見し乃至涅槃の果を得す論二十三卷九丁に譬を擧ぐ世間に於て第一に種を下し第二に苗が出來第三に實を結ぶ其の順敍の如く今も初一生に外道を出で佛法に歸し一切法は非常なり非我なり等の法性を知り正見に住す即ち願解脫分を起すとは是なり次に第二生に於て願決擇分の善を修するは是れ願解脫分善を成熟するものなり後に第三生に於て涅槃を得すと云へりさて此の三生に就き二義あり一には果報の一生なり此の義に依れば相續で生を経ること二には植佛の一生なり此の義に依れば如何は生を経るとも植佛せるを一生と名づく謂らく第一生に拘那含牟尼佛に植ひ資糧を修

(四百七)

し第二に迦葉佛に値ひ加行を修し、第三に釋迦佛に値ひ入見乃至證果する如きを云ふなり。若極遲者等とは、極めて遅きものは六十劫を経るなり、劫とは具さにハ劫數と云ふ、翻して長時とも分別時節とも云ふ、但し時の極短を刹那と云ふ、極長を劫と名くるなり、其の六十劫に於て、初め二十劫に資糧(三賢)を修し、次の二十劫に加行(四善根)を修し、後の二十劫に入聖得果するなり、抑も此の三生と六十劫とを経るは、何を以て利根とし何を以て鈍根となすや、此れに異説あり、四教儀集註中卷五十八丁等に依れば、三生を利とし六十劫を以て鈍根とす、又婆娑論三十卷六丁同八十三卷十三丁等の意に依れば、三生を鈍とし六十劫を利となせり、蓋し婆娑の意なれば、獨覺は聲聞より利なり、佛は獨覺よりも利なり、而かも修行の時量は次第に長さを加ふるなり、但し修行の結果に至りては、三乘の無學なり、所斷の煩惱を云へば同じく見修二惑を斷ずるのみ、所證を云へば等しく人空無我の理のみ、而かも一期盡き三乘共に灰身滅智に歸すると云ふ、然るときは修行の短きものを以て鈍とし、修行の長きものを以て利とせざるべからず、更に光記二十三卷二十五丁左及び慧暉六卷七丁等の意に依れば、三生六十劫共に利鈍に通ず、時の長短は偏に厭心の勝劣に由る、厭心強きものは三生に得果す、厭心弱きものは六十劫を経ると云ふなり、要解八卷四十四丁の意なれば、上に所引の婆娑の説に依り、利鈍の別を定むるなり、今畧して圖示せば、

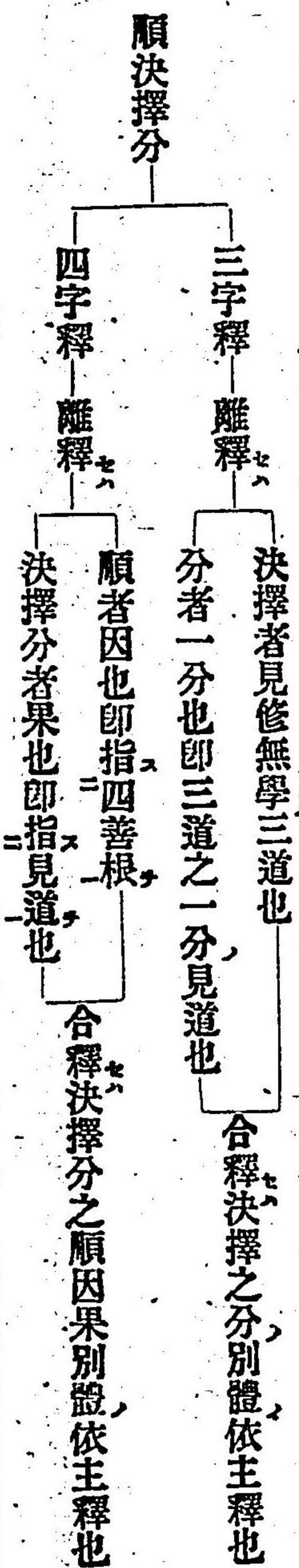


もの六十劫を経ると云ふなり、要解八卷四十四丁の意なれば、上に所引の婆娑の説に依り、利鈍の別を定むるなり、今畧して圖示せば、

順決擇分者、決謂決斷、擇謂簡擇、謂諸聖道以能斷疑故名決、能分別四諦相故名擇、是見修無學三道名爲決擇分、謂分段見道唯是決擇之一分故名決擇分、煥等四善根能爲勝緣、引決擇分、順益彼故得順彼名、順是其因、決擇分是其果、從因及果爲名、故此名爲順決擇分。

二には順決擇分を釋す、順決擇分等とは、謂へらく決は決斷の義にして疑ひと反對のものなり、即ち是は屹度無常なり、是は必ず無我なりと決定斷言し得るを決と云ふ、擇は簡擇とて即ち無漏の聖智を以て、是は無常なるものにて常住なる法ではない、是は苦なる法にて樂なる法ではないと擇び分るを擇と云ふなり、即ち

其の決斷し簡擇するものは無漏の聖慧のことなり、其の無漏の聖慧は能く疑を斷する作用あり、及び四聖諦の理を簡擇し擇び分る作用あるが故なり、此の無漏の聖慧は見と修と無學との三道に通ずるものなれば、三道の事を通じて決擇と云ふなり。分謂分段等とは、分は一分の義にて、即ち三道の一分なる見道の事なり、今は三道まで通じて引起するにあらず、但其の三道の一分なる見道のみを引起するなり、故に決擇が一分の別體依主釋なり、是れ決擇分の三字釋なり、煥等四善等とは、此の煥等の四善根が能く勝れたる因縁となりて、決擇分即見道を引起し、彼の決擇分に順益するが故に彼の見道に順ずる名を得たり、即ち順とは因なり、決擇分は其の果なり、其四善根の因を見道の果とに従へて、順決擇分と云ふ名を得たり、是は四字釋なり、更に順決擇分に就いて三字釋と四字釋との相の圖示せむ。



次聖位者有三。一見道。二修道。三無學道。

二には聖を明す、此の下に二初には總表、二には別釋、今は即ち初なり、謂らく三道の名を表示せしものなり。

初見道者從世第一善根。無間即緣欲界苦聖諦境。生無漏法。名苦法智忍。苦忍無間緣欲界苦諦。次生法智名苦法智。此智無間次緣上二界苦聖諦境。有道類忍生名苦類智忍。此忍無間即緣此境。有類智生名苦類智。如緣苦諦有此四心。緣集滅道各生四亦然。謂苦類智後緣欲集諦生集法智忍。此忍無間生集法智。此智無間緣上界集諦生集類智忍。此忍無間生集類智。此智無間緣欲滅諦生滅法智忍。此忍無間生滅法智。此智無間緣上界滅諦生滅類智忍。此忍無間生滅類智。此智無間緣上界道諦生道法智忍。此忍無間生道法智。此智無間緣上界道諦生道類智忍。此忍無間生道類智。故於四諦各有四心。成十六心。

二には別釋、この下に三初には見道を明す、二には修道を明す、三には無學道を明す、初の中に二初には汎く十六心を明す、二には見修の分齋を明す、初の中に四初

には十六心を明す、二には現觀の差別を明す、三には依地依身を明す、四には忍智の次第を明す、初の中に二、初には正しく十六心を明す、二には忍智の名義を釋す、今は即ち初なり。初見道者等とは、謂へらく見道の初無漏智の起るは、有漏の世第一法より續いて起るなり、即ち前念の世第一法は有漏の善根なり、後念無間に起る見道は無漏智なり、其の最初の無漏の見道のことを苦法智忍といふ、とは欲界苦聖諦の境を緣じて生ずる無漏智なるが故に苦法智忍と云ふ、さて其の苦法智忍の次刹那に又重ねて欲界の苦聖諦の境を觀じて起りたる無漏慧を苦類智と名づく、又其の苦法智の次刹那に上二界の苦聖諦の境を觀じて起りたる無漏慧を苦類智忍と名づく、又重ねて上二界の苦聖諦の境を觀じて起りたる無漏慧を苦類智と名づく、如緣苦諦等とは、斯く苦諦の境を觀じて苦法智忍と苦法智と苦類智忍と苦類智との四心あるが如く、其の餘の集滅道の三諦を緣しても亦各四心を生ずるなり、故に四諦各々四心を生ずれば、四々十六心を生ずるなり、さて欲界の四諦の境を緣するときには法智忍及び法智と云ひ、上二界四聖諦の境を觀するときは類智忍及び類智と云ふは、何の所由あるか。答ふ、欲界四聖諦の法を緣する智なるが故に法智と云ふ、即ち法が智の別體依主釋なり、上界の四聖諦を緣する

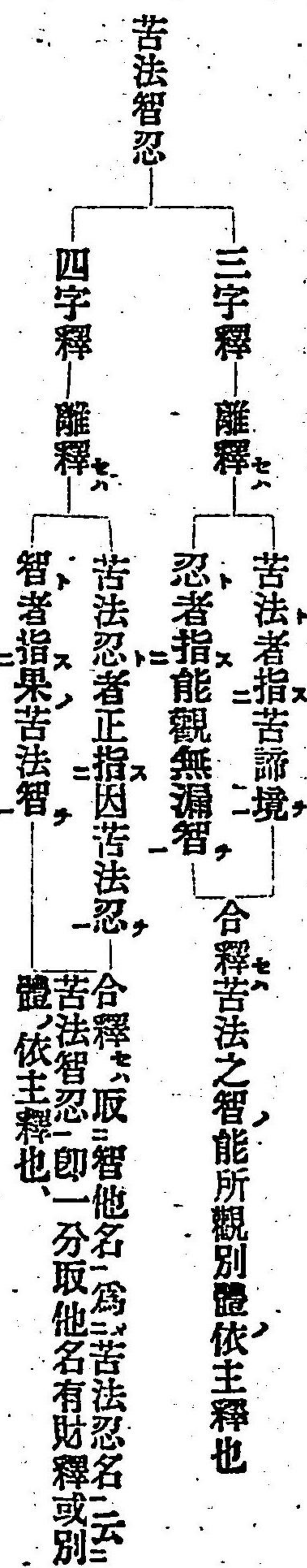
る智は其の欲界の四聖諦を觀する智の流類なるが故に類智と云ふなり、問ふ、何を以ての故に欲界四聖諦の境を先きに觀じ、上二界の四聖諦の境をば後に觀するや。答ふ、欲界は散地にして龜顯のものなるが故に、又己れが住する處なるが故に、此の二義に由りて欲界の四聖諦の境を先きに觀するなり、更に問ふ、何を以ての故に色界と無色界とを合して觀するや。答ふ、彼の上二界は同じく空地の攝なるが故に合して觀するなり。

苦法智忍者苦法是苦諦法忍緣苦法名苦法忍智是忍果是等流果智唯無漏爲顯此忍亦唯無漏舉後等流以爲標別謂四善根中忍是有漏性今此中忍性は無漏恐濫前忍舉法智果顯は無漏與前忍別故忍爲智者從果爲名如華果樹樹非華果生華果故名華果樹忍亦如是生法智故名法智忍。

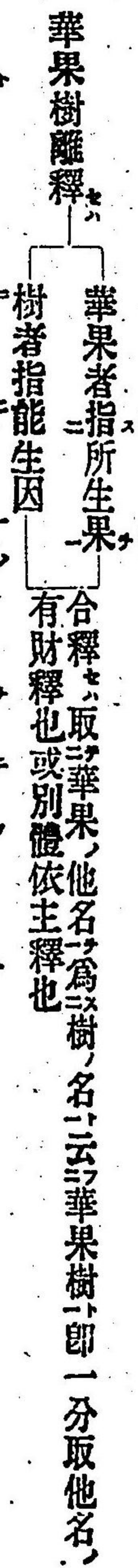
二には忍智の名義を釋す、此の中に二、初には苦法智忍の名義を釋す、二には餘の三諦の忍智を準釋す、初の中に三、初には苦法智忍の名義を釋す、二には苦法智の名義を釋す、三には苦類智の名義を釋す、今は即ち初なり、苦法智忍等とは、謂へらく苦法智忍とは、苦法は欲界苦聖諦の法にして、即ち近くは我々の五蘊の依身な

り忍は認可の義にして、是れは無常なり無我なりと忍可し決定するを云ふ、即ち此の忍が有漏の五蘊の依身を縁じて無常なり無我なり等と忍可するを云ふ、元來我々凡愚の輩は、無始已來五蘊の依身の上に於て妄りに執着して、淨樂我常と顛倒の邪執を起して居る者なり、然るに今此の無漏の聖慧が起りて、正見を以て觀じ來れば決して今まで顛倒妄執せし如き、淨樂我常の法ではない、唯無常なり無我なる法であると、忍可決定するを忍と云ふなり、智是忍果等とは、此の忍の中に智の字と添へて苦法忍と云はすして苦法智忍と云ふは、智は是れ果なり、即ち此の忍の次念に起るべき苦法智を指すなり、其の苦法智は唯無漏なるが故に、其の智の同類因なる、此の苦法忍も無漏なる者ぞと知らしめん爲に、智の字を添へたるなり、然るに次上の四善根の中の忍は是れ唯有漏なり、今此の十六心の中の忍は無漏なり、左れば今彼の四善根の中の有漏の忍を簡ばんが爲めに、智の字を添へて標木となし、所生の等流果なる智を擧げて、能生の同類因なる苦法忍の上に智を一字加へ、苦法智と云ふなり、即ち果に従へて因の名を立てしものなり、唯へば華果樹の如し、華や果は是れ果にして樹は因なり、然るに冬枯の時の如きは華も實もなければ、後らに至りて花開き實を結ぶ樹なるが故に、冬枯の時なり

と雖も、華果樹と云ふが如し、即ち華果の果に従へて樹の因の名を立つるなり、今の苦法忍も亦斯くの如し、後に至て苦法智の果を生ずべきものなるが故に、果に従へて因の名を立て、苦法智忍と云ふなり、即ち一分取他名の有財釋なり、今更に苦法智忍の釋名を圖示せば左の如し。



更に華果樹の釋名を圖解せば左の如し。



苦法智者最初證知諸法眞理故名法智。

二には苦法智の名義を釋す。苦法智者等とは、謂らく最初に苦聖諦の上の眞理を證知する智なり、諸法の眞理とは、苦諦の上の苦空無常無我などの理を云ふ、即ち最初に此の理を知る智と苦法智と名づく、最初とは後念に起るべき類智を簡ん

で最初と云ふなりさて茲に最初に諸法の眞理を證知すると云ふは、次前の苦法智忍の位は無間道にして未だ正しく諸法眞理を證する位に非ず、今の苦法智の位は解脱道にして此の位に来て方めて正しく諸法の眞理を證知することを得るなり、即ち無間道斷解脱道證の道理にて、次前の苦法智の時は欲界苦諦の下の惑を斷じ、今此の苦法智の位に来て正しく諸法の眞理を證知するなり。

此、後、境、智、與、前、相、似、故、得、類、名。

三には苦類智の名義を釋す。此、後、境、智、等、と、は、謂、へ、ら、く、此、の、苦、法、智、の、後、の、苦、類、智、忍、及、び、苦、類、智、は、既、に、欲、界、に、て、觀、せ、し、苦、諦、の、境、を、今、又、上、界、に、て、重、ね、て、觀、ず、る、が、故、に、其、の、能、觀、の、智、も、所、觀、の、境、も、其、に、前、の、苦、法、智、の、境、智、と、能、く、類、似、せ、り、即、ち、所、觀、の、境、も、前、の、苦、諦、の、法、に、類、似、し、能、觀、の、智、も、前、の、苦、智、に、類、似、す、る、が、故、に、苦、類、智、と、名、づ、く、然、る、に、今、の、文、相、に、は、類、知、の、み、を、舉、げ、て、而、か、も、類、忍、を、も、攝、め、盡、す、な、り、

如、苦、既、爾、餘、集、滅、道、各、有、四、心、準、此、應、知。

二には餘の三諦の忍智の名義を準釋す。如、苦、既、爾、等、と、は、謂、へ、ら、く、次、上、に、明、せ、し、苦、諦、の、下、に、於、て、欲、界、の、苦、諦、を、觀、ず、る、に、苦、法、智、忍、及、び、苦、法、智、を、起、し、上、二、界、の、苦、諦、を、觀、ず、る、に、も、苦、類、智、忍、及、び、苦、類、智、を、起、せ、り、斯、の、如、く、餘、の、集、と、滅、と、道、と、の、三、

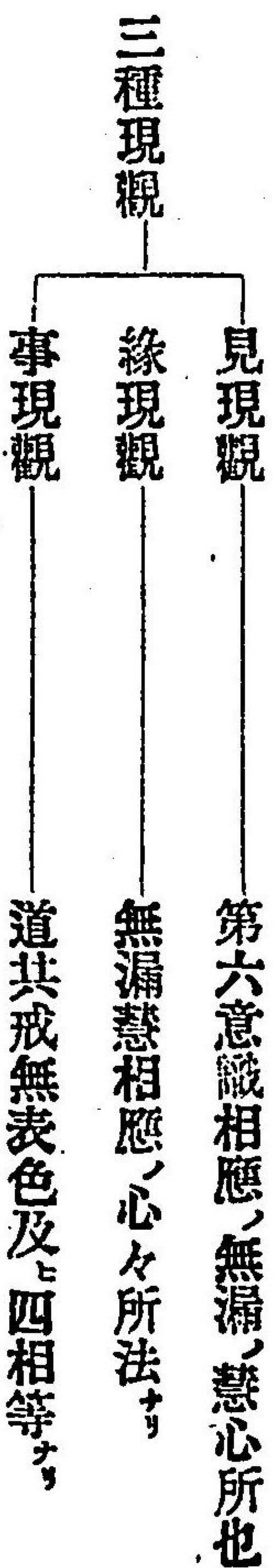
諦を觀ずるにも亦各、四心あり、即ち集法智忍等なり、其の四心を相及び名義は上の苦諦に準じて應に知るべし。

此、十、六、心、總、說、名、爲、聖、諦、現、觀、謂、在、現、前、觀、聖、諦、故、此、有、三、種、一、見、現、觀、唯、無、漏、慧、見、諦、分、明、故、名、見、現、觀、二、緣、現、觀、此、無、漏、慧、及、慧、相、應、心、々、所、法、同、一、所、緣、名、緣、現、觀、三、事、現、觀、謂、前、相、應、及、餘、俱、有、同、一、事、業、名、事、現、觀、餘、俱、有、者、諸、道、俱、戒、及、生、等、四、相、俱、有、因、故、名、俱、有、也。

二には現觀の差別を明す。此、十、六、心、等、と、は、謂、へ、ら、く、前、來、所、明、の、十、六、心、を、總、じ、て、四、諦、現、觀、と、名、づ、く、現、觀、と、は、現、前、明、了、に、四、聖、諦、の、境、を、觀、ず、る、こ、と、な、り、但、し、現、觀、の、名、は、見、道、及、び、修、道、に、も、通、ず、る、な、り、修、道、も、亦、能、く、明、了、に、四、聖、諦、の、境、を、觀、ず、る、が、故、に、然、る、に、見、道、は、四、聖、諦、の、境、を、觀、ず、る、こ、と、猛、利、に、し、て、速、疾、に、上、下、八、諦、の、境、を、觀、ず、る、が、故、に、特、に、現、觀、の、名、を、立、て、修、道、は、爾、ら、ざ、れ、ば、現、觀、の、名、を、與、へ、さ、る、な、り、さ、て、上、來、所、明、の、十、六、心、中、に、於、て、前、十、五、心、は、見、道、な、り、未、だ、曾、て、見、さ、る、四、諦、の、理、を、始、め、て、見、る、が、故、に、第、十、六、心、即、ち、道、類、智、は、修、道、に、攝、む、る、な、り、之、に、就、き、十、五、心、見、道、か、十、六、心、見、道、か、と、云、ふ、異、義、あ、り、と、雖、も、有、部、宗、は、十、五、心、見、道、の、義、を、以、

て正義とするなり。此有三種等とは、此の現觀の差別に三種あり一には見現觀、二には緣現觀、三には事現觀なり、先づ初の見現觀とは、第六識相應の無漏の聖慧が、能く如實に四聖諦の理を證知するが故に、見現觀と云ふ、即ち見現觀は唯第六意識相應の無漏の聖慧に局するなり。二緣現觀等とは、第六意識相應の無漏の慧の心所及び此の慧の心所と相應せる心王心所法とは何れも四聖諦の境を所緣となすなり、故に緣現觀と云ふ、即ち緣現觀の緣の字を以て所緣と見て解すなり、之に就き光記二十三卷二十九丁左に二解あり、一には心々所法は是れ能緣なり、境は是れ所緣なり、心々所法は皆同一所緣なるを緣現觀と名づく、是れ即ち緣の字を所緣に屬て解す義なり、二には心々所法が境を取ること分明にして現觀と同じきを緣現觀と名づくるなり、是れ即ち緣の字を能緣に屬て解す義なり、今記は光の前解に依れり。三事現觀等とは、前の無漏の慧及び相應の心々所の上に更に其餘の俱有の道共戒の無表色及び生住異滅の四相などが互ひに力を與へて同一の事業を爲す、即ち同一の事業とは苦諦に於ては同一に苦を知り、集諦に於ては同一に集を斷じ、滅諦に於ては同一に滅を證し、道諦に於ては同一に道を修するなとの事業をなすなり、さて此等の慧とか相應の心々所とか及び道共戒の無

表色とか四相などは俱有因とて相ひともに力を與へて互ひに因となり、互ひに果となるの事業を爲すなり、其の能く力を與ふるものを因となし、力を與へられるものを果となすなり、例せば甲乙丙の三人にて恐怖すべき深山に行くを假定せよ、此の甲乙丙の三人が互ひに因となり互ひに果となりて恐怖を免るゝことを得るなり、即ち甲の力によりて乙丙は恐怖を免るゝことを得るとせば甲は因にして丙は果なり、又乙の力によりて甲丙は恐怖を免るゝことを得るとせば乙は因にして甲丙は果なり、又丙の力によりて甲乙は恐怖を免るゝことを得るとせば丙は因にして甲乙は果なり、斯くの如く互ひに力を與へ互ひに因となり互ひに果となるを互爲果俱有因と云ふ、今も亦斯くの如し、心々所が力を與へて四相等が生ずとせば心々所は因なり、四相等は果なり、又四相などが力を與へて心々所が生ずること得るとせば、四相等は因にして心々所は果なり、斯く互ひに與力して互ひに因となり互ひに果となるを互爲果俱有因と云ふなり、更に圖解を以て三種現觀の相狀を示さば



斯の圖解の如く見現觀は能く明了に四諦の理を證知するものなれば、唯第六相應の無漏の慧の心所に局り、餘の相應の心々所は能はざるなり、又緣現觀は能く四諦の境を緣するものなれば無漏の慧の心所と及び慧と相應の心々所には通ずと雖も餘の俱有法即ち道共戒の無表色及四相等は能はざる所なり、又事現觀は相應法及び俱有法の一切に通ずるなり、之を要するに無漏の慧は三現觀の名を具足し、相應の心々所法は緣と事との二現觀の名を具し、無表四相は唯事現觀の一名のみを具するなり。

此十六心與世第一同依一地。謂六地中隨一也。應知依身唯欲界人天九處身也。

三には依地依身を明す。此十六心等とは謂へらく此の十六心は上に明せし世第一法の依地と同じく一地に依る也。即ち未至中間四根本地の六地の中の隨一を依地とすと知るべし。學者それ次上の四善根の下を對見すべし。依身唯欲等とは、

此の十一字は十六心の依身を明すなり、是も前の四善根下に出づ、對見すべし。又此中忍は無間道。約斷惑得不被惑得之所隔礙。故謂斷惑時惑體不現但斷其得也。智是解脫道。已解脫惑得。又與離繫得俱時起。故忍智次第理必應然。猶如世間驅賊閉戶。忍如驅賊。智如閉戶也。

四には忍智の次第を明す。又此中忍等とは謂らく上に明せし十六心の中に於て、八忍は是れ無間道なり、八智は是れ解脫道なり、是に由て忍智と次第して智忍とは次第せざるなり、且らく苦法忍なれば正しく欲界苦諦の下の惑得を斷じ、苦類忍なれば上二界の苦諦の下の惑得を斷ずるなり、無間とは間は間隔の義、即ち隔礙にして礙へらるゝこと、今其の隔礙の義なきを云ふ、即ち惑得と擇滅との間に隔礙するものなきを云ふ、謂らく此の位は惑得の最後念が現在にあり、擇滅の得は未來生相に來りてある、故に惑得が現在前しあると雖も、其惑得が離繫果即ち擇滅無爲の理を證するを障礙する作用なきと無間と云ふ、道とは涅槃の果に趣く道路を云ふ、故に俱舍論二十三卷十一丁左に曰はく道の義は如何ん、謂らく涅槃の路なり、彼に乗じて涅槃の域に往くが故に云へり、又婆娑論六十四卷十六

丁左に云はく道は所履通達の故に道と爲すと云へり即ち道の體は無漏の知慧なり此の無漏の智慧に由りて煩惱の繫縛を斷じ涅槃の都に至ることを得るなり但し煩惱を斷すと云ふと雖も決して煩惱の體を斷するに非ず其或體は三世實有法體恒有のものにして斷すべきものに非ず但其の煩惱を括り附けありし得を斷するのみ智是解脱等とは上に明せし忍の位に於て煩惱の得の繩を斷じたり即ち之を無間道斷と云ふ今此の智の位に來りては已に解脱を得して自在を得し位なりさて斯の解脱に就いて正解脱と已解脱との二種あり若し彼の離繫得が未來生相に在る位なれば猶或得が現在にあり其の位を正解脱と云ふ是れ即ち忍の位也若し離繫得が現在前せし位を已解脱の位と云ふ是れ即ち智の位なり今此の八智の位には已に惑の得を離れ畢りてある即ち離繫得が現在前してあれば已解脱の位なり忍智次第等とは忍智の次第は道理とし斯くの如く次第せねばならぬ忍は忍可にして未だ所觀の境を重觀せざれば慧と名づくも雖も智とは名づくべからず智とは決斷の義なり未だ忍位に於ては決斷すべからざるが故なり猶如世間等とは此の宗は斷と證とは異時にして二刹那となる今此の喻の賊を驅出すは無間道に喩ふ此の驅出するときは賊は猶舍内にあり

夫れを驅り出すが如く是れ或得の最後念が現在して正しく其の或得が身を離るゝ是れ無間道なりさて已に賊を戶外に驅り出し畢て戸を閉ぢたる位は解脱道なり已に擇滅の得が現在前して或得を驅り出し已に再び吾身に入らぬ位なり然此十六心中前十五心名爲見道於四諦理未見今見見未嘗見故至第十六道類智無一諦理未見今見如修習見故修道攝

二には見修の分齋を明す其の中に三初には正しく明し二には問答分別三には向道の不同を明す今は即ち初なり然此十六等とは謂へらく此の十六心の中に於て前の十五心は見道なり未だ嘗て一度も見たることなき四聖諦の理を今初めて見るが故に見道と云ふ即ち吾々凡愚の輩は無始以來四聖諦の理に迷ひ種種顛倒の見解を起し三界に生死し六道に流轉せしものなり然るに今修行の力に由て見道に悟入し未だ嘗て一度も悟りしことなき四聖の理を證見するとを得たり故に未見今見と云ふ第十六心道類智の位に至ては四聖の中一諦の理として未だ嘗て見ざるものを今始めて見るの理なし故に第十六心は見道に攝めず修道の攝在と云ふなり即ち嘗見のものを重ねて修するものなるが故なり

問。道類智緣道類忍。未見今見。何故非見道攝。答。此中約諦不約。刹那。雖於道類忍一刹那心未見今見。而於上下八諦皆已曾見。故修道攝。如刈畦稻唯餘一科不可名爲一畦未刈。

二には問答分別、この中に二初には第十六心と見道の攝なるべしと云ふの難、二には七智も見道の攝に非ざるべしと云ふ難なり、今は即ち初なり。問道類智等とは謂らく道類智の前念の道類忍は、その自性(慧所)と同時相應(心々)と俱有(四相)とをば縁する能はざる也、故に後念の第十六心道類智に至りて方めて前念の道類忍の自性等を縁す、左すれば第十六心道類智も亦未曾見の者を今見るの理あり、何んぞ見道の攝に非すと云ふやとの問意なり。答。此中約等とは答を陳ぶるなり、答の意は、若し問者の如く一刹那だけの道類忍の自性などを縁する義邊に就いて論せば、未曾見を今見るの義ありと雖も、今此の中は刹那に約せずして、諦に約するなり、即ち第十六心道類智の位に至ては、上下八諦の中一諦たりとも未曾見のものなし、上界の道諦の如きも第十五心道類忍の時に已に曾見せり、故に第十六心は修道の攝在にして見道の攝在にはあらざるなり。如刈畦稻等とは喩へを擧ぐるなり、喩の意は畦の稻を刈るに一科だけ刈り残しありと雖も未刈畦なり

とは云ふべからず、今も亦爾り、道類忍の自性等の一刹那だけ未曾見のものありと雖も、決して未曾見の諦理ありとは云ふべからず、之に就いて寶疏二十三卷二十九丁左に云はく、諦に約して作法して刹那に約せず已に上地無邊の道を見て唯一念を餘して未だ見ざるを今見るなり、豈に少に従へて未曾見と名づくこと云ふことを得んや、又光記も論文に依りて四量を作れり、今其の一量を示さば道類智は見道の攝に非ざるべし、宗是れ果の攝なるが故に、因猶し餘の修道の如し、喩餘の三量は之を略す、是れ皆他宗の所立の十六心皆見道なりと云ふものに對して立量せしものなり、若し爾らざるときは相符極成の過失あるなり、更に圖を以て諸宗の別を示さむ。



問ふ、有部宗は道類智を以て修道に攝むとせば、餘の修道の如く退することありや。答ふ、見道の無漏の得を任持するを以て退することなし。難じて曰はく、見道の無漏の得を任持するが故に、應に見道の攝なるべし。答ふ、爾らす若し難者の如く

んば今應に反難して云ふべし、後の修道の一來等は皆見道の無漏得を任持するが故に亦見道に攝むべし、豈皆彼の見道に攝むるの理あらんや、論二十三卷十三

丁光記及び慧暉六八丁等の取意なり。

問。忍於諦理未見今見可名見道中間七智已見今見何緣七智亦見道攝答。知諦未盡中間起故見道攝。

二には七智は見道の攝にあらざるべしと云ふの難なり。問。忍於諦等とは謂らく前の十五心の中の苦法智より道類忍に至る八忍は未だ曾て見ざる諦理を今始めて見るが故に見道と名づくべしと雖も其の中間の七智の如きは已に各々前念の忍に於て曾見せし理を重見するに非ずや、爾らば道類智の如く修道に攝むべし未曾見を今見るに非ざるが故に然るに今何に由てか七智も見道の攝在と云ふことを得るや答。知諦未等とは七智は各々前忍の曾見なりと雖も上下八諦の理を見ること未だ盡ざる中間に起るが故に猶見道の攝なり第十六心道類智の上下八諦の理を周ねく見盡すとは同じからず、若し苦法智なれば欲界苦諦の理は知ると雖も未だ上界の苦諦を知らず、乃至道法智は欲界の道諦の理を知ると雖も未だ上界の道諦の理を見ず斯くの如く周遍盡知にあらざれば見道に攝

ひるなり。

是見道十五心名初果向。趣預流果故。此約次第證若超越證則不然如後當明。

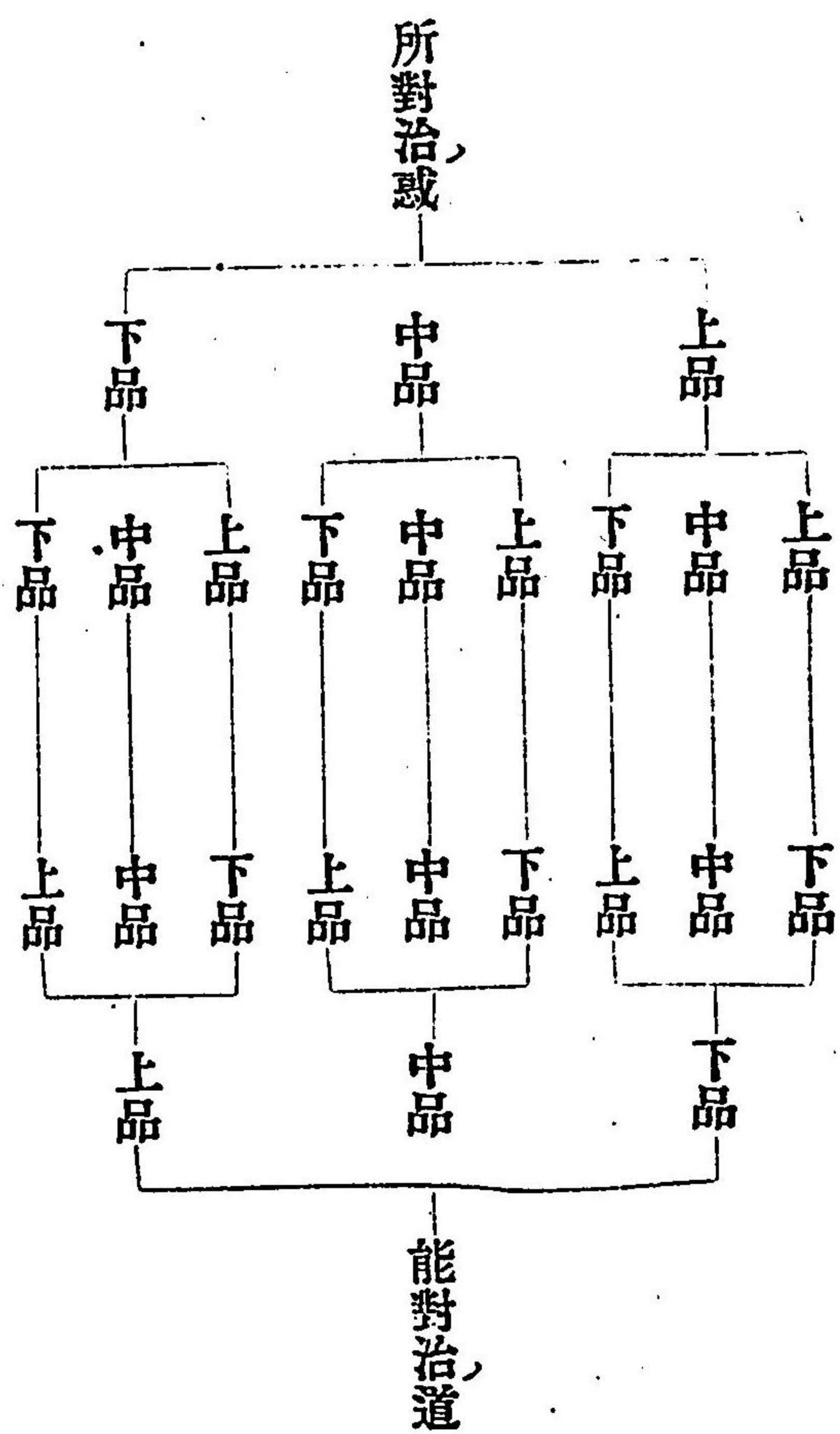
三には見道に就き向道の不同を明す。是見道十等とは謂らく、是の見道十五心の間を預流向と云ふ向とは趣向の義にて、果に趣行する義なり、第十六心道類智の位は修道の初めにして是を預流果と名づく、是は久しく希望せし見道を成就して所求の結果を究竟せるが故に是を預流果と名づくるなり、但し此の見道十五心を預流向と名づくるは具縛の赤凡夫が漸々修行して七加行を順次に踐行せし次第證の人に就いて論ずるなり、若し凡夫の位に於て上地は淨妙離なり下地は麁苦障なりとの有漏六行觀を以て欲界修惑の前六品を斷せし人或は七八品まで斷じたる人杯が見道に入りたれば、其の見道十五心の間を一來向と名づく、故に第十六心の時に至りて直に一來果を證すと云ふ、若しも又凡位に於て六行觀を以て欲界修惑の九品を斷じ或は初定の一品乃至無色の無所有處地の惑を斷じたる人杯が見道に入りたれば、其の見道十五心の間を不還向と名づく、此の人第十六心に至るときは直に不還果を證するなり、此等の人を超越證の人と云

惑に各々九品あるが故に欲界の修惑は四九三十六品ありと云ふべしと雖も類聚して九品となすと知るべし又上界八地には貪慢無明の三種の修惑あり(除其煩悩)其の三種に各々九品あるが故に三九二十七品の惑と云ふ所くの如く三界九地に各々九品欲界の修惑の如く類聚して唯九品の惑と云ふ所くの如く三界九地に各々九品あるが故に九々八十一品の惑と云ふなり道亦有八等とは上に譬して釋せし如く所對治の修惑に九々八十一品あるが如く能對治の無漏道にも亦八十一品の無間道と八十一品の解脫道とあるあり無間道とは正しく惑を斷する位なり解脫道とは已に斷じたる惑の上の擇滅の理を證する位なり

此、中、下々品道能斷上々品障乃至上々品道能斷下々品障。

二には能所對を配合す此の中に二初には法に約して明す二には喻に約して明す今は即ち初なり此中下々等とは謂へらく能對治の道と所對治惑とは順逆相對して能所對を談するなり即ち下々品の道を以て上々品の惑障を斷じ乃至上々品の道を以て下々品の惑を斷するなり今略圖を以て順逆相對の相を示さば

(四百三十一)

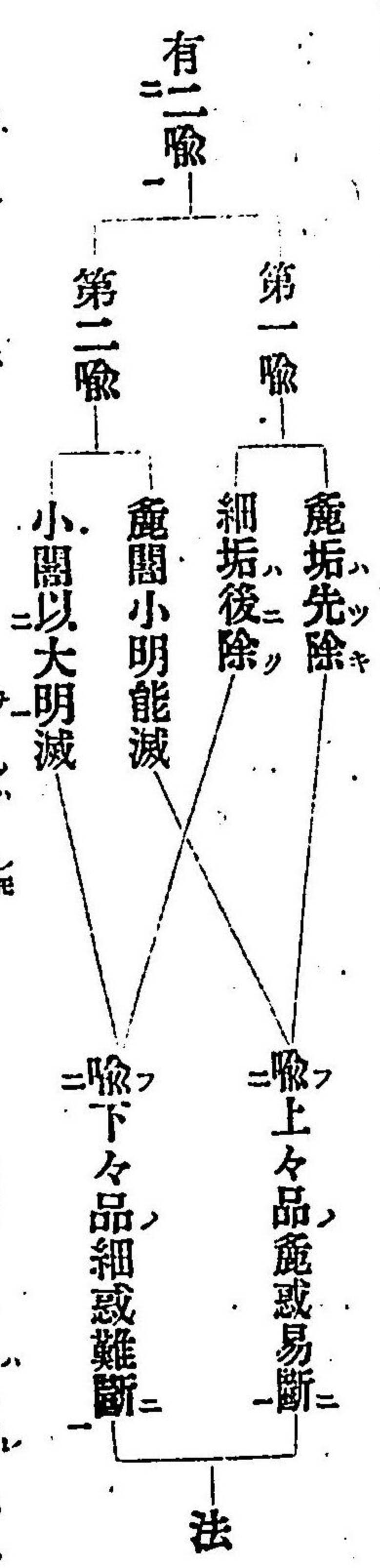


圖解の如く惑智相反の故に所對治の惑は極麤を以て上々品となし極細を以て下々品となす能對治の道は勢力の強きを以て上々品となし勢力の極劣を以て下々品となすが故に下々品の道を以て上々品の惑を斷じ乃至上々品の道を以て下々品の惑を斷するなり其の所以は惑の上下は麤細の別に依る智の上下は明味の別に依るものなれば麤惑は斷じ易し細惑は斷じ難し故に易斷の麤惑は下々品の味智を以て斷じ得るなり難斷の細惑は上々品の明了の智を以て斷す

(四百三十一)

るなり以下の喩を以て熟考すべし。
如_三洗_レ衣_ニ位_ニ塵_ハ垢_ハ先_ツ除_キ後_ツ除_キ細_ハ垢_ハ又_下如_下塵_ハ闇_ハ小_ハ明_ハ能_ハ滅_ハ要_ハ以_ハ大_ハ明_ハ方_ニ滅_ハ小_ハ闇_ハ

二には喩に約して明す、文解し易し、故に今畧圖を以て法と喩とを配合せん。

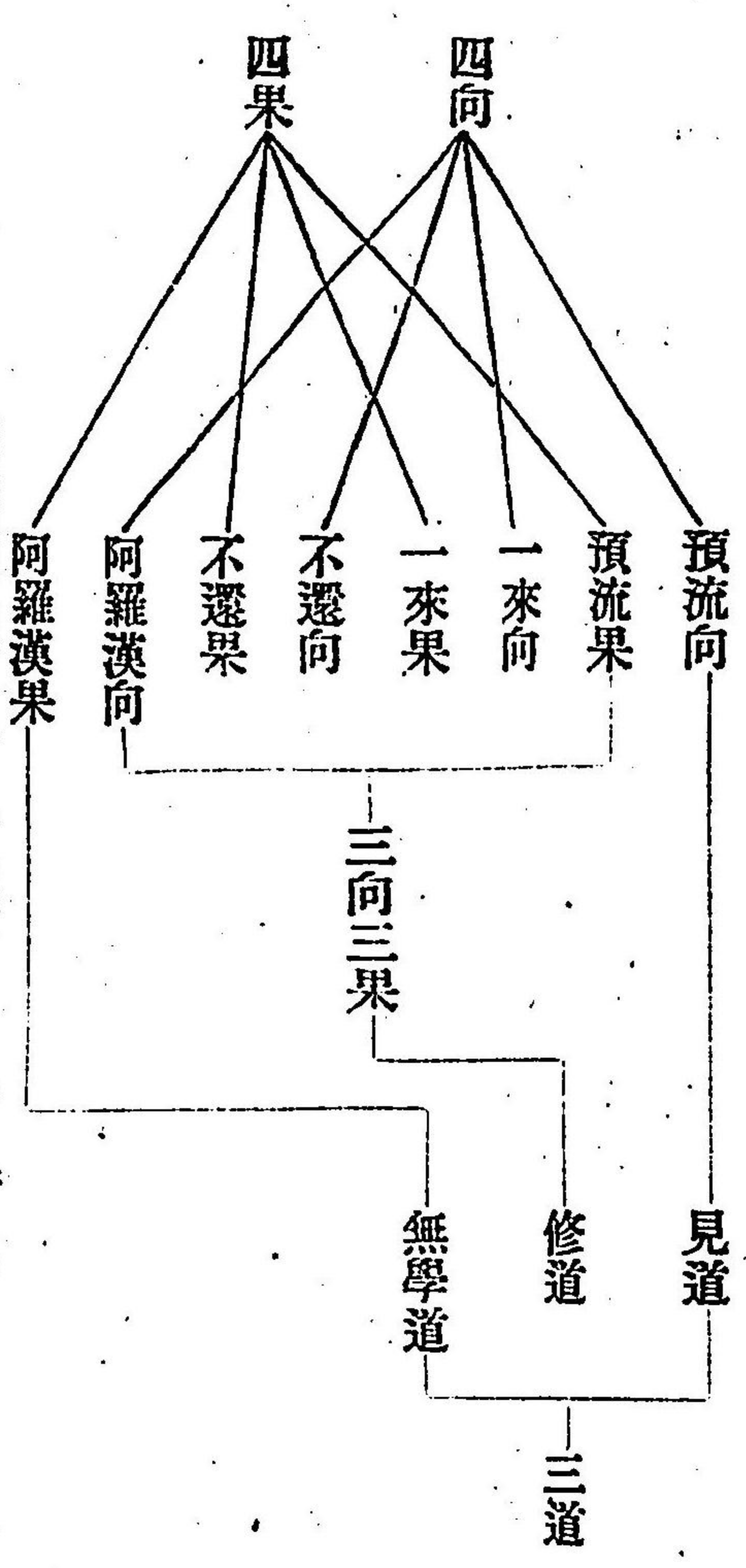


此修道中建立三向三果。總有四向四果。初向是見道。後果無學道。故中間三向三果是爲修道。

三には位を配して廣く明す、此の中に二、初には總じて明し、二には別して明す、今は即ち初なり、此修道中等とは謂へらく此の修道の中に於て三向と三果とを建立するなり、即ち四向四果の中に於て初の預流向は見道の攝在にして修道の攝に非ず、最後の阿羅漢は無學道の攝在にして修道の攝に非ず、故に最初の預流向と最後の阿羅漢果との一向一果を除くが故に、中間の三向三果のみを修道とな

初預流果者至道類智時方住此果。梵云須陀洹。此云預流。諸無漏道總名爲流。初預此流名爲預流。

二には別して明す、此の中に四、初には預流果を明し、二には一來向果を明す、三には不還向果を明す、四には阿羅漢向果を明す、初の中に二、初には正しく預流を釋し、二には七生を釋す、今は即ち初なり、初預流果等とは謂らく苦法智忍等の前十五心の位は見道の攝にして預流向なり、第十六心道類智の位に至りて方めて修



すなり、今略圖を以て見修無學の三道と四向四果とを配合せむ。

道と云ふ、而かも預流果の位に住するなり。梵云須陀等とは、これは預流の名義を釋するなり。梵語にては須陀洹と云ふ、此には翻じて預流と云ふ。光記廿三卷廿九丁の意に依れば、預とは入の義なり。婆娑論四十六卷十四丁右には流は謂らく聖道なり。預は謂らく入なりと云へり。即ち流とは流趣の義、流趣とは趣向すること、所求の地に趣向して往くを流と云ふ。流は諸の聖道を指す。行者が無漏の聖道を因として涅槃の都に流趣するの義なり。最初に無漏法流に入るが故に預流と名づく。舊譯家には須陀洹を入流と翻せり。さて大乘唯識論述記一本五十三丁右及び義林章五未初丁左の釋なれば、預とは入なり。流とは謂らく流類なり。聖の類に入るが故に預流と名づく。と云へり。又大乘義章十七本九丁右及び涅槃經會疏卅三卷九丁右には逆流の義と云へり。並に今の小乗の釋とは殊れり。さて俱舍論廿三卷十七丁右に問答を設けて曰はく、預流とは何の義ぞや。若しも初て聖道を得るを預流と名くるならば、苦法忍位に至て此の名を得べし。それを答へて曰はく、此の預流の名は初めて果道を得るが故に預流と名づく。故に第十六心位にあり。又問ふ然らば次第證の人なれば初果を以て預流と名づくべし。雖も若しも超越證の人なれば第二第三果を以て預流と名くべし。それを答へて曰はく、一來不

還の如きは偶々超越證の人に取ては初めて得る邊もあり。雖も次第證の人に取ては初得に非ず。故に彼は不定なり。今は決定して初に得るを預流と名づくるなり。又問ふ何故に苦法忍を預流果と名けずして道類智に至りて預流果と名づくるや。答ふ道類智の位には一には具さに向道果道を得るが故に、二には見道修道の無漏を得るが故に、三には十六心に涉りて遍ねく現觀するが故に、此の三義を具するを以て預流果は道類智にありと云へり。
諸預流者住果未斷修惑欲界受生極多七返人中七生中有生有各七。天中亦然。總二十八生。皆七等故。但云七返如七葉樹。
二には七生を明す。此の中に二初には正しく七生を明し、二には問答分別。三には般涅槃の處を示す。今は即ち初なり。諸預流者等とは、謂へらく第十六心道類智即ち預流果に住して、三界九地の修惑の一品をも斷せざる人を極七返有の聖者と云ふ。即ち極めて多く受生するものは七往返なり。是は見道に入りて三界の見惑を斷じ盡して、第十六心に至て、初果に住せし行者は、更に新業を造らぬ。然るに未だ修惑の一品をも斷せずして、第七人の生にして餘の一切の修惑を斷盡して涅槃に入る、

是を極七返の聖者と云ふ此の七返とは七度往き七度返る即ち七往返するなり、此の一往返を大の一生と名づく故に七の大生の聖者なり大生とは人と天とを合するを云ふ理實には二生となる故に二七十四生を受るなり問ふ此の行者は必ず七の大生を受るや答ふ必ずしも七の大生を受るに非ず既に名けて極七返と云ふ即ち極めて多く受生するものは七の大生を受るなり故に少なく受生するものは六返乃至一返受生するも妨げなし故に婆娑論に云はく或は天七人六あり或は人七天六あり或は天六人五あり或は人六天五あり或は天五人四あり或は人五天四あり或は天四人三あり或は人四天三あり或は天三人二あり或は人三天二あり或は天二人一あり或は人二天一あり此の中は且らく極多生のものを説くが故に預流人天各七と云へりと云ふ問ふ婆娑論の中に人一天一を説かず未だ人一天一の大の一生をのみ受る預流の聖者あるか否かを知らず如何ん答ふ是れ即ち先徳の異義なり泰師は云はく婆娑の中に人一天一を説かざるが故に知ぬ預流に住して一生を受ることなしと又光記廿三卷四十三丁左已下には先づ泰師を牒破して而して後に自義を述べて云はく預流果に住して七生を受くるもあり乃至一生を受くるもあり論文既に極の言を説く受生の最多を

顯さんが爲めなり諸の預流皆七生を受くると云ふには非ず此を以て知ぬ極少のものは一生を受くるも妨げなし云々と云へり寶疏廿三卷卅五丁左も亦光記と同じ唯識家の學匠善珠師は增明記の中に云はく一二を遮せず是れ亦光記に同じ然るに俱舍論要解師は泰師に伴ふて光寶等を破せり今私に評して云はく光寶等の諸師の説を以て正となすべし泰師の説は未可なり若しも其の正不を明かに詳論せんとせば幾多の道理もあり文證もありと雖もそは俱舍論研磨の時に譲り今は之を畧す人中七生等とは此の極七返有の聖者が人天往返七生中にも七の生有と七の中有とあり合して二七十四生となるなり又天とを總合せば四七二十八生となるなり然るに極廿八返有と云はずして極七返有と云ふ所以は七宛の數量が等しきが故なり喩へば七葉樹の如し此の七葉樹は一枚の葉が七ツに分れてある其の葉の數は無量なりと雖も皆七葉づゝである其の七葉なること同じきが故に七葉樹と云ふなり此の七葉樹は杼の木のことなりと云ふ此の七返有に就き諸部の不同あり畧圖を以て示さば

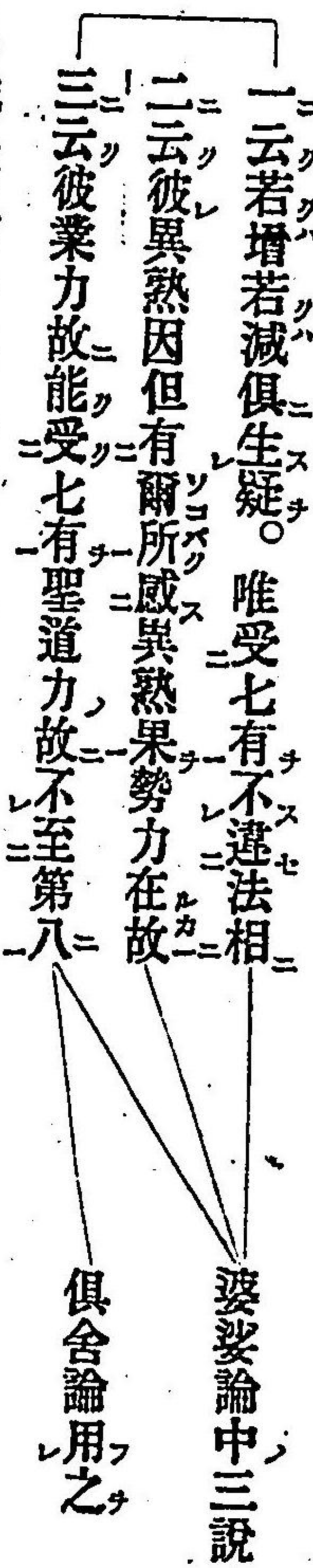
二十八生
有部及大乘
彌沙塞部
人天合七生
成實宗(除中有二故)
十四生

さて此の極七返有の聖者が欲界に於て七生して無學果を得ると云ふに疑ひあり、彼の遍沒那含の上界に於て十六生を経る等の如きあり、如何ぞ唯極多の者を極七返有と云ふや、惠暉六卷九丁に此の疑を釋してあり、其の取意せば、欲界人趣及び六欲天經生の聖者は、上界に經生せず、又上二界經生の者は、欲界に經生せず、故に機類の不同に由て欲界經生の者もあり、上二界經生の者もありと知るべし。
問。何緣彼無受第八有。

二には問答分別に二初には問、二には答、今は即ち初なり。問の意は此の極七返有の聖者は、何の理由に緣て、唯極七返有即ち極多のものは唯七生に在て、第八生第九生などの生を受くるものはなきやとの意なり。
謂相續身齊此七生所有聖道必成就故。聖道種類法應如是。如七步蛇第四日瘡。
爲七步毒蛇所整大種力故能行七步。毒勢力故不至第八。第四日瘡者諸患瘡者發時

不同或有半日不發半日發或有一日不發一日發或有極遲發者第一日發第二日發第三日不發至第四日必發此名第四日瘡。
至第七有逢無佛法時彼在居家得阿羅漢果既得果已必不住家。法爾自得必芻形相。

二には答なり。謂相續身等とは、謂へらく是は論廿三卷十八丁、光記廿三卷四十一丁左の釋なり、即ち婆娑論四十六卷十六丁十一解ある中の第三師の義なり、今婆娑論中の二三の説を圖示せば、

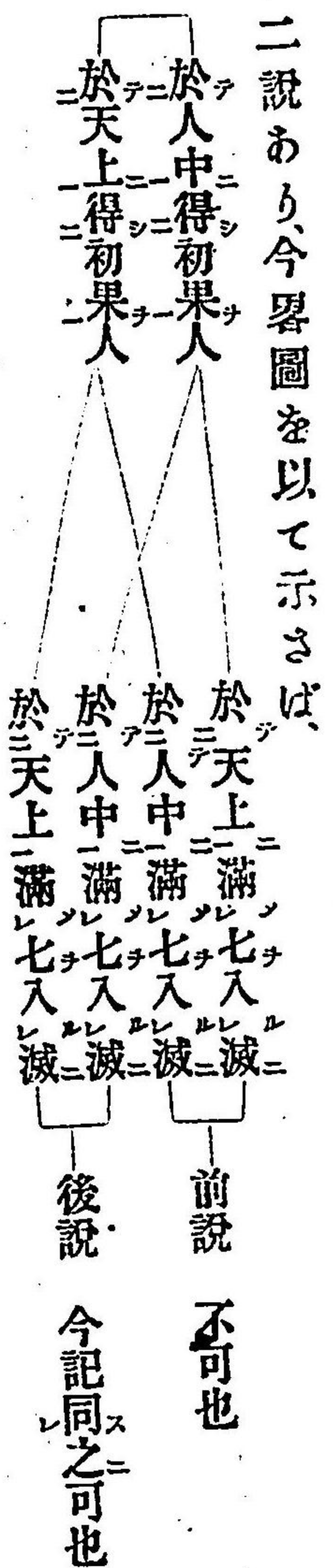


即ち婆娑論の第三義を俱舍論師は依用せり、其の俱舍論師の依用せし義を今記主も亦依用せしもの、如し彼の相續身の業力に由て、能く七有を受く、無漏聖道の方に由るが故に法爾として第八有を受けず、瘡へば七歩の蛇に整れしが如し、大種の力の故に法爾として七歩を行くことを得るなり、毒の勢力の故に第八歩を行くこと能はず、第四日の瘡の瘡は知るべし。至第七有等とは、第七有に至りて

若し無佛の時に生ずれば彼の聖者は在家に於て必ず阿羅漢を得するなり、得果し畢れば必ず在家に住せず出家して自然に苾芻の形相となる、即ち剃髮染衣の身となるなり、之に就いて婆娑論三十六卷に異説あり、光記廿三卷四十四丁に引

けり、往見すべし。
若^シ於^テ人^ニ趣^ニ得^{スル}預^ハ流^カ果^ヲ七^ニ生^レ天^ニ趣^ニ七^ニ生^レ人^ニ中^ニ至^リ第七^ニ生^ニ彼^レ還^リ人^ニ趣^ニ得^ス般^ニ涅槃^ヲ若^シ於^テ天^ニ趣^ニ得^{スル}預^ハ流^カ果^ヲ準^レ此^ニ應^シ思^フ。

三には般涅槃の處を示す。若^シ於^テ人^ニ趣^ニ等^トは謂^ヘらく若^シ此^ノ極^ニ七^ニ返^レ有^ルの聖^者が最初人趣に於て預流果を得せし人は七たび天趣に生れ七たび人中に生れ第七生に至り彼れ人趣に還りて般涅槃を得す、若しも最初天趣に於て預流果を得せし人は七たび人間に下生し七たび天上に生じ第七生に至り彼れ天趣に還りて涅槃を得するなり、さて此の涅槃を得する處に就いて婆娑論四十六卷十七丁右



二説を出し畢て、初説を破して云はく、應に知るべし初説は理に非すと云へり、俱舍論師は唯後説のみを出せり、今記主も亦後説を依用せるものは是なり、因に七生の數へ方を示さば、初め預流果を得せし身を除いて七の數に加へずして、其の次生より數へて七生に至るものと知るべし。
諸預流者進斷欲界一品修惑乃至五品名爲一來向。是趣第二一來果。故若斷第六成一來果。

二には一來向果を明す、此の中に二初には正しく一來向果を明す、二には向中に就いて家々聖者を明す、初の中に三、初には正しく明す、二には一來の名義を釋す、三には疑難を通ず、初は即ち初なり、諸預流者等とは謂らく諸の預流果の聖者が段々進んで欲界修品のの上上品上の中品の一品二品乃至五品を斷じたる人を一來向と名づく、向とは趣向の義、即ち第二の一來果に趣向する位なるが故に一來向と名づくるなり、是は論廿四卷初丁左の文意に依るものなり、然しながら若し實を以て云はく、欲界修惑の第六品の無間までを一來向の位と云ふ、今乃至五品までを斷じたる人を一來向と名づく、と云ふは總相に約したるものなり、第二向第三向も亦之に準じて知るべし。若斷第六等とは若しも欲界修惑の第六品ま

でを断せば一來果の位となるなり。

梵云斯陀含此云一來彼往天上。一來人間而般涅槃。故或名曰薄貪瞋癡已斷上中六品。厚重唯餘下三品。薄貪瞋癡故。此受一生。中必斷上界煩惱。方證圓寂。

二には一來の名義を釋す。梵云斯陀等とは謂へらく梵語にては斯陀含と云ふ此には一來と云ふなり。彼の斯陀含即ち一來果の人若し最初人中に於て得道せし人ならば其の得道の生は除いて數へず。即ち欲界九品の惑中に於て已に上々上中上下と、中上中々中下との六品を斷じて、未だ下上下中下々の三品をば斷せざれば人天合聚の一生の故業を潤すべき惑あるに由て、一たび六欲天の隨一に生じ而かして一たび人中へ還り來りて涅槃を得ず。若し最初天中に於て得道の人なれば其の生を除いて、一たび人趣に往き而かして一たび天中に還り來りて涅槃を得するが故に一來果と名づくるなり。即ち具さに云へば一往來果と云ふべし。今は往の字を畧して一來果と云ふなり。或名曰薄等とは已に欲界修惑の厚重なる前六品は斷じて唯薄弱なる下上下中下々の三品の惑のみを餘すが故に薄貪瞋癡と云ふなり。此受一生等とは此の一來果の人は此の大の一生を受くる間

に必ず上二界の煩惱を斷盡して方に圓寂を證す。即ち般涅槃を得するなり。故に光記廿四卷六丁右に若し第六品を解脫道現前すれば一來果を成ず。得道の身を除く。彼れ天上に往き一たび人間に來りて而かして般涅槃するを一來果と名づく。此を過ぐる以後は更に生無きが故にと云へり。此の文中の往來の言に依るに必ず人天合聚の生なる大の一生なること知るべし。さて般涅槃とは般を入と翻す涅槃をば圓寂と翻すと知るべし。

應知欲界經生聖者。若起聖道能進斷惑。必於此生得無學果。但爲斷道起時艱辛。勵力起得誰肯更生。以曾受生極厭苦故。若七生位經生聖者能進斷惑。必不更作家家人。若家家位經生聖者能進斷惑。必不更作一來等人。若一來位經生聖者能進斷惑。必不更作一間等人。

三には疑難を通ず。應知欲界等とは先づ疑難の意は次上に明せし如く、一來果の人は一往來にして無學果を證すと云は、家々の聖者及び上流那含等の得果と相違を來すとの疑難あり。如何んか通釋するや、此の疑難を通ずるに古徳二門を以て通釋せり。一には向果別立門、二には攝向合果門を立るあり。又豎入と横入と

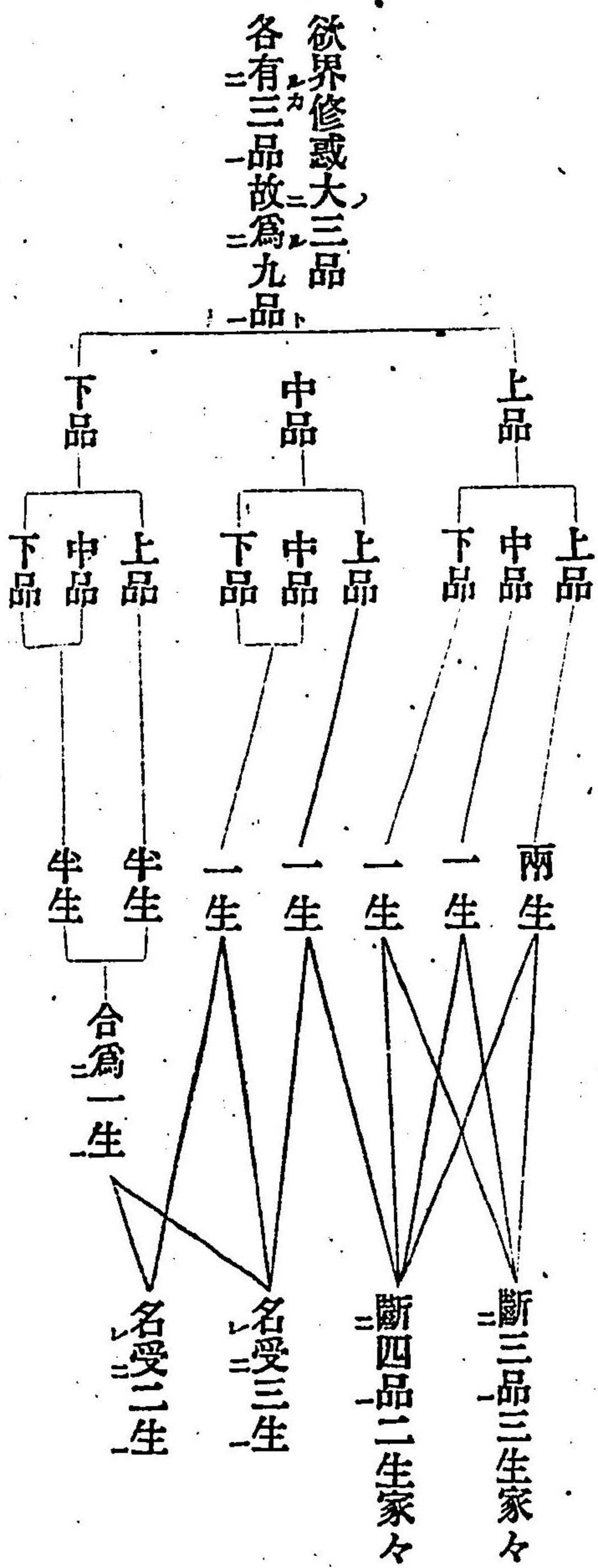
の二門を立つる説あり、今は且らく後義に依りて此の文を釋せんとす、謂らく欲界經生の聖者なれば、聖道を起し進んで餘す所の欲の下三品の惑を初とし上二界の惑を斷するに、精勤奮勵するを以て、此欲天が人中加に於て必ず無學果を得す、斯く斷惑の爲に策勵するは、曾て欲界に經生して厭苦の心切なるが故なり、故に隣記廿四卷二丁右に經生の聖は、更に餘界に往て生せず、故に此の界に於て後生に便ち般涅槃するが故にと云へり、若七生位等とは、若しも七生を経る聖者なれば次第斷證の人にして、必ず第五第六品の惑を斷じて一來向と果との次第を履むなり、故に家々の聖者とは殊なれり、家々の聖者なれば欲界上三品を斷じたる聖者にして阿羅漢に横入する人歟、又は欲界修惑の前四品のみを斷じたる聖者にして阿羅漢に横入する人歟、又は七生經生の人、又は家々の聖者とは、ならぬなり、光記廿四卷五丁左に一來向は、寛く家々は義狭しとは是の謂ならん、若家々位等とは、若しも家々の聖者なれば、欲界修惑の上三品斷の人歟、又四品斷の人歟にして、直ちに進んで第四阿羅漢果に横入する者なれば、一來不還の果位を踐す、直ちに無學果を證するなり、若一來位等とは、若しも一來の向果の經生の人なれば、厭心強くして斷惑を勤勵するが故に、直ちに第四果を證得し、更に一

間及び不還果を経ざるものと知るべし。

一來向中若三緣具轉名家々。一由斷惑斷欲修斷三四品故。二由成根得能治彼無漏根故。三由受生更受欲有三二生故。

二には向中に就いて家々聖者を明す、此の中に三初には家々聖者の三緣を明す、二には一品斷等の家々聖者の有無を問答す、三には正しく人天家々の相狀を明す、初の中に二初には正しく三緣を明し、二には潤生の相を明す、今は即ち初なり、一來向中等とは、謂らく一來向の中に於て三種の緣を具足せし人に、局り家々聖者と名づく、若しも三緣具足せざる人は、一來向とは名づく、雖も家々とは名づけざるなり、轉とは得捨に通ず、即ち預流の名を轉捨して、家々の名を轉得すれば、轉と云ふなり、家々とは所生の處なり、彼處、此處と異なるを云ふ、故に義林章五本二丁右に家より家に至るが故に家々と名づく、と云へり、即ち所生の處を取て能生の人の上に施すが故に、全分取他名の有財釋なりと知るべし、一由斷惑等とは第一緣なり、欲界修惑の九品の中に於て前三品及び四品を斷ず、即ち三品斷のもの、三品斷なり、四品斷のものは二生家々の聖者なり、是は一品二品五品斷の者を簡ぶなり、上中六品の中に於て、唯一品二品を斷じて死する者なし、又第五品

まで断じて第六品を断せぬ者もなし、故に之を簡ふなり、二由成根等とは第二縁
 なり能く彼の三四品を對治すべき無漏根を成就せしものを云ふ、是は曾て凡夫
 位にして有漏六行觀を以て三四品を断じて未だ勝果道を起さざるも人を簡ふ
 彼は初縁をば具するなれども未だ無漏根を成就せざれば是等を簡ふなり、三由
 受生等とは第三縁なり、更に欲有の三二生を受けるが故に、欲有とは上二界を簡ふ
 なり即ち三品断のものは三生家々なり、四品断のものは二生家々なり、圖を以て
 示さば、



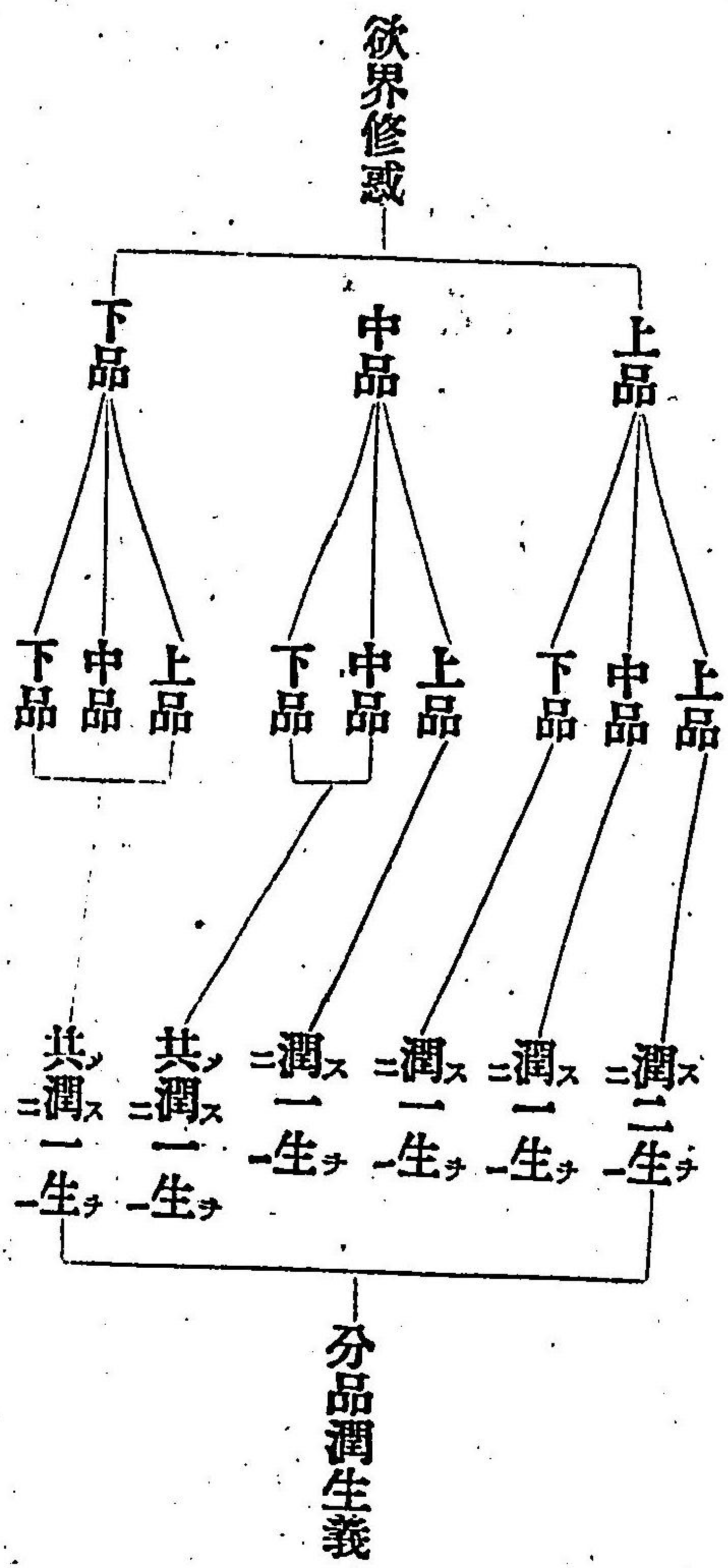
斯の圖解の如く、惑力强弱の不同に由り、潤生を殊にす、即ち欲界修惑の九品の中
 に於て、上々品は惑力最も強し、故に大の二生を潤す、乃至下々品は惑力最も微弱
 なれば、唯半生を潤すのみ、生とは大の一生のとなれば、三品断は三生家々とは先
 づ人中得道のものなれば、進んで三品を断じ、死して天に生じ、人々に生じ、又天に生
 じ、人に生じ、而して天に生じて、其天中に於て阿羅漢を得ず、是を人中得道天中得
 果と云ふ、又是を天三人二の聖とも云ふなり、又天中得道のもの、三生を受けるは
 上の如く大の生を以て論せば、二生半なり、先づ天中に得道し、進んで三品を断じ、
 死して人に生じ、天に生じ、又人に生じ、天に生じ、而かして人に生じて得果す、是を
 天中得道人中得果と云ふなり、又是を人三天二の聖とも名づく、又四品断の聖な
 れば、二生家々なり、二生とは人天合聚の大の生を以て論せば、一生半なり、先づ人
 中得道して進んで欲界修惑の前四品を断じ、死して天に生じ、人に生じ、而かして
 天に生じて、其の天中に於て得果す、是を人中得道天中得果の聖と名づく、亦是天
 二人一の聖とも名づく、天中得道のものは準じて知るべし、應に知るべし、已上の
 三縁具足のもの、は家々聖者と名づけ、其の随一たりとも缺くときは家々の聖者
 とは名づくべからずと、問ふ家々の聖者は更に欲有の三二生を受るとせば、聖者

も亦新業を造るや。答ふ此に就いて光記廿四卷二丁に云はく聖人牽引業を造るや不や。解して云はく若し正理六十四卷の説に依れば此の二三生は異生の位に二三生を感ずべき業を造作せり。今其の故を増長するに由る。諸の聖者が聖位に於て更に能く後有を牽くべき業を作るに非ず。生死に背き涅槃に向ふを以ての故に。此に由て契經に説く諸の聖者は唯故業を受く更に新を受けずと。

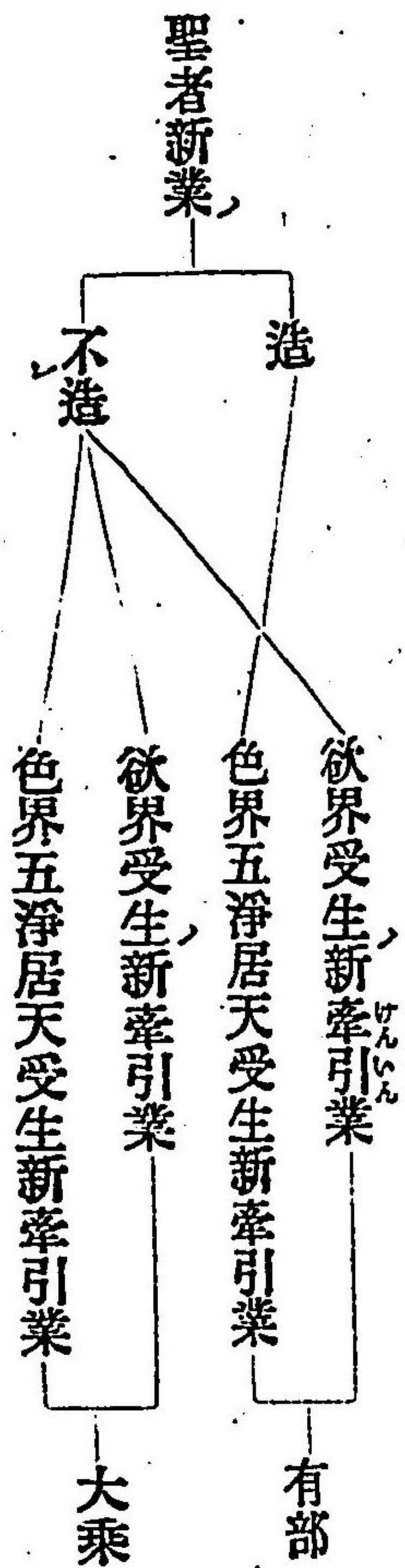
言斷三四品受三二生者。若斷三品名受三生。若斷四品名受二生。以九品惑能潤七生。言九品潤七生者。且上々品能潤兩生。上中上下中上各潤一生。中中中下合潤一生。下三品惑共潤一生。既上三品能潤四生。故斷上三品四生便損名受三生。既言中上品潤一生。故斷中上品復損一生。前斷三品已損四生。今斷中上復損一生。故斷四品總損五生。受二生也。

二には潤生の相を示す。此の中に二初には分品潤生の義。二には共潤生の義。今は即ち初なり。言斷三四等とは。謂へらく若し欲界修惑の前三品を斷せば三生を受くると名づく。若しも欲界修惑の前四品を斷せば二生を受くると名づく。とは欲界修惑の上々乃至下々品の九品の惑を以て七生を潤すを以てなり。九品の修惑

を以て七生を潤すとは。且らく上の上品は惑力最も強きが故に能く大の二生を潤すなり。上の中品と上の下品と中の上品との三品は。惑力稍強きが故に各一生づつを潤すなり。中の中品と中の下品とは。惑力稍弱きが故に二品の惑力を合し一生を潤すなり。下の下品と下の中品とは。惑力最も微弱なるが故に三品の力を合し一生を潤すなり。若しも是を大の三品とせば。上の三品を以て四生を潤し。中の三品を以て二生を潤し。下の三品を以て共に一生を潤すなり。今初學の便に供せん爲め畧圖を以て分品潤生の義を示さば、



是の分品潤生の義は、原本の傍註には光記初解とありと雖も、そは甚だ鹿論なり
光記廿四卷六丁左巳下に別潤共潤の二義を出し、而して其の別潤の中より三解
を分出せり、故に合して四解となる、左すれば今記の初義を以て俄に光の初解と
爲すは未可なり、頌疏廿四卷初丁左巳下に共別合潤の義を立てたり、今記の初解
は頌疏の義に依る歟、今記の後義は光記の後義に依るものならん、さて潤生とは
聖者は已に三界の見惑を斷じたるものなれば、決して欲界に受生すべき新業を
ば造らずと雖も、凡位に於て造りし故業が残りてあるなり、故に今此の九品の修
惑を以て其の故業を潤して後有の生を感せしむるを云ふ、之に就いて大小乗の
別あり



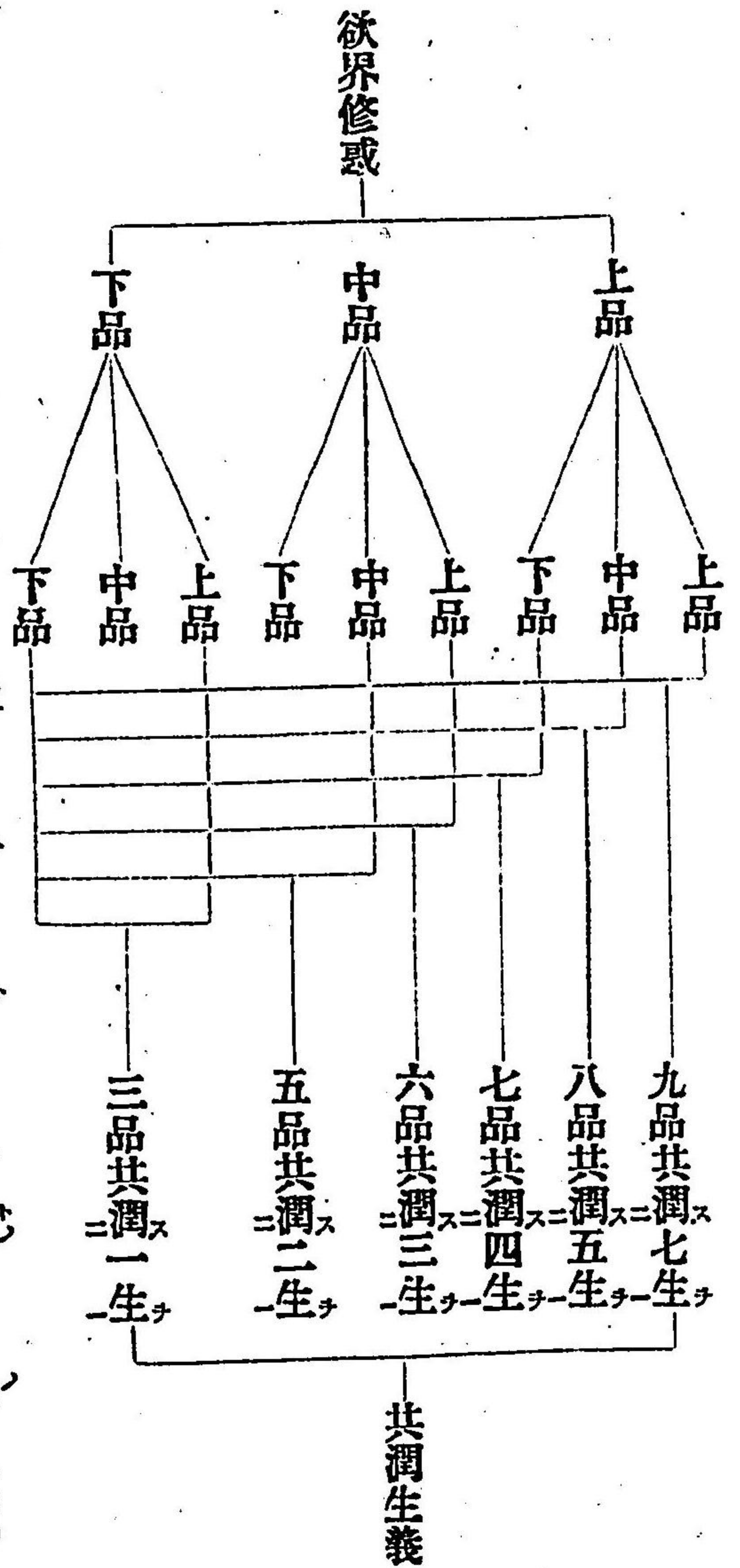
既上三品等とは既に上の三品を斷ずれば七生の中に於て四生を損して三生が
残る、更に中の上品の一品を斷ずれば復一生を損す上に損せし四生を合せば都

合五生を損して二生が残るなり、本文と對照し熟考すべし、
又解九品未斷皆潤七生、然於其中強弱不等、猶如九人大小不
同、力有強弱共舉七石穀、若斷一品餘八惑、猶潤五生、如八人共
舉五石穀、餘餘喻應知。

二には共潤生の義、又解九品等とは謂らく是は光記の後解に依るなり、九品なが
ら未だ斷せざる人は九品の惑力を以て共して七生を潤すなり、然るに其九品の
惑の中に於て、惑力強弱不同あり、上の上品は惑力最も強し、故に二生を潤すの力
あり、乃至下の三品は惑力至て微弱なれば、三品の力を合して僅に一生を潤す力
あり、但し上の上品獨立にて二生を潤すと云ふには非ず、然りと雖も、若しも上々
品を斷せば五生を潤すのみにして七生を潤す能はず、故に反して知る上の上品
には二生を潤す力ありしと云ふことを喻へば、九人の力を合せば七石の米を舉
げ得るなり、若しも其の中より甲者一人を除くときは、餘八人にて七石の米を舉
げ得ずして、唯五石の米のみは舉げ得ると假定せよ、甲者には二石の米を舉げ得
る力ありしと云ふことを知るべし、今畧圖を以て共潤生の義を示さば、

問。何故無斷一品二品五品五生四生一生半家々者耶。

二には一品斷等の家々聖者の有無を問答す此の中に二初には問二には答今は即ち初なり問の意は既に三品斷の三生家々の聖者あり又四品斷の二生家々の聖者もあり左すれば何の理由あつてか一品斷の五生家々二品斷の四生家々五品斷の一生半家々の聖者なきはなきやとの意なり。



而有死生。謂由聖者得初果已斷欲修惑起大加行必無未斷。大品結三品名有死生故。故斷一品二品必斷三品也。斷第五品必斷第六品者。謂斷第六品證一來果。以無一品能障得果故。

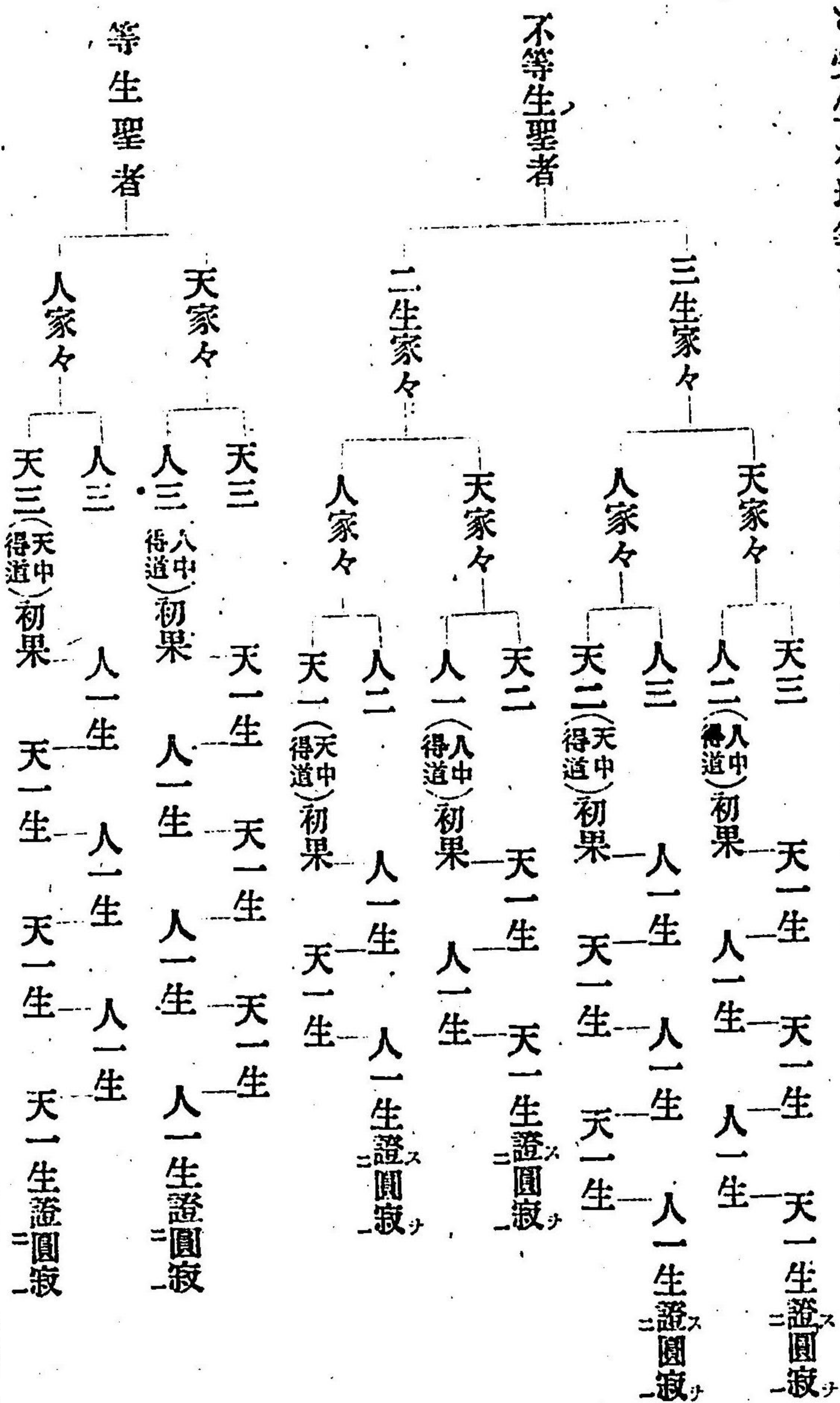
二には答なり。答必無有等とは、謂へらく一品斷の五生家々二品斷の四生家々の聖者のなき所以は、初の二品のみを斷じて、第三品を斷せずして、其の中間に死生することなし、又五品斷の一生半家々のなき所以は、若しも第五品まで斷じて第六品を斷せずして死生することなし、先づ一品斷二品斷のなき所以を明さば聖者が預流果を得し已て將に修惑を斷せんとするときは、必ず大加行を奮起するが故に、其加行の勢力に由て、必ず上三品の惑を斷するなり、故に上二品を斷せば必ず第三品まで斷するなり、是に由て一品斷の五生家々、二品斷の四生家々の聖者はなしと知るべし。斷第五品必等とは、是れは五品斷の一生半家々の聖者のなき理由を明すなり、若し欲界修惑の第五品まで斷じれば、必ず第六品まで斷じて一來果を得するなり、如何となれば第六の一品の力弱きが故に一來果を證することを得る力なし、故に第五品まで斷せば必ず第六品を斷じて一來果を證するなり、是に由て五品斷の一生半家々の聖者のなきと云ふことを知るべし。

應知總有二種家々。一天家々。謂欲天趣生三二家而證圓寂。或於一天處而受三二生。或於二天處受三二生。或於三天處而受三三二生。二人家々。謂於人趣生三二家而證圓寂。或於一洲處受三二生。或於二洲處受三二生。或於三洲處而受三三二生。若天三生家。天三人二。若天二生家々。天二人一。此即人中得道天上涅槃。從涅槃處爲名。若人家々。翻此應知。此不等生家々。亦有等生家。家天三人三等。此據得道及涅槃處爲名。思之應知。

三には正しく人家々天家々を明す。此の中に三初には正しく明す。二には初得道の生を除くとを示す。三には妨を通ず。今は即ち初なり。應知總有等とは謂へらく家々に二種あり。一には天家々。二には人家々なり。先づ天家々は欲界天に於て。或は三家に生じ。或は二家に生じて般涅槃す。即ち無學果を證するなり。若しも三品斷なれば三家に生じ。四品斷なれば二家に生ずるなり。且らく一の四王天に三たび生ずるもあり。或は切利夜摩兜卒の三天に生ずるもあり。二家も知るべし。文面は天のみに受生するが如し。雖も人中天趣往來しつゝ受生するものと知るべし。二人家々等とは。これは人家々を明すなり。人家々の三品斷のものは人の三家

に生じ。四品斷のものは人の二家に生ず。或は一洲處に於て三二生を受るもあり。或は二洲處に於て三二處を受るもあり。且らく一例を出さば。或は唯南洲のみに三たび受生するもあり。或は東西南の三洲に受生するもあり。是も文面は唯人のみに受生するが如し。雖も人天に往來しつゝ受生するものと知るべし。若天三生等とは。此の生は人天合聚の一生にして。一往一來を一生と名づく。故に之を大生とも全生とも共生とも名づくるなり。若しも小の生を以て算ふれば五生となり。大生を以て算ふれば二生半となるなり。故に天の三生家々なれば天三人二にして。初め人趣に死して天に生じ。人に生じ。一往來。又天に生じ。人に生じ。二往來。又天に生じて般涅槃す。是を天三人二と云ふ。天の二生家々は準じて知るべし。此即人中等とは。此の三家々の聖は。人中に於て最初得道して天上に於て般涅槃す。即ち涅槃の處に従へて天家々と云ふ。人家々は。最初天中に於て得道し。人中に於て般涅槃す。是も亦涅槃の處に従へて人家々と云ふなり。此不等生等とは。此等不等生の名は。婆娑論四十六卷十七丁に出づ。此の不等生とは。次上に明せし天三人二と云ひ。乃至天二人一と云へるが如く。人と天との受生に奇數ありて。均等ならぬを云ふ。是は最初得道の生を除くが故に奇數が出るなり。等生とは偶數なり。人と

天と受生が均等なるを云ふ、今畧圖を以て不等生と等生との相を示さば、



さて此の人家々天家々に就き、古來未決の一大難關あり、先づ初に二義の大綱を述べ、次に評判を加ふべし、初に二義の大綱を述ぶるに、二初には人天往來の義、二に

は人家々は人に局り天家々は天に局りて受生するの義、先づ初に人天往來の義を述べんとす、今記上來明せしは即ち人天往來の義の大畧なり、是れ決して今記の臆釋にあらず、瑜伽論の記六之下卷十九丁左に云はく、西方に二説あり、難陀論師は人天二趣若しくは往若しくは來と云ひ、戒賢論師は云はく二生家々は唯天上に於て二生往來す、三生は之に準じて知るべし云々、是に由れば人天往來の義は難陀論の説にして、遠くは正理論六十四卷十一丁右にも、人天往來の義を立てたり、左すれば衆賢論師難陀論師より、下は普光法師法寶法師に至るまで、皆人天往來の義を成せり、後學此の義を宣揚するも亦宜哉、然に茲に一つの難問あり、若しも人天往來するなれば、何を以ての故に人家々天家々と別名を立つるや、答て曰はく人家々も天家々も同じく人天往來受生すと雖も、圓寂を證せし處に從つて名を立つるなり、若しも人中得道天中得果の聖者なれば、其の得果(證圓寂)せし處に從へて天家々と云ふ、若しも天中得道人中得果の聖者なれば、其の得果(證圓寂)の處に從へて人家々と云ふなり、又人家々は人に局りて受生し、天家々は天に局りて受生すと云ふ義も亦上は護法論師戒賢論師より、下は要解師を始め近世の學匠多くは此の義を成立せり、次に批判を加へば、問ふ斯の兩義の中何れの

義を以て正義となすや、答ふ兩者各々相承嫡傳の説なり、而かも道理文證あり、末學堂に容易に正不の批判を下して可ならんや、然りと雖も慧學研磨の爲め、敢て正不の批判を下さば、要解の高判に伴ふて、人家々は人に局り、天家々は天に局り、て受生すると云ふ、護法輪師戒賢論師の義を以て正となすべし、若し正理論師及び光寶兩師等の如く、人天往來の義を成立せば、何を以ての故に人天家々と云はずして、人家々天家々と云ふや、看よ彼の極七返有の聖者は、人々往來受生するが故に、人天の別名を立てずして、單に極七返有と云ひしに非ずや、反例するに家々の聖者は人家々は人に局り、天家々は天に局りて受生するが故に、人家々天家々の別名を立てしなり、況んや婆娑論五十三卷十四丁に家々を明して曰はく、天家は或は一天處、或は二天處、或は三天處に二三生を受く、乃至若しも人家々なれば、或は一洲處、或は二洲處、或は三洲處に、二三生を受く云々と云へり、俱舍論全く婆娑に同じ、是に由て之を觀れば、婆娑俱舍には人天往來互生するの明文なし、故に今は人天互生の義を取らず、要解師と伴ふて人家々は人に局り、天家々は天に局りて受生するの義を成立するなり、若しも人家々天家々の義の正不を了知せんとせば、諸論に就いて研磨すべし、已上の略辯を以て餘蘊なしと誤想する勿んば好し。

一切家々並不論初得道生、皆約得聖之後更受生説。

二には初得道の生を除くことを示す一切家々等とは謂らく上に明せし如く三品斷の聖は三生家々四品斷の聖は二生家々と論すと雖も皆並に初得道の生を除いて其の次生より算ふるなり、決して初得道の生を加へて算するにあらずと知るべし。

然言斷三四品餘二三生者此據極説此中非無滅三三生若斷三品經一生已總斷餘結入涅槃者亦是三生家々攝也。二生家其義亦爾。

三には妨を通ずるなり、然言斷三等とは謂へらく上に明せし如く三品斷の聖は三生を潤し、四品斷の聖は二生を潤すと云は、決して其の三三生を減ずることなきやとの妨あり、今その妨を通じて曰はく、三品斷の聖は三生を潤し、四品斷の聖は二生を潤すと云は、此れは極めて多く生を潤すものに就き論じたるものなり、時としては此の三三生を減ずるものなきに非ず、(本文の滅の字恐くは滅の字懸、若しも三品斷の人が一生經已りて、餘の六品の惑を斷じて般涅槃する者は、是は

三生家々の中に攝む其の所以は既に三品を斷じたれば三生を餘し潤すが定規なるに時として三生を経ざるを以てなり又四品斷の人なれば二生を経べき定規なるに時として一生を経て直ちに般涅槃するものあり此も亦二生家々の中に攝むと云ふ意なり例せば正理論六十四卷十一丁の極七返の聖が七生を滿たすして般涅槃するも極七返の中に攝むるが如し今も三二生を滿せずとも三二生家々の中に攝むるなり已上寶疏廿四卷三丁左の取意なり今記も亦寶疏に依るものなり然るに光記廿四卷五丁左の意に依れば家々の聖の三二生を滿たさずして般涅槃するものは家々の聖に攝めずして一來向の中に攝むるなり如何なれば家々は三緣具足のものに局るが故なり是に由て家々は狭く來向は寛しと云ふなり今記寶疏に依るものは可なり。

諸一來者進斷欲修惑七八品名爲不還向是趣第三不還果故。若斷第九成不還果梵云阿那含此云不還必不還來生欲界故。

三には不還向果を明すに三初には畧して向果を明す二には向中に就いて一間を明す三には廣く果を明す今は即ち初なり諸一來者等とは謂らく既に欲界修惑の上の上品上の中品上の下品と中の上品中の中品中の下品との前六品を斷

せし一來果の聖者が更に進んで欲界修惑の下の上品下の中品との第七第八の兩品を斷せし人を不還向と名づく若しも此の人が欲界修惑の下の下品即ち第九品の惑を斷じ盡せば不還果の聖者と云ふ不還とは再び欲界には還り來らざる義なり梵云阿那含等とは是は梵漢對辯せしものなり即ち梵語にては阿那含と云ふ此の土の語に翻譯せば不還と云ふなり。

不還向中若三緣具轉名一間一由斷惑斷欲修斷七八品故二由成根得能治彼無漏根故三由受生更受欲有餘一生故。

二には向中に就いて一間を明すに二初には三緣を具するとを明す二には一間の名義を釋す三には問答分別今は即ち初なり不還向中等とは謂へらく上に明せし不還向の聖者の中に於て三種の因縁を具足せし人を一間の聖者と云ふなり若しも三緣の隨一を缺くときは一間の聖者とは名けざるなり一由斷惑等とは是れは欲界修惑の七八品を斷じたる人を指す是れに二種の人あり一には先きの異生位に於て有漏六行觀を以て七八品を斷じたる人が今見道に入り一來果に住せし人なり二には一來果の人進趣して七八品を斷じたる人なり二由成根等とは無漏根を成就せしと謂らへく欲界修惑の七八品を斷すべき能對治の

無漏根を得するを云ふ彼の異生位に於て六行觀を以て斷或せし人なれば、一來果後に必ず無漏の勝果道を起して離繫を得す、又一來果後に斷する人なれば、斷對治道を起して離繫を得す、何れにせよ皆無漏根を成就したる人を云ふ、三由受生等とは、是は更に欲界の一生を受くる人を云ふ、此の生は小の一生にして人歎天歎の一生を受くる人に同る、但し彼の現般那舍の如きは生數を缺くが故に一間とは云ふべからず。

言一間者、間謂間隔、彼餘一生爲間隔、故不證圓寂、或餘一品、欲修所斷、惑爲間隔、故不得不還果、前約三異熟、後約二煩惱、有一問者、說名一間、二には一間の名義を釋す、言一間者等とは、謂へらく此の一間の聖者の名義を釋するに二義あり、此前義の意なれば、間は間隔の義にして、間隔るとなり、即ち人歎天歎の一生が狹まり隔て、涅槃の果を證することを得ざらしむ、或餘一品等とは、斷じ殘しある欲界修惑の第九品の惑が狹まり隔て、不還果を得ざらしむ、即ち前義は異熟の人歎天歎の一生が間隔しある一間と云ふ、後義は煩惱の一品が間隔しあるを一間と云ふ、此の一間を有する人を一間と云ふ、全分取他名の有財釋なり、即ち一の能障の煩惱にあれ、一の異熟果にあれ、何れにせよ、此の間隔法は

行者の所有物なり、今その所有物の名を取りて能有の行者の名となして、一間と云ふ故に全く他の名を取る有財釋なりと知るべし。

問。前言無一品、惑能障得果、何故斷第八品、不斷第九品、有死生耶。答。以斷第九品、一即得果、得第三果也。二復越界、越欲界也。由越界、故第九品、惑障不還果、斷第六品、雖即得果、而不越界、故此一品不能障果。

三には問答分別なり、問前言無等とは、謂へらく次前に五品斷の家々を立てずと云ふことを明す下に、以無一品第六能障得果、故と云ふ、既に第六品の惑は得果を障ることなきが故に、第五品を斷じたる人は死生せず、直に第六品を斷ずると云ふ、然らば今も亦第八品を斷じたるれば、死生せず、直に第九品を斷じて、不還果を證すべし、何んが故に第八品を斷じて、直に第九品を斷じ、不還果を證せずして、其の間に一間の聖者を立つるや、答ふ二の理由あり、一には若しも第九品の惑を斷じたるれば、第三不還果を得するを以てなり、二には第九品の惑は越界難斷の惑として、此の第九品の惑を斷せば、欲界を越えて上界に移るなり、故に此の惑は斷じ難し、是に由て欲界修惑の第九の一品は能く得果を障ふるの力あり、前の欲

界修惑の第六品は越界難斷の義なきが故に斷じ易ければ第六の一品の惑能く得果を障ふるの力なしと知るべし。

明^ス不^チ還^ナ果^ヲ差別多種^{アリ}。一^ニ明^シ七種^ヲ不^チ還^ナ。二^ニ明^シ九種^ヲ不^チ還^ナ。三^ニ明^シ七善士^ヲ趣^ク。四^ニ明^シ欲界經生^ヲ。五^ニ明^シ身證不^チ還^ナ。

三には廣く果を明す、此の中に二、初には標列、二には別釋、今は即ち初なり、文解し易し故に今釋を略す。

初七種不還者。一^ニ中般^ヲ。二^ニ生般^ヲ。三^ニ有行般^ヲ。四^ニ無行般^ヲ。五^ニ上流^ヲ。六^ニ行無色^ヲ。七^ニ現般也。

二には別釋の中に五、初には七種不還を明し、二には九種不還を明す、三には七善士を安立す、四には欲界經生を明す、五には身證不還を明す、初の中に三、初には標列、二には別釋、三には雜修靜慮を明す、今は即ち初なり、文解し易し今釋を略す。

中般者謂欲界沒色中有中般涅槃故。

二には別釋、此の中に七、初には中般を釋し、二には生般を釋す、三には有行般を釋す、四には無形般を釋す、五には上流般を釋す、六には行無色般を釋す、七には現般を釋す、今は即ち初なり、此の中般とは謂らく不還の聖者が欲界に沒して色界に

往く中有の位に住して、生すべき色界地の聖道を起し現前して、餘の煩惱を斷じ阿羅漢を成じ即ち般涅槃するが故に中般と云ふ、故に婆娑論百七十四卷三丁左に云はく、彼より命終して色界の中有を起し、即ち彼の中有の位に住して、是の如き種類の無漏道を得し、此の道力に由て進で餘結を斷じ、無餘依涅槃界に於て般涅槃す、是を中般涅槃と云ふ、問ふ、中般涅槃とは、唯無餘依涅槃界に同るとやせん、有餘依涅槃界にも通すとやせん、答ふ、光記二十四卷十二丁左に二釋を作れり、第一釋は無餘依涅槃界に同る、如何んとなれば次上所引の婆娑の文に准ずるが故に第二釋は無餘依涅槃界と有餘依涅槃界とに通すと云ふ、婆娑に有餘依涅槃を説かざるものは略して言はざるのみ、豈惑を斷じ已て第二剎那に無餘依に入るべきものならんやと云へり、私に評して云はく、第二釋可なり、寶疏二十四卷七丁右四行も亦同じ。

生般者色界生已般涅槃故。此具勤修速進二道。

二には生般を釋す、此の生般とは、謂へらく不還の聖者が、欲界に沒して色界に往き、生じ已て久しからずして、能く聖道を起して餘の煩惱の斷じて阿羅漢を成じ般涅槃す、此人は勤修と速進との二道を具す、二道と云ふと雖も道が二つあると

云ふには非ず、唯一道を勤め修するを勤修道と云ふ、道が速に進む邊を速進道と云ふ、此の二道を具するが故に生ずること久しからずして般涅槃を得ず、般涅槃とは有餘依涅槃なり、彼れ壽命盡て方さに無餘依涅槃界に入る、故に今は有餘に約して解すなり。

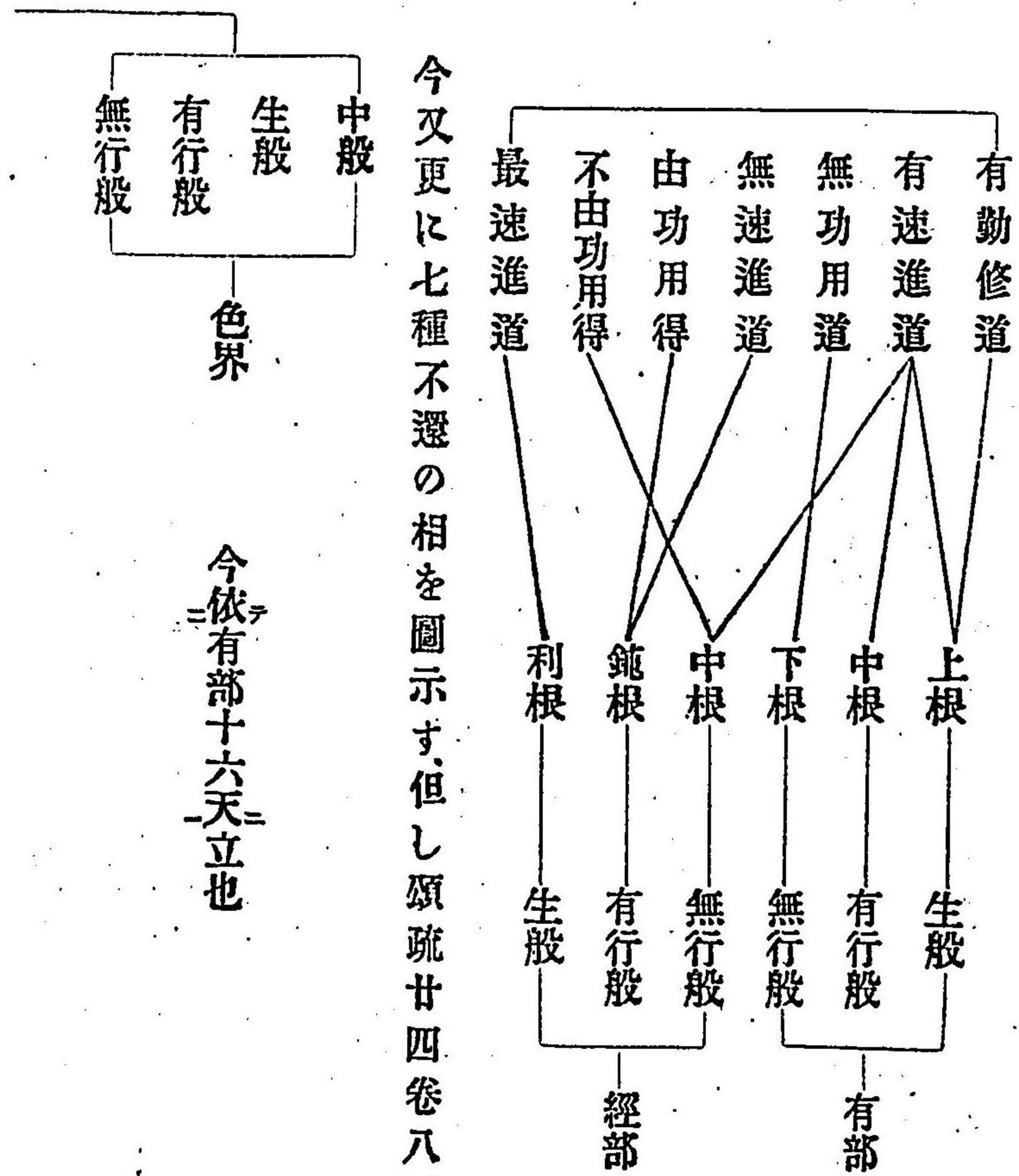
有行般者色界生已長時加行方般涅槃。有勤修行無速進道。

三には有行般を釋す、此の有行般とは、謂へらく不還の聖者が欲界に没して色界に往き生じ已て長時の間加行を勤め、多くの功用に由て方さに有餘依涅槃を得ず、是は勤修行のみあるが故に有行と云ふ、即ち生じ已るは中般を簡び、長時は生般を簡ぶ、有勤修は無行般を簡ぶなり。

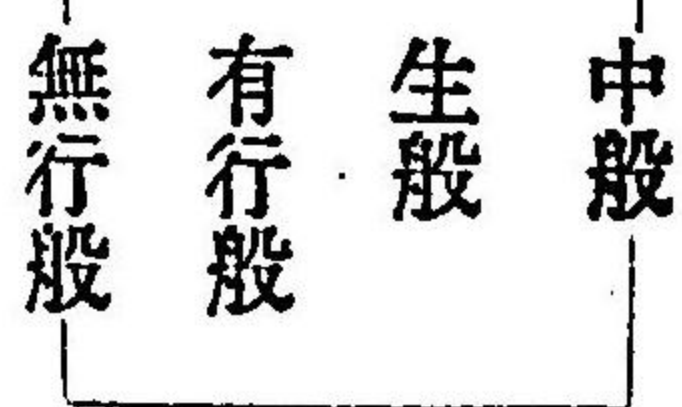
無行般者謂於色界生已經久加行懈怠無功用行般涅槃故。此勤修速進二道俱闕也。

四には無行般を釋す、此の無行般とは、謂らく不還の聖者が欲界に没して色界に往き生じ已て久しきを経て加行懈怠して、多く功用をなさずして、不圖無漏道が起り餘の煩惱を斷じて般涅槃界を得ず、此人は勤修と速進との二道俱に缺くを以ての故に無行と名づく、即ち生じ已るは中般を簡び、久しきを経るは生般を簡

ぶ、二道を缺くは有行を簡ぶなり、今更に生般等に就き、薩經兩部の異りを圖示せば左の如し。

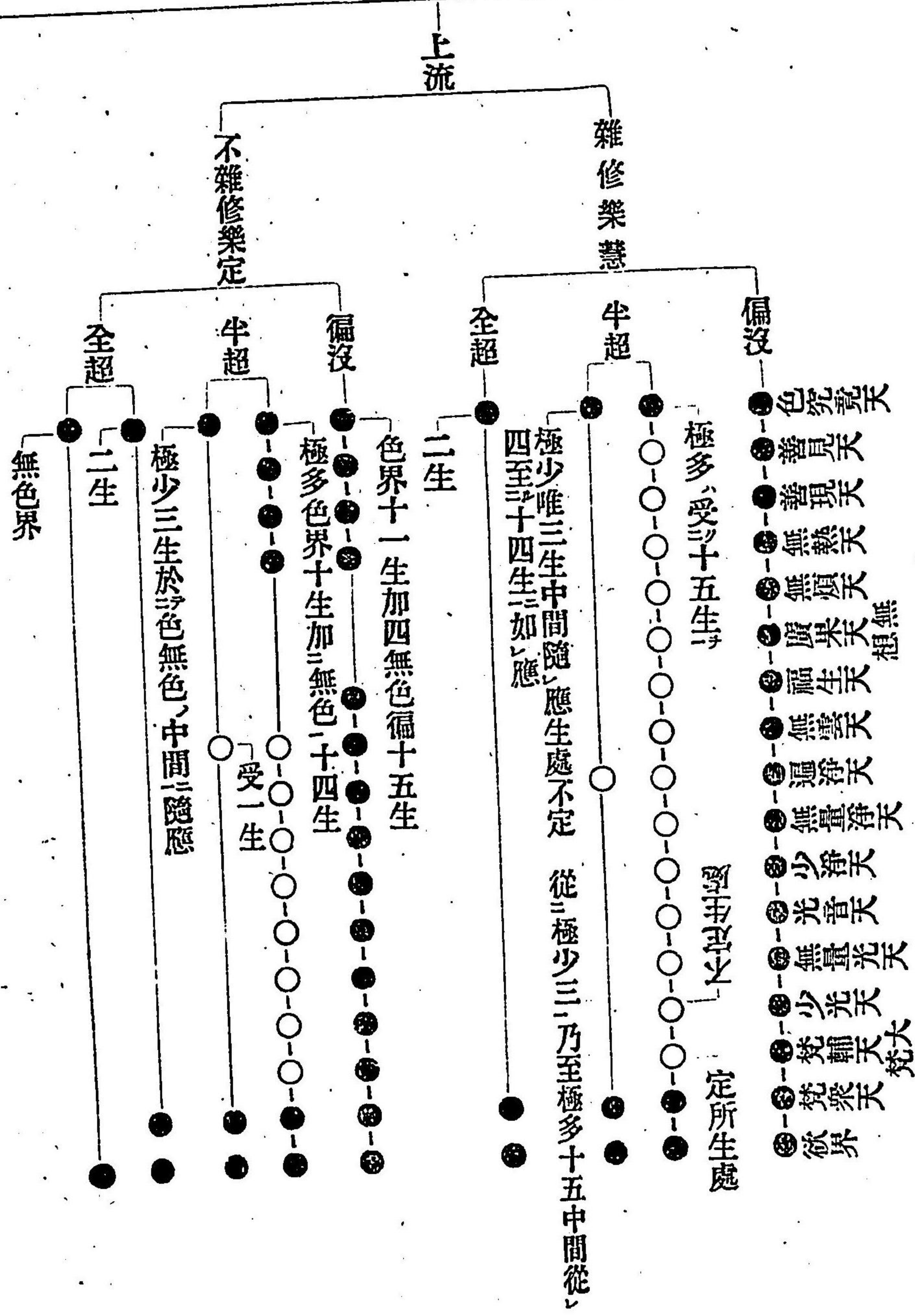


今又更に七種不還の相を圖示す、但し頌疏廿四卷八丁右の圖に依用するなり。



今依有部十六天立也

還不種七



言「上流者，是上行義。謂於色界要轉生上方般涅槃。上流有二。一者有雜修，即樂慧也。二無雜修，即樂定也。若雜修者，生色究竟。無雜修者，能往有頂。」

行無色(生般有行) 無行上流
欲界現般

五には上流を明すに二初には總釋二には別釋今は即ち初なり。言上流者等とは謂らく上流は上行の義とて、不還聖者が欲界に没して色界に生じ要す轉じて上地に生じて般涅槃するものを云ふ故に光記廿四卷十四丁左に云はく、色界に生ずること二生已去にして般涅槃するものを總じて上流と名づく、此れ唯上流して下流せざるが故に名けて上流と爲す、異生の人は上流の義ありと雖も亦下流するが故に上流と名づけずと、又寶疏廿四卷八丁に云はく上流とは是れ上行の義、前の生般は上界に生ずと雖も即ち生處にして般涅槃す更に上生せず上行の義なきが故に生般等を上流と名づけず若し色界に生じて要す上地に轉生するを皆上流と名づく上行の義あるが故にと云へり。上流有二等とは因果の別に由

て二の上流を分つ、謂らく定と慧とを樂ふの差別あるが故に、因の差別に由るとは樂慧の上流は定を雜修することあり、樂定の上流は定を雜修することなし、果の別に由るとは樂慧の上流は色究竟天に生じ、無色界に生ぜず、樂定の上流は有頂天に生じて淨居に生ぜず故に因果の別に由て上流を二種に分つと云ふなり。就雜修中復有三種。一全超。二半超。三徧歿。

二には別釋此の中に二初には雜修を明し、二には無雜修を明す、初の中に二初には標列、二には別釋、今は即ち初なり、文解し易し知るべし。

今依色界十六天中辯此三種。言全超者謂在欲界於四靜慮已具雜修。遇緣退失。上三靜慮唯味初禪。從此命終生梵衆天。由先習力復能雜修。第四靜慮從梵衆歿。生色究竟。頓越中間故名全超。

二には別釋此の中に三初には全超を明し、二には半超を明し、三には徧歿を明す。今は即ち初なり。今依色界等とは謂らく今色界十六天と立つる有部宗の所立に依て、全超半超徧歿の三種を辯せば、先づ全超とは此の人曾て欲界に於て都べて四靜慮を修し、然るに退緣に逢ひ上の三靜慮を退失して、唯初靜慮のみが残る、而

も時としては初靜慮の定味に貪愛を起して初靜慮を愛味す、但し此の愛は潤生の愛に非ず、此の貪愛を緣として此の欲界に命終して色界初禪の梵衆天に生じ、其時先きの慣習力に乗じて、又第四靜慮を修す、而かも梵衆天より死して色究竟天に生ず、此は頗に中間の十四天をば超えて生ぜざるが故に全超と云ふなり。言半超者從梵衆歿。生色究竟。中間有十四天。漸次受生。或超一天。後生色究竟。或超二天。後生色究竟。乃至或超十三天。處後生色究竟。皆名半超。超非全。故名爲半超。非敵對之半也。超一天者受十五生。越二天者受十四生。乃至超十三天者。唯受三生。由此半超極多十五生。極少唯三生。中間多少如理思之。

二には半超を明す、此の中に二初には正しく半超の相を示す、二には聖者の大梵天に生ぜざる所以を示す、今は即ち初なり、言半超者等とは謂へらく色界初禪の梵衆天より死して第四禪天即ち色究竟天に到るの中間に十四天あり、其の十四天の中に於て、或は一天を超えて後ち漸次に生を受けて色究竟に生ずるもあり、或は二天を超えて後ち漸次に生を受け色究竟天に生ずるもあり、或は三天を超えて後ち漸次に色究竟天に生ずるもあり、乃至中間の十三天を

超て後ちに色究竟天に生ずるもあり、此等のものを皆半超と名づく、即ち超ゆること全超の如く全く十四天を超ゆるに非ず、又偏超の如く全く生ずるに非ざるが故に名けて半超と爲す、折半の半には非ず、非全の半なりと知るべし、超一天等とは、上の如く一天を超ゆるものは十五生を受く、二天を超ゆるものは十四生を受け、乃至十三天を超ゆるものは唯三生を受く、是に由て半超の聖者の極めて多く受生するものは十五生を受け、極めて少く受生するものは唯三生を受く、其の中間の生を受くるものは四生を受るもあり、五生を受るもあり、乃至十四生を受るもあり、そは理の如く考へ知るべし。

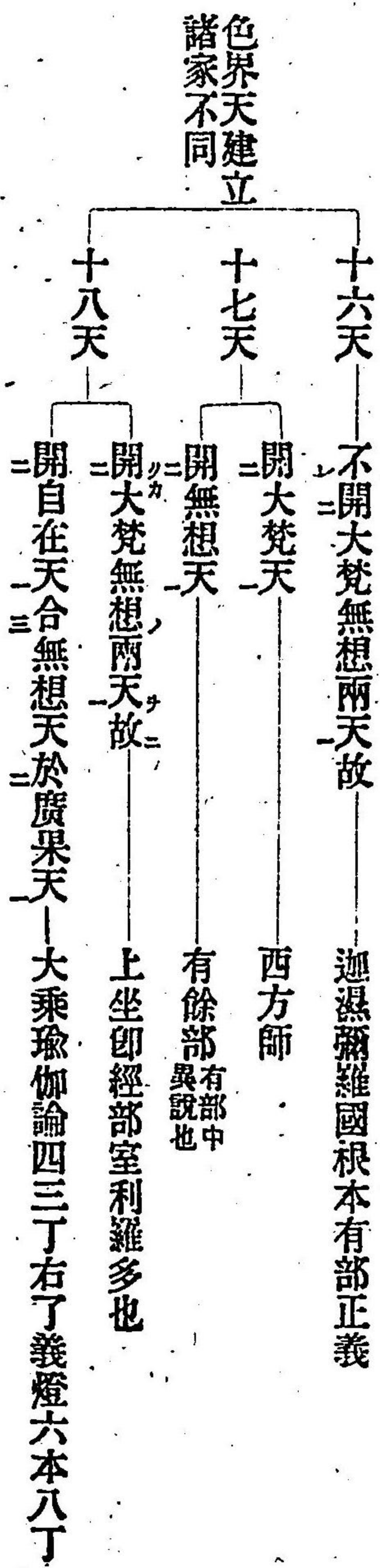
聖必不生大梵天處、謂大梵言我生世間、是戒禁取僻見處故。

二には聖者の大梵天に生ぜざる所以を示す。聖必不生等とは、謂へらく聖者は決定して大梵天には生ぜざるなり、如何なれば大梵天は僻見の處なるが故に、梵王は自から謂へらく、我は大梵なり自在なり作者なり化者なり生者なり養者なり是れ一切の父なりと、斯の如き僻見を起し一切世間などは我れ之を生せりとの戒梵受見(非計因)を起す處なり、故に聖者は生ぜざるなり、問ふ何を以ての故に無想天をば簡ばざるや、答ふ聖者の無想天に生ぜざることば理絶言あり、故に今簡

言遍歿者於十六天盡遍受生故名遍歿。

ばざるなり。

三には遍歿を明す、遍歿とは謂へらく色界初禪の梵衆天より漸次に色究竟天まで遍く生じ遍く歿するが故に遍歿と云ふ、歿とは死することなり、即ち梵衆天でも死し乃至色究竟天でも死す故に遍歿と云ふ、さて此の不還果の人は一度生ぜし天には必ず還生せず、即ち梵衆に死すれば梵輔天已上に生じ若し梵輔に死すれば少光天已上に生ずるなり、必ず下劣の處には還生せず、是亦不還の義なり、管に欲界に還生せざるのみならず、下劣の地にも還生せず、故に不還と云ふなり、今因に色界天建立に就き諸家の不同を示さば、



斯の圖の如く有部宗の正義は大梵天と無想天との兩天を別開せざるが故に十

六天となるなり婆娑論九十八卷十五丁左に詳なり又十七天建立の説に二説あり一には西方師の説なり此の師の十七天を立つるは色界初禪天より大梵天を別開す故に十七天となる婆娑論九十八卷十五丁俱舍論八卷初丁右に出たり又法勝毘曇六卷にも亦十七天と爲す全く西方師の説と同じ二には初禪の大梵を別開せずして第四禪天より無想天を別開して十七天となす婆娑論百五十四卷八丁左正理論二十一卷二丁光記八卷四丁左所引の有餘師是なり又雜心論八卷十二丁左には十六天と十七天との二説を並べ挙げたり又十八天と建つるにも二家あり一には經部中の上坐室利羅多なり此の師は初禪より大梵天を別解し第四禪より無想天を別解す故に十八天となるなり然るに頌疏師は此の經部中の上坐室利羅多を誤て上坐部となし十六七八薩經上など云ふは甚だ誤解なり又十七天を以て經部となすも謬なり學者それ頌疏の虚を傳ふる勿れ二には大乘師も亦十八天を建立す然るに經部中の室利羅多の説とは同じからず此の大乗師は無想天を以て廣果天に攝めて別立せずして五淨天より自在天を別開し初禪天より大梵天を別開す故に十八天となるなり故に瑜伽論四卷三丁右に色界の中に十八の住處あり無想天は廣果天に攝む別の處所に非すと云へり了義

燈六本八丁左に瑜伽論を引き十八天を成立しあり見るべしさて上來の諸説の中に大梵及び無想を別開せざるものは別處なきに約す即ち俱舍論等此の義邊に據て十六天と立つるなり又無想及び大梵を別開するものは身量の不同と因果の不同とに約す即ち梵輔天と大梵天とは身量同也からず又廣果天と無想天とは因も果も同じからず室利羅多等は此の義邊に據て十八天と立つるなり左すれば諸家の所立不同なりと雖も水火相違の義にはあらざる歟

無_キ雜_ニ修_ス者_ハ遍_シ生_ス色_ノ界_ニ唯_ニ不_レ能_レ往_ス五_ノ淨_ノ居_ニ天_ニ廣_ニ果_ノ天_ニ歿_シ往_ス生_ス三_ノ無_ニ色_ノ後_ニ生_ス有_レ頂_ニ方_ニ般_ニ涅_ニ槃_ニ此_亦有_全超_半超_後故_ニ色_ノ界_中下_ニ十_一天_ニ樂_定樂_慧俱_ニ得_レ受_ス生_於廣_ニ果_ノ天_ニ便_ニ分_二路_一若_シ樂_慧者_ハ生_ス五_ノ淨_ノ居_ニ若_シ樂_定者_ハ生_ス無_ニ色_ノ界_ニ此_五名_ニ爲_レ行_ス無_ニ色_ノ界_者樂_定那_含雖_レ生_ス無_ニ色_ノ經_ニ色_ノ生_ス故_ニ是_レ色_ノ界_攝

二には無雜修を明す無雜修者等とは謂へらく此の人は本と欲界に在て靜慮を雜修せずして色界定に愛味の心を起して死する後に色界初禪の梵衆天より漸次に廣果天まで十一天に遍く生を受く唯無煩無熱等の五淨居天には往かれぬ即ち廣果天に於て死して次に無色界の空無邊處に生じ識無邊處に生じ無所有

處に生じ遂に有頂天即ち非想非々想定に生じて般涅槃す。但し此の十一天に生ずべき樂定の中に於ても、亦前の樂慧の人の如く、全超と半超と遍歿との三種の不同あり、次上に示せし圖解及び説明に準じて理の如く想ふべし。故色界中等とは上に明すが如く、無雜修の樂定の那合は梵衆より廣果天まで生じ、それより無煩等の五淨居天に往くこと能はずして、路を轉じて無色界天に生を受く。故に色界天の十六の中に於て梵衆より廣果までの十一天は雜修の樂慧の那合も、無雜修の樂定の那合も共に受生することを得る。既に廣果天まで來るときは路が二途と別れ、雜修樂慧の不還はそれより五淨居天に受生し、色究竟天に於て般涅槃す。知ず、無雜修樂定の不還は廣果天より無色界に受生し、有頂天に於て般涅槃す。知るべし。此五名爲等とは、上來明し來りし中般と生般と有行と無行と上流の五種は皆名づけて行色界の者と云ふ。然るに此の五種の中に於て無雜修樂定那合の如きは廣果天より無色界に受生すと雖も、亦行色界の者と名づく、如何となれば此の人も色界に生を受くるが故に、行色界の人と云ふなり。

行無色者差別有四。唯除中般無中有故。從欲界歿直生無色。有生般等四種那合。此總名爲無色那合。

六には行無色を釋す。行無色等とは、謂へらく行無色の者を差別する四種あり、四種とは生般と有行般と無行般と上流般となり、唯中般涅槃のものを除く。其の所以は彼れは中有なし、無色界には方處なき故に、欲界に死すれば直に無色に生じて中有を経ざるなり、中有を経ずして直に無色界に生じ般涅槃するは生般なり。長時修行して般涅槃するを有行般と云ふ。經久懈怠して修行せずして般涅槃するを無行般と云ふ。空無邊處に死して識無邊處等に上生して後に般涅槃するを上流般と云ふなり。

現般者不生色無色。唯於欲界得般涅槃。名現般那合。於現身中得涅槃故。

七には現般を釋す。此の現般は色界にも無色界にも生せず、唯欲界に於て般涅槃す。故に現般と云ふ。又極七返有や家々一來向などの人が欲界にして般涅槃するものも亦現般と云はるゝなり。問ふ見道後に經生するに非ずや、何故に現般と云ふや。答、欲界經生するは初二果の聖者なり、既に不還果を得れば欲界に經生せず。其の現身にして涅槃を得するが故に現般涅槃と云ふなり。

言雜修靜慮者。夫欲雜修四靜慮者必先雜修第四靜慮。以第四

定最堪能故。彼定樂行勝故。名爲堪能。以三

三には雜修靜慮を明す、此の中に三初には雜修の相を明す、二には雜修の所由を明す、三には所感の淨居の唯五あるを明す、初の中に二初には先づ第四靜慮を雜修することを明す、二には雜修成滿の相を示す、今は即ち初なり。言雜修靜等とは謂らく色界四靜慮を雜修せんとせば、必ず先づ最初に第四靜慮を雜修す、彼の第四靜慮は最も堪能とて勝れたる方あり、物事に持ちこたへるなり、故に婆娑論百七十五卷十三丁左に、何が故に必ず先づ第四を雜修し、然る後に能く下三地を修するや、答ふ第四靜慮は諸の靜慮の中に於て最も圓滿の故に、是れ功德を起す最勝依の故に、能く最勝經安の樂を引くが故に、是れ所依の身をして遍く統密ならしむるが故に、是れ多くの功德の所依止の故に、是れ不動定の故に、樂行中最も勝れたるが故に、等と云へり。彼定樂行等とは、此の第四靜慮は樂行中に於て最も勝れたるものなり、彼の下三無色の如きは定は勝れ、慧は劣なり、未至と中間とは慧は勝れて定は劣なり、故に定と慧と均等ならざれば定を起すは容易ならず、此の四根本定は慧と定とが均等なり、就中第四靜慮を以て最となす、故快よく轉ずるものなれば樂行と云ふなり、斯の如き最勝の堪能あるに由て、先づ第四靜慮を修

し、後に下三定を雜修するなり。
謂、阿羅漢或是不還、彼必先入第四靜慮。多念、無漏相續現前。從此引生、多念、有漏。後復多念、無漏現前。如是旋還、後後漸減。乃至最後、二念、無漏。次引二念、有漏現前。無間後生二念、無漏。名雜修定、加行成滿。

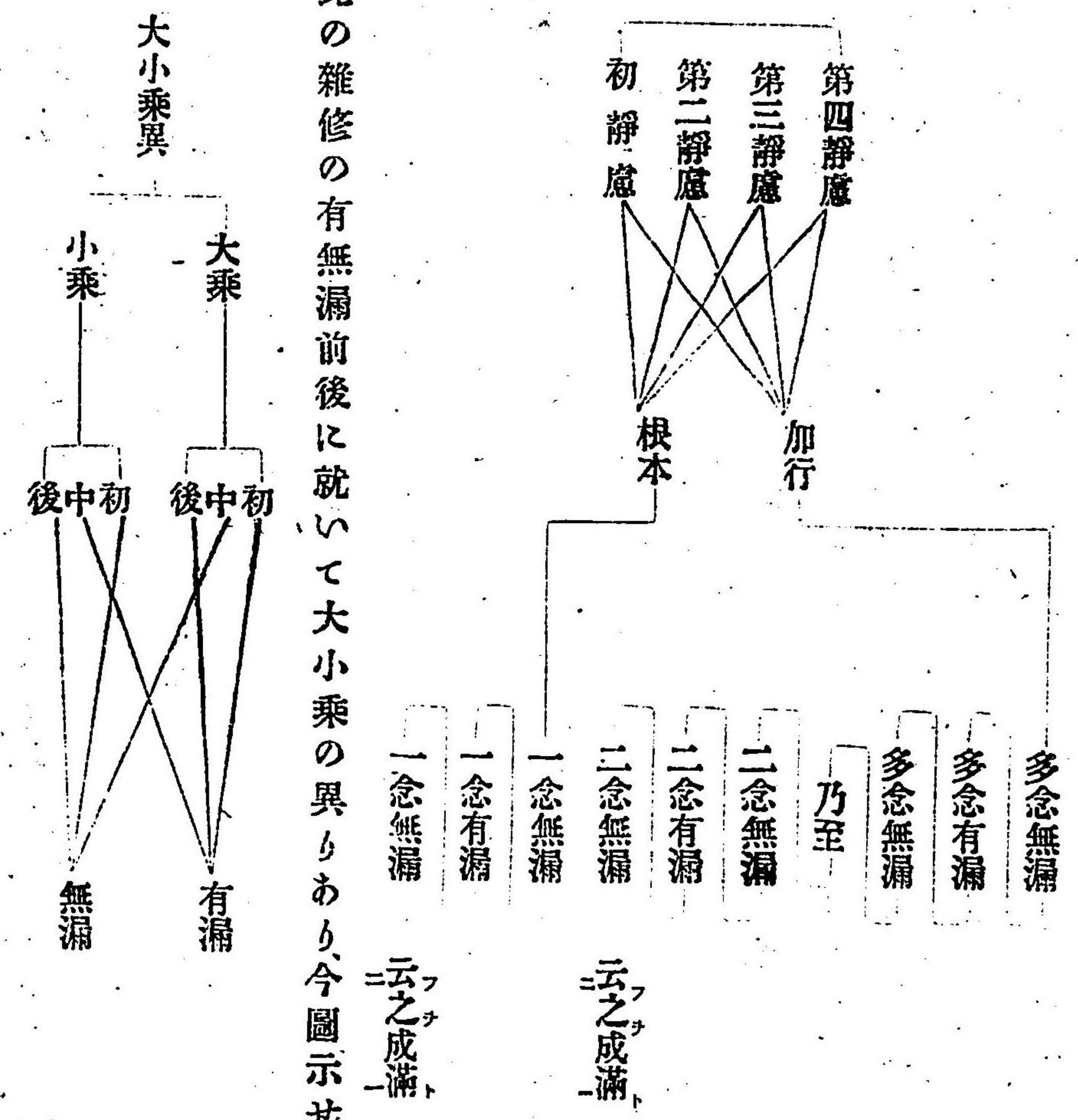
二には雜修成滿の相を明す、此の中に二初には加行成滿を明す、二には根本成滿を明す、今は即ち初なり。謂阿羅漢等とは、謂へらく阿羅漢果の人や不還果の人が先づ第四靜慮に入り、最初多念の無漏心相續現前し、此より多念の有漏心を引起し、後ち復多念の無漏心を現前するなり、斯の如く旋還とて繰り返しくし、漸次に減するなり、先づ十念の無漏十念の有漏十念の無漏を起し、又還りて九念の無漏九念の有漏九念の無漏を起し、又次に八念の無漏八念の有漏八念の無漏を起し、乃至漸々減じて最後二念の無漏二念の有漏二念の無漏を起す、是を雜修加行成滿と云ふなり。

次復唯有一念、無漏。次復引起一念、有漏。無間後生一念、無漏。中間有漏、前後無漏。以相間雜故名雜修。此一心雜名根本成。修第

四已乘此勢力亦能雜修下三靜慮

二には根本成滿を明す。次復唯等有等とは謂へらく二念の無漏の次ぎに、一念の無漏心が起り、一念の有漏心が起り其の無間に一念の無漏心が生起す、斯くの如く中間は有漏心にして前後心は無漏なり、即ち有漏と無漏と間雜まじりて起り修するが故に雜修と云ふなり、斯く雜修して漸々減じて最後に一念の無漏一念の有漏一念の無漏心が起り、唯一念間雜するを之を根本成滿と云ふ。修第四已等とは上の如く先づ第四靜慮を雜修し已て、其の第四靜慮を雜修せし勢力に乗じて、下三靜慮をも亦第四靜慮の如く雜修す、其の雜修の有様は第四靜慮の雜修の相狀に準じて知るべし、今略して雜修の相を圖示せば左の如し。

此の雜修の有無漏前後に就いて大小乗の異りあり、今圖示せば左の如し



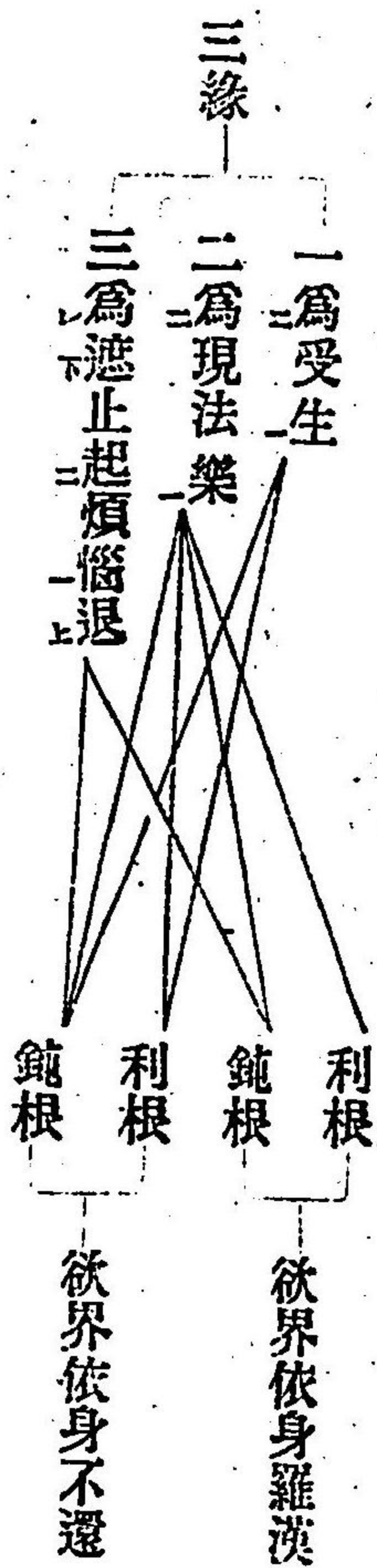
雜修靜慮總有三緣。一爲受生生淨居故。二爲現樂受法樂故。三爲遮止起煩惱退。

(四百八十三)

二には雜修の所由を明す、此の中に二初には正しく三縁を明し、二には位に隨て縁の具缺を示す、今は即ち初なり。雜修靜慮等とは謂へらく此の靜慮を雜修するは三種の因縁に由るなり、三種とは一には受生せんが爲めなり、之を修すれば五淨居天に生ずるが故に、二には現樂の爲めなり、即ち現法樂住を得んが爲めに靜慮を雜修するなり、現法樂とは現在に於て受用する法樂なり、住とは行者が其の法樂に安住するを云ふ、若し大乘なれば、成唯識論九卷廿一丁、述記十本十九丁、演秘七末九丁等に釋あり、今其の要を取りて論せば、靜慮は身心輕安を生じ、最極寂靜にして、憍慢掉舉を離れ、且つ諸の愛着を離れ、甚だ清淨なり、故に對法論に無厭倦任持とも名づく、斯くの如き義あるを以て現法樂に安住すと云ふなり、三には煩惱退を遮せんが爲めなり、已上の三縁に由て靜慮を雜修するなりと知るべし。

若不還修由前三縁。若羅漢修除受生。一不受後有故。二には位に隨て縁の具缺を示す。若不還修等とは謂へらく不還果の人の靜慮を雜修するは前に明せし三縁に由る。若し羅漢果の人の靜慮を雜修する唯二縁に

由る羅漢果の人は再び三界に生死せず、後有を受けざるが故に受生の一縁を缺き、餘の二縁のみを具するなり、今更に圖示せば、



此の圖の如く不還と羅漢との各々利鈍に隨て縁の具缺を異にす、故に俱舍論廿四卷八丁左に云はく、不還の中諸の利根の者は現法樂及び淨居に生せんが爲なり、諸の鈍根の者は亦退を遮せんが爲め、彼は退を畏るゝが故に乃至諸の羅漢は若し利根なれば現法樂の爲めなり、若し鈍根なれば亦煩惱を起して退くことを遮止せんが爲なり。

由雜修第四靜慮有五品故。淨居唯五。一下品。二中品。三上品。四上勝品。五上極品。初品有三。謂三心也。初起一無漏。次起一有漏。後起一無漏。第二品六。謂更三心拜前成六。第三品九。謂更三心拜前成九。第四品十二。謂更三心拜前九心故。成十二。第五品復

(四百八十三)

然るに論廿四卷八丁巳下に二説を擧げあり、今記は論の第一説と同じ、第二説は有餘師の説にして、信進念定慧の五根の次第に増上するに由て五淨居を感ずと云へり、第一説即ち今記の所引の説可なり、應知此中等とは、是は前後二念の無漏が中間の有漏心を薰發して其の中間の一念の有漏をして次での如く五淨居天の生を感せしむ、即ち能く感せ令むるものは前後の無漏心なり、感せ令めらるゝものは中間の有漏心なり、能令は無漏心なり、所令は中間の有漏心なりと知るべし、若し感の字ならば能感は中間の有漏心なり、所感は五淨居天なり、然れば中間の一念の有漏心が五淨居天を感ずる引業を造ると云ねばならぬ、左すれば聖者が新業を造るは不都合の如しと雖も、聖者も五淨天に局り新業を造ると評すなり、大乘と相違せることは上に辯ずるが如し、さて中間の有漏心が五淨居天を感して初後の無漏心は五淨居天を感せざるものは、元來無漏は能對治の法にして三有の生を感ずるを背するものなるが故に、初後の無漏心は五淨居天を感せざるなり。

二九種不還者行於色界五種那含分、成九種、且總爲三、二者中般、二者生般、三上流般、有行無行皆色生已得般涅槃、皆生般攝。

此三各三故成九種。

二には九種不還を釋す、此の中に二初には正しく九種不還を釋す、二には業と感と根とに由て速と非速と經久との三を生ずる所以を示す、初の中に二初には總じて九種を釋す、二には別釋、三には雜亂の失なきを示す、今は即ち初なり、二九種不還等とは、謂へらく此の九種不還は上に明せし七種不還の中に於て、行無色と現般とを二を除いて、其餘の五不還(中般、生般、有行、無行、上流)を總じて三種となし、其の三種を別開して九種となすものなり、先づ三種と爲すとは、一には中般二には生般三には上流なり、有行般と無行般との二をば生般に合す、其の所以は有行無行の差別はあれども、等しく色界に生じて般涅槃す故に今は生般に攝めて三種となすなり、九種とは此の中般と生般と上流との三種より各々三種を別開して九種となすなり下に到て知るべし。

中般三者、一速般、二非速般、三經久般、由三火星、喻所顯故、如於起、至、中、乃滅、經久、如鐵、火、大星、逆、時、遠、未、墮、而滅。

二には別釋、此の中に三初には中般の三種を釋す、二には生般の三種を釋す、三には上流の三種を釋す、今は即ち初なり、中般三者等とは、謂へらく中般(中有位)を分

つて三種とす。一には速般とて、中有の位に速に直般般涅槃するを云ふ。二には非速般とて、中有の位稍暫くして般涅槃す故に非速般と云ふなり。三には經久般とて、中有の位餘程久しきを経て而かして後に般涅槃す故に經久般と云ふなり。由三火星等とは何を以ての故に、中般に三種の別あることを知るや、謂へらく經說に三火星の喩を擧げたり、其の三火星の喩に由て、中般に三種の別ありと云ふことを知るなり。速般は札火星の如しとて、札火星は斫削木片にして、コケラ火の類なり。此の札火の飛ぶは近處近時にして滅す。速般も亦是に似たり。欲界に死して中有が起ると其の中有が欲界を離れずして直ちに涅槃に入る。即ち近處近時にして般涅槃す。非速般は鐵火星の如しとて、小さき鐵の火の粉の飛んで、中處中時にして滅するが如し。非速般も亦是の如し。欲界に死して其の中有が欲界と色界の中處まで到りて般涅槃するなり。經久は鐵火大星の如しとて、鐵の大なる火の粉の久しきを経て滅する如く、經久も亦是の如し。色界に到りて未だ本有に至らずして般涅槃するなり。

生般三者、一者生般約速立也。二者有行般約非速立也。三無行般約經久立也。

二には生般の三種を釋す。生般三者等とは謂へらく色界に生れ已りて般涅槃するが故に生般と云ふなり。此の生般にも亦三種あるなり。一には生般とて色界に生れ已りて直に般涅槃す。即ち速かに般涅槃するに約して生般と云ふなり。二には有行般とて色界に生れ已りて加行動修して後に般涅槃す。故に有行生と云ふなり。三には無行般とて色界に生れ已りて加行動修せず。又其の生をも更へず其の生の中にて久しきを経て般涅槃す。故に無行般は經久に約して立つと云ふなり。

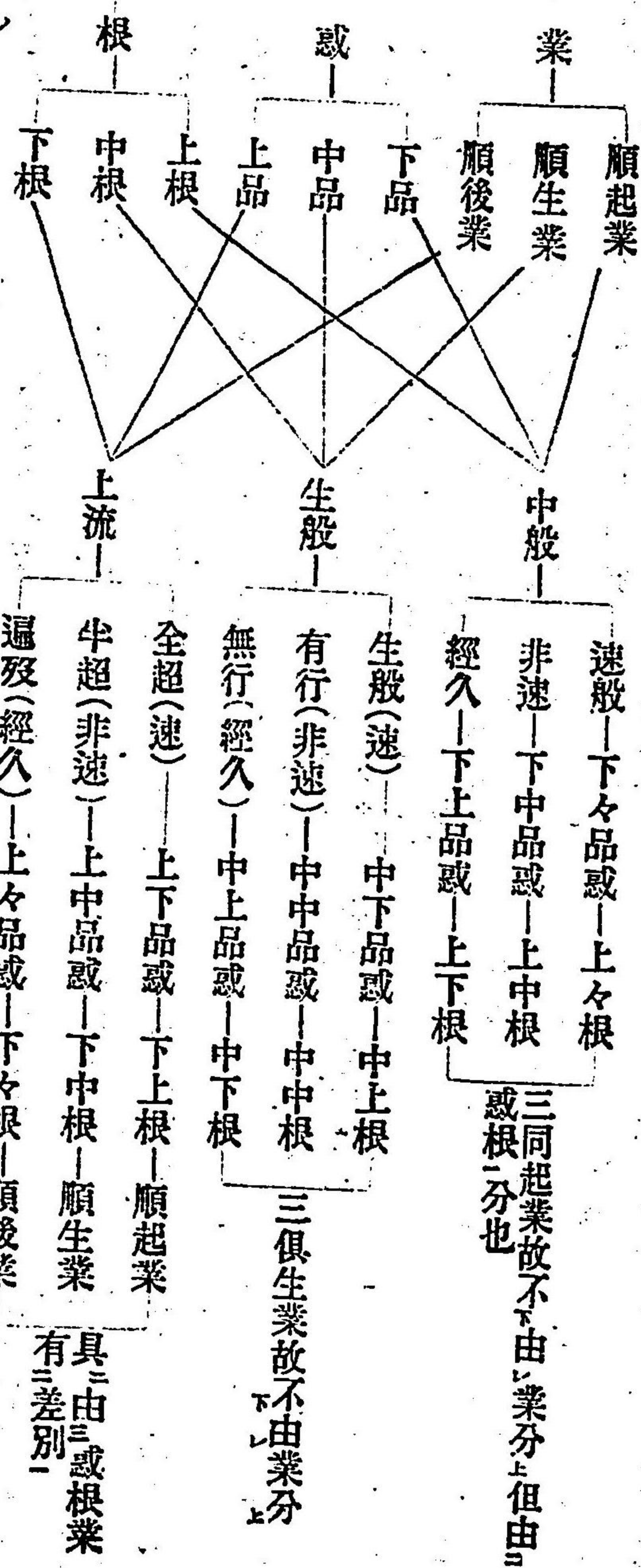
上流三者、一者全超約速立也。二者半超約非速立也。三者遍殺約經久立也。

三には上流を釋す。上流三者等とは謂へらく此の上流は欲界に死して而も色界に生じ上流して色究竟天に至りて般涅槃す。此の上流に三種分るなり。一には全超とて是は色界にて二生を感ず。即ち色界初禪の梵衆天に生じ中間の十四天を全く超えて色究竟天に生ず。故に全超と云ふなり。二には半超とて是は色界十六天の中に於て三生乃至十五生を感ず。全超の如く唯二生にも非ず。遍殺の如く十六生を感ずるにも非ず。故に半超と云ふなり。三には遍殺とて是は色界にて十

六生を感ず、即ち色界初禪の梵衆天より順次に遍生遍歿して色究竟天に至りて
般涅槃す、故に遍歿と云ふなり。
然、上三種乃與九種皆由速、非速、經久、得般涅槃、故、互相望無雜
亂失。

三には雜亂の失なきことを示す、然、上三種等とは謂へらく上の三種及び九種の
不還を立つるときは混亂して差別が立ち難きが如くなれども、總の三種も別の
三種も速と非速と經久とに由て分るゝが故に決して雜亂するの失なし、總の三
種とは中般は速なり、生般は非速なり、上流は更に加行し上流して久しきを經て
般涅槃するが故に經久なり、別の三とは中般の中の速般は速に約し、非速般は非
速に約し、經久般は經久に約して立つるなり、又生般の中の生般は速に約し、有行
般は非速に約し、無行般は經久に約して立つるなり、又上流の全超は速に約し、半
超は非速に約し、遍歿は經久に約して立つるなり、斯の如く總の三種にもあれ、別
の三種にもあれ、速と非速と經久との別に由て立てしものなれば決して雜亂の
失なく、運速條然として差別ありと知るべし、さて此の九種不還のことにつき、頌
疏廿四卷卅丁左に圖あり、今轉載せば左の如し。

九種不還の畧圖



如是三種乃與九種皆由業惑根有差別故、有速、非速、經久、不同。

二には業と惑と根とに由り速と非速と經久との三種を生ずるを示す、此の中に
三初には總標、二には別釋、三には各々三種を分つ所以を釋す、今は即ち初なり、如
是三種等とは謂へらく上の如く或は總じて三種と分ち或は別して九種と分つ
ものは業と惑と根とに各々不同あるに由て、三種及び九種と分るゝものなり、別

釋の下に至て知るべし。
由業三者造順起業成中般故造順生業成生般故造順後業成上流故。

二には別釋の中に三初には業の三に由るを釋す、二には惑の三に由るを釋す、三には根の三に由るを釋す、今は即ち初なり。由業三者等とは、謂へらく順起業を造りたるは中般となり、順生業を造りたる人は生般となり、順後業を造りたる人は上流となるなり。順起業とは、起は中有を起すこと、中有を感ずる業を順起業と名づく、故に起生の後は所惑の報にして所順なり、業は能感にして能順なり、略圖を以て得名の相を示さば、

順起業

二字釋—初離釋

順者能順能起業

合釋起之順別體依主釋

起者所順所起報

三字釋—初離釋

順起者能順能起業

合釋順即業持業釋

業者亦業

餘の二業も亦此に準じて釋すべし、

由惑三者下品煩惱中般現行中品煩惱生般現行上品煩惱上

流現行

二には惑の三に由ることを釋す。由惑三者等とは、謂へらく下品の煩惱に由て中般が起る、下品は惑力至て弱きが故に直に中有の位にて般涅槃するなり、中品の煩惱に由て生般が起る、中品の煩惱は下品の惑に比しては稍強く、上品の惑に比しては稍弱し、故に中品の煩惱の力に由て色界の生有を感じ、直に般涅槃するなり、又上品の煩惱に由て上流が起る、上品の惑は稍強きが故に漸次上流して般涅槃するなり。

由根三品者中般上根生般中根上流下根

三には根の三に由ることを釋す。由根三品等とは、謂へらく中般を感ずる人は上根の人なり、生般を感ずる人は中根の人なり、上流を感ずる人は下根の人なり、斯く根に上中下の不同あるに由て、般涅槃を得するにも亦中般等の遲速の別を生ずるなり。

中般生般各分三者。但由惑根有差別故分爲三種。不由業異謂中般三同起業故。若生般三同生業故。故非業異也。上流分三具由惑根業有差別業有別者謂順後業有差別故。謂全超業及半

超業遍歿業故。此九不還由惑根別思而可知。

(四百九十四)

三には各々三種を分つ所以を釋す。中般生般等とは謂へらく別の三を分つに就き少しく差別あり何となれば中般と生般との二に於て各々三を分つは唯惑と根との差別に由て三と分つものにして決して業に由て三と分たざるなり即ち中般の中に於て速般なれば下品の惑にして上々根なり非速般中品の惑にして中根なり經久般なれば上々品の惑にして下根なり生般も準じて知るべし斯くの如く惑に三品の不同あり根の上中下の不同あり故に速般等の差別を生ずるものなり其の業の不同に由らざるものは中般の三は同じ順起業にして差別なし又生般の三なれば皆同じ順生業にして差別なし故に業の不同に由て三種と分たざるなり。上流分三等とは上流に三を分つは具さに惑と根と業と三に各々差別あるに由るが故なり惑と根の差別に由るは上の中般生般に準じて知るべし其の業の差別に由るとは同じ順後業なれども其の順後業に差別あるなり即ち全超業と半超業と遍歿業との差別あるなり此く業に差別あるに由るが故に全超業の差別を生ずるなり。

三七善士趣者。中生各三。上流爲一。經依此立七善士趣。上流一

者同上行故總合立一。

三には七善士趣を安立することを釋す。此の中に二初には正しく釋す。二には問答分別今は即ち初なり。三七善士等とは謂へらく七善士趣は上の九種不還の中の中般の三と生般の三と上流を合して一人とし之を七善士と云ふ故に中阿含經二卷初下右に七善士趣を立つるなり。上流一者等とは謂へらく上の中般と生般とは各三を分ち六士とし上流のみ三を合して一士と數ふるは如何なる理由なるかと云ふに此の上流の三は皆同じく上行の故に總合して一と立つるなり。故に婆娑論百七十五卷二丁左に云はく上行の義勝るゝか故に一と爲すと云へり。

問。何故須斯二果不立七善士趣名。答。趣是行義。唯此七種皆行善業。不行惡業。須斯二果善惡雜行。又此七種皆行上界不復還來。須斯二果往而復來。故唯此七種立善士趣名。

二には問答分別す。問。何故須等とは謂へらく問ふ何を以ての故に上に明せし須陀洹と斯陀含との二果即ち預流と一來との二果には七善士趣の名を立てずして獨り此の不還果のみに七善士趣の名を立てるや。答。趣是行等とは答なり此の

(四百九十五)

答に二義あり、第一義は趣は行ふの義にて、此七人は皆善のみを行じて、惡を行せず、即ち不還の聖者は、既に欲界の九品の煩惱を斷盡しあるが故に、惡業を行せず、餘の預流一來の如きは未だ欲界の惑を斷盡せざれば、妻妾ありて非梵行を行す、是れ惡行なり、獨り此の不還の聖者のみ、皆善を行じて惡を行せず、故に不還果に限り、七善士趣の名を立つるなり、第二義は趣は行くの義、即ち上行の義なり、此の義に依れば、此の不還の七人のみ、上界に行き、復た欲界に還り來らず、餘の預流一來の如き聖者は、上界に往き復た欲界に還り來る故に、唯此の不還の七人のみに善士趣の名を立て、餘の預流一來には善士趣の名を立てざるなり、さて第一の趣は行ふの義と第二の趣は行くの義とは何れを以て勝れたりとなすや、答ふ第一義は未可なり、第二義勝れたり、若し第一義の如く趣は行ふの義となすときは、無學果の聖者も亦唯善のみを行ふて惡を行せず、應に善士趣と云ふべしとの妨けあり、故に前義は義を盡さざるなり、寶疏二十四卷十二丁及び惠暉六卷十四丁左等には是非するが如し、若し第二義の如く趣は行くの義なれば、無學の聖者は欲界には還り來らずと雖も、無學果は無生の故に上行の義なし、故に第二義妨げなきか、學者それ二義の差別を了知すべし。

四、欲界經生者。若於聖位經欲界生厭苦心強。必不往上。色無色界證不還已。定於現身般涅槃。故若於色界經生聖者。容有上生。無色界義。色界無苦厭心劣。故容生無色天。此經欲界生聖及往上界生聖。必無練根兼無有退。

四には欲界經生を明す、此の中に二、初には正しく欲界經生を明す、二には問答分別す、今は即ち初なり、四、欲界經等とは、謂へらく、聖を得し已て欲界に於て經生せし人、即ち極七返有及び家々一來などの聖者は、現身に於て不還果を證得し已て、定て般涅槃するなり、如何んとなれば、此の欲界經生の人、は久しく欲界に在て、生死を厭ふ、厭苦心が強きが故に、必ず色界無色界に上生せずして、欲界の現身に於て般涅槃するなり、若於色界等とは、若し色界に於て經生せし人は、或は無色界に上生する義あるべし、色界は果報勝れたるが故に、苦受なくして、厭苦心劣なるが故なり、此、經、欲界等とは、此の欲界經生の聖及び色界經生の聖者には、必ず練根もなき、退墮することもし、退なきが故に練根するに及ばざるなり、其の位にて必ず無漏道を起し、三界の修惑を斷盡して、直ちに般涅槃するが故に、退墮するの義あることなし。

問。何緣經生聖及上生聖必無練根并退。答。經生習根極淳熟故。及得殊勝所依止故。昔於凡身得道。未名殊勝。依經生。唯於三身名殊勝也。故無練根及退轉也。

二には問答分別す。問。何緣經等とは、謂へらく何を以ての故に、經生の聖者と及び上生の聖者とは、練根と及び退轉の義なきか。答ふ二義を具足するが故に、練根と退轉なきなり。二義とは一には生を経て無漏根を修習すること極めて淳熟しある、二には殊勝の所依止を得るに由るが故に、殊勝の所依止とは、即ち身體が勝れてあるが故である。昔日入見道のときは、凡夫のときに受けし身故劣なり、經生の聖者は、死して更に重ねて受けし身なれば、聖身にして殊勝れたるなり、是の如く無漏道を得て後ちに經生し無漏根が成熟しあり、且つ身體が聖身にして勝るるが故に、練根も退轉もすることなしと知るべし。

五身證不還者。若不還果修得滅定轉名身證。滅定無心由身證得故名身證。
五には身證の不還を明す。五身證等とは、謂へらく此の身證の不還に就いて論廿四卷九丁右に云はく、經に不還を説いて身證と名つくるあり、何れの勝徳に依て身證の名を立つるや、次に頌を以て答へて云はく、滅定を得する不還轉を名つて

けて身證と爲すとあり、即ち不還果の入若し身中に於て滅盡定の得を有するを轉じて身證と名づく、謂らく不還果の者身に涅槃に似たる法を證得するに由るが故に身證と名づくるなり。滅定無心等とは、此の滅盡定は無心なるが故に心に依て得すると能はず、但身に由て證得するが故に身證と名づくるなり、但の字は心證を簡ふものと知るべし。

上明得二三果。並約次第證。若超越證者。謂先凡位以有漏道斷欲界六品。或七八品。此人至見道中名第二向。趣一來果。故至道類智時。超得一來果。若先凡位斷欲九品。或斷初定一品。乃至無所有處惑。此人至見道中名第三向。趣不還果。故至道類智時。超得不還果。若先斷欲一品。乃至五品。至見道中。同具縛人名預流向。趣預流果。故。

六には超越證を明す。此の中に四初には正しく超越證を明す、二には問答分別、三には對治道の有漏無漏を明す、四には世道の所緣と行相とを明す、今は即ち初なり。上明得二三等とは、謂へらく此より上に第二の一來果、第三の不還果を明せしものは、並に次第證の行者に約して明せしなりと前を結びし文なり、次第證とは

其縛の亦凡夫より三賢四善根の七加行を経て入見し來たり、順次に次第を経て修證せしものを云ふ。若超越證等とは次第證と大いに其の趣きを殊にして、先づ凡夫の位に於て有漏の六行觀を修し、欲界修惑の前六品或は七八品を斷す、此の人若しも入見し見道の位に至りしときは第二向即ち一來向の聖者と名づく、一來果に趣向するが故に是れ見道十五心か第二果に趣向する因相となるが故に第十六心道類智の位に至り、初果を超越して直に第二果を證す、次第證の人の第十六心に至り預流果を證するとは異なることを知るべし。若先凡位等とは、若し凡夫の位に於て有漏六行觀を以て欲界修惑の九品を斷じ、或は色界初定の一品を斷じ乃至無所有處の第九品の修惑を斷せし人が、若しも入見して見道の位まで來りしときは第三不還向と云はる。而かして第十六心道類智に至り、初二果を超越して直ちに第三不還果を證す、故に俱舍論二十三卷及び婆娑論五十四卷二丁に云はく、超越證に二あり、一には初果を越へて第二果を證するあり、二には初二果を越へて第三果を證するあり、但し斯く超越して第三果までは證するものありと雖も、必ず前三果を越へ及び超中二果なしと立つるなり、何となれば第十六位に直に第四果を證するものなしと立つるが故に、若し大乘なれば超中二果を

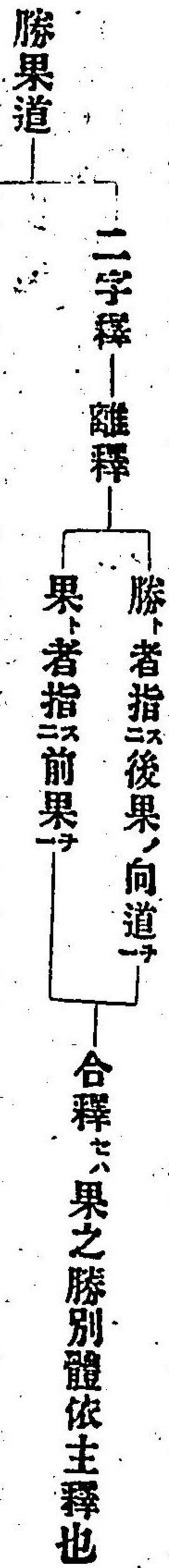
立つるなり、謂らく初果を得て而かも第四果を得るありと云ふ、是を見後束感超と云ふなり、了義燈二本十八丁右に詳なり、又超前二果を立つるなり、是を見前伏感超と云ふ、同學抄十之一十四丁に明すが如し、更に處胎經五卷十六丁、及び摩耶經六丁等に、凡夫地より超へて羅漢果を證するありと云ふ、天台四教儀集註中卷三十九丁右には、是を大超と云ふ、然かし今有部の法相とは別なり、大小乗の法相和會すべからず、學者それ混同する勿れ。若先斷欲等とは、若し凡位に有漏六行觀を以て欲界修惑の一品乃至五品を斷せし人が、今入見して見道の位に至りし人は具縛の人と同じく預流向と名づく、預流果に趣向する位なるが故なり、さて具縛の人と云ふことに就いて論二十三卷十四丁に云はく、彼の二聖若し先時に於て未だ世道を以て修斷の惑を斷せざるを名けて具縛と名づくとあり。

問。先斷欲一品乃至五品、或斷七八品、或斷上七地、此人至道類智時、何故不名二向三向四向答。此人猶佳果未起、勝果道故、勝果道者、謂向道也。向道勝前果道故。

二には問答分別なり。問先斷欲等とは、謂へらく是は頌疏廿三卷二十七丁右の釋意に據て問答するものなり。問の意は凡位に有漏六行觀を以て欲界修惑の五品

斷の人は何故に第十六心道類智の位には預流果と名つけて一來向とは名つけざるや、又凡位に於て有漏六行觀を以て欲界修惑の七八品斷の人は何故に第十六心道類智の位には一來果と名つけて不還向とは名つけざるや、又凡位に於て有漏六行觀を以て上界初定乃至無所有處の修惑を斷せし人は何故に第十六心道類智の位に不還果と名つけて阿羅漢向と名つけざるやとの三問あるなり。答此○人○猶○等○とは答なり、答の意は住果の位は未だ後の向道とは名つけられぬ、得果の位は未だ勝果道をば得せざるなり、住果の人が後の勝果道を起さぬ位は唯住果とのみ云はれて後の向道とは云ふべからず、且らく欲界修惑五品斷の超越證の人なれば、道類智の位に初果を得し已りて最早や五品の惑を得せぬ、然るに更に其勝果道を起すものは其の時に方りて第二果向と云はるゝなり、左すれば第十六道類智の位に於ては、唯初果に住するのみにして未だ其の勝果道を起さずれば第二向とは名つくべからず、元來曾て凡位に於て欲の修惑の一品乃至五品を斷じたる人なれば、早晚に必ず第二果の爲め勝果道を起すには相違なければ、其の勝果道を起して更に離繫得を引て身に證するにあらざれば向道とは云ふべからず、其餘の第三向第四向と云ふべからざる所以も準して知るべし、今

私に案するに光記二十三卷三十八丁右所引の正理論の文に依るに今宗は惑に再斷なく、離繫に重得ありとの定範なれば、初め凡地に於て五品斷の時に得せし離繫は有漏道より引起せられしものなり、左れば今人見し無漏道の身なれば更に無漏道より引起する離繫得を身に證するに非ざれば向道とは云ふべからず、元より向道の依因は無漏なればなり、近くは頌疏二十三卷二十七丁左冠註等を對見せよ、勝果道者等とは、光記二十三卷三十八丁左に云はく、後果の向道は前果に勝るゝが故に勝果道と名づく云云とあり、即ち勝とは後果の向道を指す、果とは前果を指す、合釋せば果之勝の別體の依主釋なり、又三字釋を爲さば勝果は後果の向道を指す道も亦後果の向道を指す、合釋せば勝即道の持業釋なり、今畧圖を以て示さば左の如し。



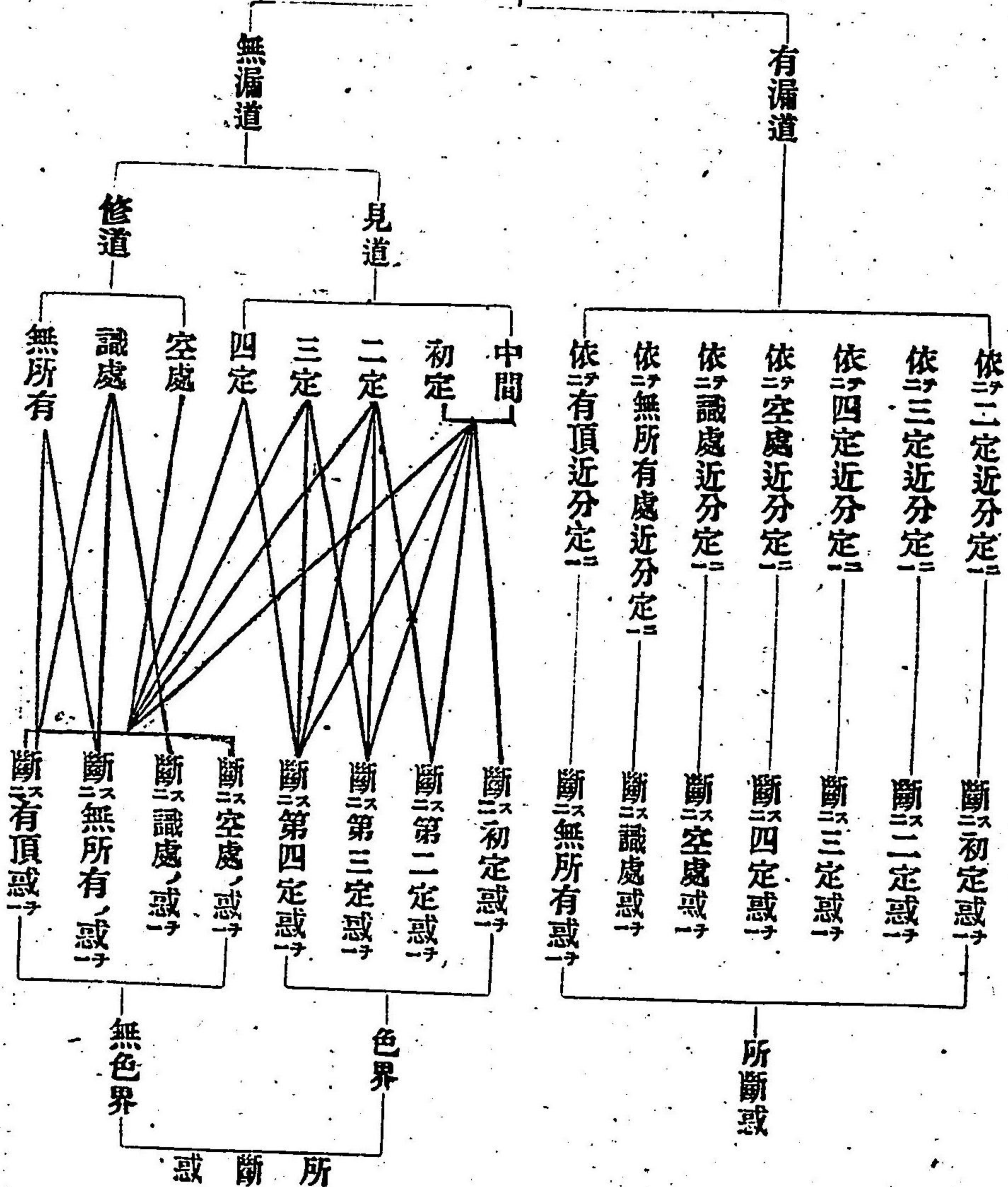
諸有漏道雖能離下八地染不能離有頂以有漏道欣上

厭下。於有頂地無上可欣故。又諸有漏道唯能離。次下一地染謂依未至離欲界染。及依二禪近分離。初禪染乃至有頂近分離。無所有處染。不斷上地染。勢力劣故。不斷自地染。自地煩惱所隨增。故不斷下地染。謂已離故。

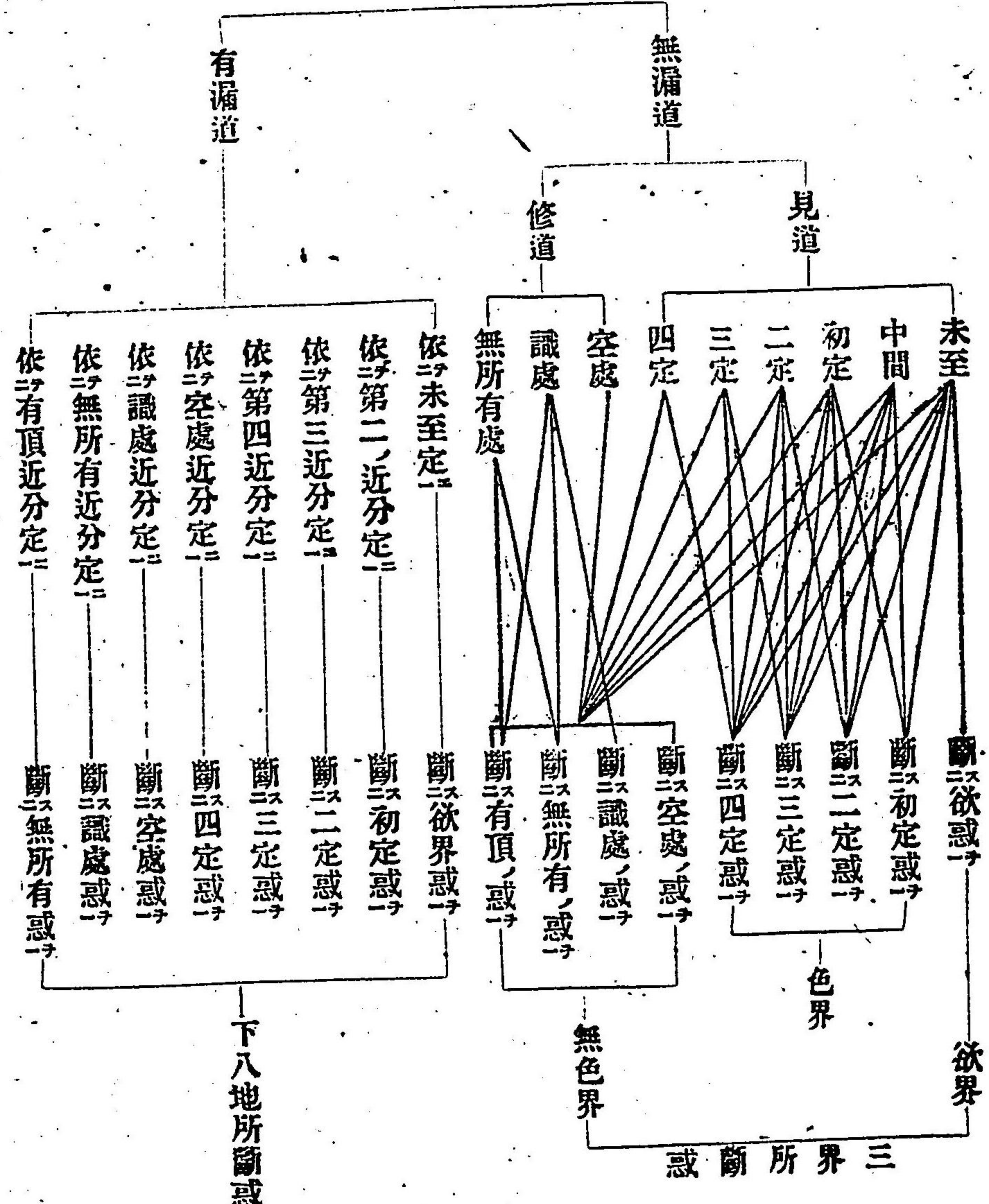
三には對治道の漏無漏を明すに二初には有對の對治道を明す二には無漏の對治道を明す今は即ち初なり諸有漏道等とは謂へらく是は俱舍論二十四卷十三丁右の意に依て明せしものなり諸の有漏道を以て下八地の惑をば斷することを得ると雖も有頂地の惑は斷すること能はず但し有漏六行觀を以て下八地の惑を斷するは四諦の下の惑と修惑と此の五部の惑を合して斷するなり喩へば五本の竹の節を揃へて五本合して一時に切斷するが如し不能離有等とは有漏道を以て下八地の惑を斷し得るとも有頂地の見修惑とも斷する能はざる所以は元來有漏道斷惑は六行觀を以て欣上厭下の行相を起す即ち上地を觀しては靜妙離なりと欣求し下地を觀して龜苦障なりと厭背する者なれば上地の近分定に依て次下の地の惑を斷する者なり有頂地には次上地の近分定なきが故に上下地對觀して欣上厭下するものが出來ざるなり故に有漏道斷は下八地に局り

有頂地には通せざるなり又諸有漏等とは是れは頌疏二十四卷十九丁右の全文なり此の有漏道斷は正しくは唯次下の一地の染を斷するのみ其の相狀を示さは初禪の未至定に依て唯欲界の染を離れ及び二禪の近分定に依ては初禪の染を離るゝなり乃至有頂地の近分定に依て無所有處の惑を斷するなり渾て自地より上地の染を斷すること能はざるものは有漏道は至て勢力が微劣である故に上地の惑をば斷する能はざるなり不斷自染等とは獨り上地の惑を斷する能はざるのみならず自地の惑を斷する能はざるなり其の理由は自地の煩惱が却て其の道を執し其の道か却て煩惱をして隨増せしむるが故に自地の道を以て自地の煩惱を斷する能はざるなり不斷下地等とは下地の煩惱をも斷する能はず其の理由は欲界の煩惱を斷して而かして後に初定を得す又初定の煩惱を斷じて而かして後に二禪定を得す故に自地の下地の惑は已に斷し畢りてあれば更に斷すべき必用たになきなり今畧圖を以て其の相を示さば

初定依身



欲界依身



記法五十七宗有

此の圖は其の一端を示すのみ其の餘地の如きは應の如くに思推すべし故に俱舍論二十四卷十四丁右に云はく諸の無漏道の若し未至の攝なるは能く欲界乃至有頂を離る、靜慮中間及び四靜慮三無色の攝なるは其の所應に隨て各能く自及び上地の染を離る、下を離れず已に離れたるが故に諸の有漏道は一切唯能く次下の地を離る、自地等に非ず、自地の煩惱の隨増する所なるが故に、勞劣なるが故に、已離の故にと云へり。

無漏道不爾謂未至定起無漏道能斷九地中間四本靜慮及下三無色於此八地起無漏道能離自地及上地染不能離下謂已離故未至中間四本靜慮下三無色下名三無漏九地諸無漏依此地起故

二には無漏の對治道を明す無漏道不等とは謂へらく次上の圖解に依て畧其の大意を示せしが如く未至定に依りたる無漏道は下の欲界の惑をも斷じ上の初地乃至有頂の惑をも斷ずるなりさて無漏道にして下地の惑を斷ずるは唯未至定に屆る中間四根等とは中間禪と四根本靜慮と下三無色との八地を所依として起したる無漏道は自地及び上地の惑をも斷ず初定處を所依として起したる無漏道と雖も自の初靜慮の惑乃至有頂地の惑をも斷ず其の餘の地を所依とし

記法五十七宗有

又有漏道中若無間道緣下地法麤苦障三種行相中隨起一行若解脫道緣上地法靜妙離三種行相中隨起一行非寂靜故說名爲麤非美妙故說名爲苦非出離故說名爲障靜妙離三翻此應知有漏六行觀下是行故知下八地修惑通有漏無漏二斷聖人亦有以有漏道斷

四には世道の所緣と行相とを明すなり又有漏道等とは謂へらく若しも無漏道

なれば所縁は四諦にして、行相は十六行相なり、即ち苦空無常等の十六行相を以て四諦の境を觀して斷惑證理を爲すなり、若しも有漏道なれば何れの行相を以て何れの法を縁して斷惑證理するや、今それを答へて云はく、有漏道は無間道のときは次下地の法を觀して鹿苦障の三行相の隨一の行相を爲す、下地とは自地及び下地を總して下地と云ふなり、若し解脫道のときは自地の次上の地を縁して靜妙離の三行相の隨一の行相を爲すなり、即ち下地の法は鹿なり、苦なり、障なり、觀して厭背し、上地の法をば靜なり、妙なり、離なりと觀して欣求するなり、是を欣上厭下の觀と名づく、若しも無漏觀なれば絶て有漏法を欣求することなし、有漏は所對治なり、無漏法は能對治の法なるが故なり、非寂靜故等とは、下地の法は上地の法に對しては鹿動にして寂靜に非ず、故に名づけて鹿となし、又下地の法は上地の法に對しては鹿惡にして美妙のものに非ず、故に名づけて苦となすなり、又下地の法は上地の法に對しては障害して出離せざらしむ、故に名づけて障となすなり、靜妙離三等とは、靜妙離は上の鹿苦障に翻して知るべし、故知下八等とは、下八地の惑は或は無漏道を以て斷じ、或は有漏道を以て斷ずることあるなり、有頂の惑は見惑にもあれ、修惑にもあれ、決して有漏道を以て斷すべからず、唯

(五百十)

無漏道斷のものなり。

阿羅漢向者得不還者從斷初定一品至斷有頂八品名阿羅漢向趣阿羅漢果故即此向中斷有頂地第九品惑無間道名金剛喻定此定能破一切煩惱猶如金剛能摧一切故名金剛喻定雖有九品能破一切餘惑先斷故今唯斷第九品惑此定既能斷有頂地第九品惑能引此惑盡得俱行盡智令起即此盡智是解脫道也。

四には阿羅漢向を明す。阿羅漢向等とは、謂へらく不還果を得せし人が更に進んで色界初定の上々品の一品の惑を斷するより、乃至有頂の第八品の惑を斷するまでを阿羅漢向と云ふ、是れ阿羅漢果に趣向する位なるが故に向と云ふなり、今の本文には有頂の第八品までを阿羅漢向と云ふと雖も、此の本文は總相に約して論せしものなり、若し尅實門にて之を論せば、初定の一品の惑を斷じてより、有頂の修惑の第九品を斷する無間道まで阿羅漢向に攝む、有頂の第九品の無間道の半分は修道にして阿羅漢向の攝なり、其の解脫道の半分は無學道の攝なり、即此向中等とは、即此の二字は上の阿羅漢向を指す、即ち此向の中に第九品の無間

道まで攝むるが故に即此等と云ふなり此の阿羅漢向中にて有頂第九品の惑を
斷する無間道のことを金剛喻定と云ふなり此定能破等とは此の金剛喻定は摧
破の作用か甚だ強い其の三界の一切煩惱を摧破すること喻へは金剛の能く一
切のものを摧破するが如し故に喻に約して此の定を金剛喻定と云ふ此の定は
摧破の用が勝れてあれば三界の一切の惑を斷する力用ありと雖も先きに既に
下八地の惑は斷じ終れり故に今は極めて微細の有頂の第九品の惑をのみ斷す
るなり此定既能等とは是れは論十一丁の左の文に據る此の金剛喻定は一切斷
惑の無間道の中に於て最後の無間道なり盡智は一切斷惑の解脱道の中に於て
最後の解脱道なり能引此惑等とは此の盡智の得とは非想の第九品の煩惱を斷
盡して得したる擇滅無爲のことを盡と云ふ其の擇滅の得と俱起する智なるが
故に解脱道の智を盡智と云ふ即ち盡の得と俱起する智なり舊論には第九惑滅
離の得と俱起する智を盡智と名づくこと云へり但し後の無生智も盡智と俱起す
れども彼は最初は俱起するに非ず故に彼をば盡智とは名づけぬ問ふ論二十四
卷十一丁左には此の惑盡の得と云て有頂の第九品の惑盡を指せり又論次下に
至ては諸漏盡得等と云て諸惑盡を指せり又正理論六十五卷十六丁左及び三十

二卷三丁右にも亦諸漏盡得等と云ふ斯く相違せるは何の理由あるか答ふ若し
正盡に約せば唯第九品なり若し功能に約せば一切諸漏盡に通ずるなり即ち論
二十四卷十一丁左の前文は正しき能引を明す故に狭きに約して此の惑と云ひ
次下の文は盡智の釋名なるが故に寛きに約して釋するなりさて婆娑論百二卷
十丁左に盡智の名を釋するに二釋あり一に煩惱盡る身中の最初に起るが故に
盡智と云ふ是れ即ち盡とは惑盡の人を指す智とは所有の智を指す盡之智の別
體の依主釋なり二には盡を緣する智なるが故に盡智と云ふ盡とは滅諦を指す
四諦の中に於て滅諦は是れ最勝なり涅槃性なるが故に通じて四諦を緣すと雖
も勝れたるに従へて滅諦を緣する智を盡智と云ふ即ち盡は所緣の滅諦なり智
は能緣の智なり是亦能所緣別體の依主釋なり已上は婆娑の取意なり今論及び
今記は滅の得に約す故に自づから婆娑と異なれり正理に俱舍の説を評して有
説と云へり

三無學道者有頂第九解脱道盡智生已成阿羅漢果更無學故
名爲無學義準前來所辨四向三果皆名有學爲得漏盡常樂學
故異生未見諦理故不名學

第三に無學道を釋す、此の中に六初には釋名、二には廣く無學の種類を明す、三には因に四果の退不退を明す、四には四向四果の體性を明す、五には七種の聖人を明す、六には十八有學九の無學を釋す、初の中に二、初には無學の名を釋す、二には阿羅漢の名を釋す、今は即ち初なり、三、無學道等とは謂へらく上來廣く見修の二道を明せり、已下將に無學道を明さんとす、此の人は有頂の第九品の惑を斷じ、而かして第九の解脫道に盡智生じ已て阿羅漢果を成するなり、此の人は一切の斷すべきものは皆斷盡し一切の證すべきものは皆證得して、更に學修すべきものなきが故に無學と云ふなり、義準、前來等とは、無學は更に學修すべきものなきが故に無學と云ふ、其の道理に準せば、前來の四向三果の人は皆有學と名づくべし、何んとなれば一切の漏を斷盡せんが爲めに常に樂學するが故に、異生の人未だ四聖諦の理を證知せざるが故に有學とも無學とも云ふべからず、今は所作已辨、梵行已立の人なれば無學と名づくるなり。

阿羅漢此云應應受人天廣大供養故。

二には阿羅漢の名を釋す、阿羅漢此等とは謂へらく阿羅漢とは梵語なり、此には翻じて應と云ふ、應は契當の義にして人天廣大の供養に堪ゆる義、即ち供養に相

應すべきが故に應供と云ふ、此の無學の人は自己の修行は已に辨して唯利他を行することあるのみ、故に人天の供養に應するなり、此に就て三應あり、一には應斷、二には應不受、三には應供と云ふ、婆娑論九十四卷十三丁右等に廣く其の名義を釋せり、往見すべし。

此果差別有六。一者退法。謂遇少緣。便退所得。無退緣者。便般涅槃。

二には廣く無學の種類を明す、此の中に四、初には正しく六種不同を明し、二には時解脫、不時解脫を釋す、三には六種の前後を明す、四には性果の二退を明す、初の中に六、初には退法を明す、二には思法を明す、三には護法を明す、四には安住法を明す、五には堪達法を明す、六には不動法を明す、今は即ち初なり、此果差別等とは謂へらく此の阿羅漢果を差別するに六種あり、一には退法羅漢とて少分の異緣に遇へは直に所得の功德を退失するなり、寶疏二十五卷三丁右に正理六十七卷十五丁左に疾病等に於て正念を忘失せる如き類あるを云ふ、さて退緣あるものは所得の功德を退失することありと雖も、若し退緣なきときは必ずしも退するに非ずして般涅槃するなり。

二者思法。謂懼退失。恆思自害。

二には思法を釋す思法とは謂へらく所得の功徳を退失せんことを恐れ、刀を以て己れが頭を扣ひて若し退失せば自害すべしと常に自害を思ふ、是は根が劣なるが故に強く退失せんことを思ふなり、故に思法と云ふ。

三者護法。謂於所得喜自防護。

三には護法を釋す護法とは謂へらく得したる功徳を好んで防護す喜の字はコノソデと訓す此の人は根が稍々勝れたれば思法の人よりは恐れが少なしと雖も猶退失を恐れて防護するなり。

四者安住法。離勝退緣。雖不自防。亦能不退。離勝加行。亦不增進。

四には安住法を釋す安住法とは謂へらく殊とに勝れたる退緣なければ自ら防護せずとも退失せず、又殊とに勝れたる加行を起さざれば増進もせず、多く不退に進にして自位に安住するが故に安住法羅漢と云ふなり。

五者堪達法。彼性堪能。好修棟根。速達不動。

五には堪達法を釋す堪達法とは謂へらく堪は堪能にして能く修行の事に持ち耐はて棟根修行して早く不動種姓に達するが故に堪達法羅漢と云ふなり。

六者不動法。不退動。故彼必無退。此不動種姓。於盡智後。必起無生智。以不退故。餘五無無生智。

六には不動法を釋す六者不動等とは謂へらく此の不動法は傾動せざることを即ち退失せぬことなり、さて此の退法乃至不動法の法の字は渾て人を指すもの、知るべし、彼必無退等とは此の不動羅漢は退墮するなくして盡智の後に必ず無生智を生ずるなり、前の退法等の五種の羅漢には盡智を生ずると雖も無生智は生ぜざるなり、彼は退墮することあるが故なり、若し退墮するときは更に無漏智を起して苦を知り乃至道を修せねばならぬ故に前五のものには無生智なしと知るべし、若無學位等の細註の意は盡智と無生智との差別を示せしものなり、抑も盡智は諸漏盡を知るのみ、無生智は智不退を知るなり、其の盡智の實體を尅論すれば盡智の體は無學の解脫道に至り漏盡の得と俱生する智なり、其漏盡の得と俱生する智體は入觀中の根本智にして無漏の苦智集智滅智道智を離れて別體あることなし、是れ漏盡の得と俱生する邊に就て盡智と云ふ、是れ盡智の實體に約す、若し其の後得智上の行相に就かば上に出るが如く我れ已に苦を知れり、乃

至我れ已に道を修せりとの行相を爲す又無生智の實體を尅論すれば利根無學の入觀中の根本智なり但し正理論七十二卷十三丁右に二義を出し一義は非擇滅を無生と名づく又一義は非擇滅の得を無生と名づく何れにもせよ無生とは惑の不生を云ふ故に解脫道の眞智が其の不生を有ちて起る故に無生に托する智を無生智と名づく即ち無生之智の別體の依主釋なり是の如く入觀中の眞智を以て實體とす即ち根本智は唯四諦を觀して餘の行相を起さぬ若し其の後得智上の行相に就かば我已に苦を知れり更に苦を知るに及ばぬ乃至我已に道を修せり更に修するに及ばぬと知れり凡そ諸論中に於ては多く後得智上の思惟に就いて解釋を爲す近くは今記の所引の文の如し此の盡無生智のことは俱舍論二十六卷四丁右娑婆論百二卷六丁右正理論七十二卷十三丁右光記二十六卷十丁左近くは入論通解末十一丁右等對檢せよ今小乘は盡智と無生智との二智を別體とし大乘なれば一體に於て二智を分つ眞智の惑業を斷盡する邊を盡智と名づけ後有不生を證する邊を無生智と名づく近くは表無表章詮要三卷三丁右に辯するが如し

六中前五總名時愛心解脫恆時愛護所證得法故名時愛及心

解脫煩惱縛故名心解脫亦名時解脫以要待時方能入定及能解脫煩惱縛故具足應言待時解脫略初待言但說時解脫言待時者時有六種一得好衣時二得好食時三得好臥具時四得好處所時五得好說法時六得好同學時

二には時解脫不時解脫を釋す此の中に二初には時解脫を明す二には不時解脫を明す今は即ち初なり六中前五等とは謂へらく六種羅漢の中に於て前五は信解が無學果に至れるものなり是を時愛心解脫と云ふ是れ鈍根の人なり恆時愛護等とは恆時に所證得の法を退失せぬ様に愛求し及び心が煩惱の繫縛を解脫する故に時愛心解脫と名づくるなり亦名時解等とは亦は時解脫と名づく必ず時を待て定に入り及び煩惱の縛を解脫すれば待時解脫と云ふべきを待の言を略して但時解脫と云ふ是は鈍根の羅漢故必ず勝時縁を待て入定するが故に待時と云ふ定とは現法樂住にして四根本定及び四無色定又は滅盡定なり此の人は未だ全分には定障を淨盡せず時を待て定に入る故に待時と云ふ又煩惱の縛を離る故に解脫と名づくさて時愛解脫の釋名に就き時之愛なれば時愛と名づく別體の依主釋なり又解即脫なれば持業釋なり又心即解脫の持業釋なり若

しも解脱の言をば勝解を體とする義に依れば解脱は心所の名なり、心王と相應するものなり、故に心之解脱の別體の依主釋なり、又は時愛亦心解脱なれば持業釋なり、さて論文に及の字あり、是れは一體兩用の義を顯す、是れ義の相違にして體の相違に非すと知るべし、然るに光記二十五卷三丁右に心解脱を釋するに二義あり、初義は心の煩惱を解脱するに約す、後義は婆娑論百卷十三丁左に據り大地法の中の勝解を以て解脱と名づく、寶疏も亦同ト、言待時者等とは時に六種あり、一に好依を得るときに定に入りて解脱を得るなり、其餘の文は解し易し、知るべし、然るに婆娑論百一巻十五丁に詳釋あり、見るべし。

後、不動種性名爲不動心解脱、不爲煩惱退動及心解脱煩惱縛故、亦名不時解脱、以不待時入定及能解脱煩惱縛故。

二には不時解脱を釋す、後、不動種等とは、謂へらく六種羅漢の中の最後の不動羅漢を名づけて不動心解脱となす、此の不動羅漢は煩惱の爲めに動轉せざるが故に不動と云ふ、及び心が煩惱の繫縛を解脱するが故に心解脱と云ふなり、又は不時解脱とも云ふ、上の時解脱と殊にして、利根のものなれば、時を待たずして何時にても定に入り解脱するが故に不時解脱と云ふなり。

此六種姓、中初、退法種姓、必是學位、先有、以是最極下、無有先非此性、而後成也。思法等五、亦有後得、謂有先來學位、是思法性、或有先來學位、是退法、後至、無學位、練根成、思乃至不動、如思法說。

三には六種の先後を明す、此の中に三、初には正しく六種の先後を明す、二には五種の容有に約することを示す、三には練根を釋す、今は即ち初なり、此六種姓等とは、謂へらく頌疏二丁右に先づ問を設けて云はく、此の六種の羅漢は先きの有學位より有りどやせん、又無學得果の後に得せしどやせん、其の答の意は有學位より種姓もあり、無學果を得せし上に於て練根して得せしものもありと云へり、即ち初の退法種姓の如きは必ず是れ有學の位より固有せしものなり、其の所以は此の退法種姓は最極劣性なるが故に、先きに此の姓に非ずして、後ち始めて極劣性となるの理なし、故に退法種姓の一のみ必ず先きより固有なり、思法等五等とは、此の思法等の後の五種姓は、先きより其種姓を固有せるもあり、亦後ち無學果の位に至り練根して得するもあり、即ち先きの有學の位は退法種姓にして、後ち無學果の位に練根して退法種姓より進んで思法種姓となるもあり、乃至不動等とは、先きに有學位の時より護法種姓なるもあり、亦後ち無學位に至りて方

めて護法種姓となるもあり、其の他安住堪達不動等の種姓も亦先きの有學の位より各々其の姓を固有せるもあり、亦後ち無學果の位に至り方めて練根して進んで安住等となるもあり、本文には此等を略して乃至と云ふなり。

此中退法非必定退。乃至堪達非必能達。但約容有建立。此名故。六阿羅漢通三界皆有。若退定退。堪達定達。此則上界唯有安住不動二種。謂彼上界無退有失自害自防及練根故。故無餘四。

二には五種の容有に約するを示すなり、此中退法等とは謂へらく此の六種の羅漢の中にて退法羅漢は必ずしも定て退するには非ず、或は退せずして直に般涅槃するもあり、然るに時としては退するものもあるが故に有る容しとの容有に約して退法と云ふ、決定して退するが故に退法と云ふには非ず、乃至堪達等とは思法も必ずしも自害せんと思ふには非ず、時としては自害せんと思ふことあるが故に容有に約して思法と云ふ、乃至堪達も必ずしも不動種性まで達するには非ず、時としては達することあり、故に容有に約して堪達法と云ふなり、本文には中間の思法等の四種を略して乃至と云ふ、然し乍ら其の實は言總意別なり、安住法の一は容有に約すとは云ふべからず、光記二十五卷四丁右對檢すべし、故六阿

羅等とは上の如く容有に約して退法等の名を建立せしものなるが故に六種の羅漢は三界に通じて皆あるなり、若退定退等とは此の下は上に翻して釋するなり、若しも上の如く容有に約して退法等の名を立てずして退は必ず退き思法は必ず自害せんと思ひ、堪達は必ず達するならば則ち上二界には唯安住と不動との二種のみあるべし、決して上二界には退法思法等はなかるべし、如何となれば上界には疾病等の緣なければ退失することなし、又刀劍の類なければ自害を思ふべからず、又退かなければ防護することもなし、故に上二界には唯安住と不動との二種のみありて思法等の四はなかるべし、若しも亦餘の思法等の四は上界にはなしとせば、如何んぞ六阿羅漢は三界に通じて皆ありと云ふべけんや、既に六阿羅漢皆三界にありとせば、明に知ぬ退法等の名は容有に約して立てしと云ふことを、然るに上二界にも退法等の聖ありと云ふは、先時、有學の位より固有せる種姓に就て退法等の名を立つるのみ、實は退墮もせず練根もせぬものなりと知るべし。

練根者。謂調練諸根也。唯人三洲有。天趣中無。彼無退故。非但無學。練根有學異生亦能。練根但除見道見道速疾無容起彼練根。

加行^ヲ故[。]

三には練根を釋す。練根者謂^レ等とは謂へらく練根は獨轉根の如し、下根を捨て中根を取り、中根を捨て上根を取るなり、故に論二十五卷八丁左に無學果の退法より思法に進むが如きは九無間九解脫道を起して思法を障へる所の不染汚無知を斷じて轉根す、即第九の無間道までは退法種姓にして第九解脫道に至ては思法種姓の無漏道となる、又正理論に練根を釋して何等を以ての故に名て練根と爲すや、答ふ、諸根を訓練して增長せしむ、故に謂へらく道力の故に根して相續せしむ、下を捨て中を得、中を捨て上を得、漸々増勝するを名づけて練根と爲すと云へり、唯人三洲等とは練根の依身を示すものなり、練根の所依の身は唯人の三洲なり、此の三洲の身のみ根を練修す、其餘の北洲及び地獄餓鬼畜生などには練根なし、色界無色界には無漏道はあれども退墮することなきが故に練根せざるなり、故に唯人の三洲のみ退墮あることを恐れて練根するなり、俱舍論二十五卷八丁左對照せよ、非但無學等とは練根することは但だ無學の人のみに非ず、有學と異生との位にも亦能く練根するなり、但し見道を除く、見道は唯十五心にして非常に速疾なれば、彼の練根の加行を起す容きことなし、故に俱舍論二十五卷七丁

右に有學と異生との種姓にも亦六あり、六種の應果は彼を先と爲すか故に然るに見道の位には必ず練根なし、此の位は加行を起すべきことなきが故に、唯信解と異生との位の中に於て、能く練根を修す、無學位の如しと云へり。

又六中、前五有退姓、有退果、不動種姓、二退俱無、言退姓者五、中唯退法、一姓必不退、謂居下故、更無退處、思法等四皆有可從^ニ種姓退義、如從堪達等退、至安住等、言退果者五種皆有退果、謂退無學果也。

四には性果の二退を明す、此の中に三、初には正しく性果の二退を明す、二には先成後成の退不を述ふ、三には有學と異生にも亦六種あることを示す、今は即ち初なり、又中前五等とは謂へらく六種羅漢の中に於て前の五は退性もあり、退果もあるなり、第六の不動種姓には退性もなく、退果もなく、二俱になさなり、今畧圖を以て其の相を示さば、



言退性者等とは退姓は其の種姓を退すること、五種の中に於て退法の一は唯果退のみありて退姓なし、是は種姓が最極下等にして、更に退すべき處なし、果退ありとは此の退法羅漢の其の位を退墮して惑を起して有學の位となることあり、故に果退ありと云ふ。思法等四等とは、是は退性もあり退果もあり、即ち退性とは堪達か其種姓を退きて安住となり、安住か其種姓を退いて護法羅漢の種性となり、護法羅漢が其の種姓を退ひて思法羅漢の種姓となるなり、退果とは羅漢果を退ひて有學の位となる即ち前は姓を退くに約するか故に唯思等の四なり、今は果を退くに約するが故に通じて退法をも取る故に五種と云ふなり。

然先學位住思等四今至無學此思等四性之與果必無退理謂學無學道所成堅故。

二には先成後成の退不を述ふ、此の中に二、初に先成不退を示す、二には後成の退を示す、今は即ち初なり、然先學位等とは謂へらく思法等の四種の羅漢の性も果も退するとは後成を退する邊なり、無學果の一道を以て成しられたる上の論なり、今は有學と無學との二道所成なるか故に退せざるなり、即ち先成は二道所成の故に退せぬ、後成は無學果一道所成の故に退するなり、今の文意は先成不退を

若於無學退法等姓修成思等四種種姓是容有退以唯無學道所成故唯先退法有退果義以姓是退故。

述ふる一段なり、即ち先きの有學の位より有する種姓は退せぬ、諸の無學の先きの有學位に於て其の種姓に住せる思法等の四種種姓は退することなし、是れ學と無學との二道を以て成する所にして堅牢なり、串習すれば堅牢となる、是れ義を以て云へば、此の思法種姓は學と無學との二道所成なれば堅牢なるが故に姓も果も俱に退することなしと知るべし。

二には後成の退を示す、若於無學等とは謂へらく無學果に於て、此の退法の人が練根修成して或は思法となり、或は無學果に於て思法の人が練根修成して護法となり、或は無學果に於て護法の人が練根修成して安住となりたる如きは時として退することある容し、何んとなれば唯無學道の一道を以て成しられたるものにして、上の二道所成に比しては稍堅牢ならず、故に退する義あるなり、唯先退法等とは、唯退法の人なれば本と有學位の退法種姓が無學位に至るも果を退することあり、此の人は其の性質が果を退すべき人なるが故に、設ひ無學位に於て轉根して思法等となりても亦退果するの義あり、他の二道所成のものは退

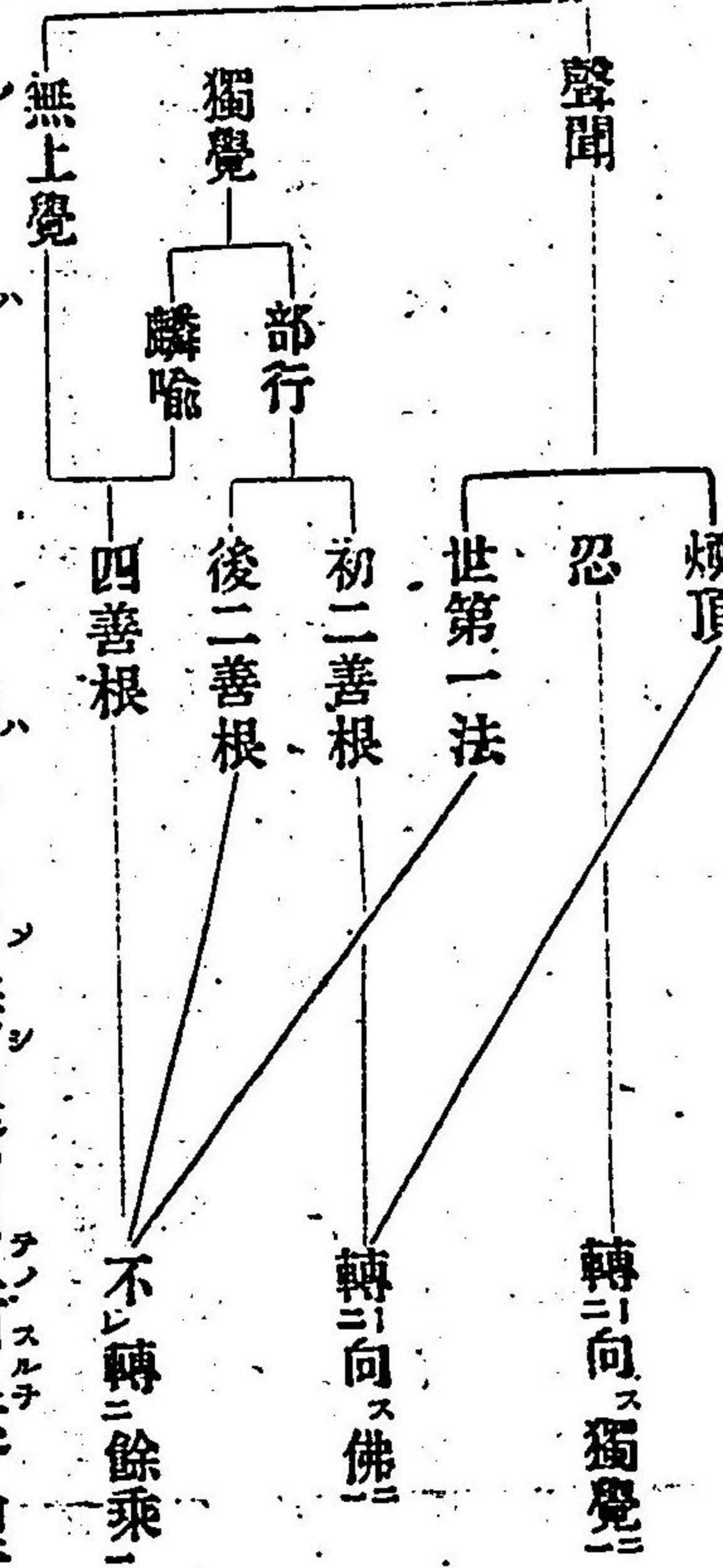
果する義のなきものは自から別なり、但し是は容有に約して論すること上の如し。

又此六種有學異生亦有彼爲先故無學亦有六也。

三には有學と異生にも亦六種あることを示す。又此六種等とは謂へらく上來所明の羅漢に六種あるが如く、有學と異生にも亦六種あるなり、彼の有學と異生との六種を先とするが故に無學の六種も亦あるなり、故に光記廿五卷十二丁に先の凡位に六種あるに由るが故に有學に六あり、先の有學に六種あるに由るが故に應果に六ありと云へり、又婆娑の第七卷十七丁に順解脱分にも亦六種あり、謂へらく、退法種姓乃至不動種姓なり、退法種姓の順解脱分を轉じて思法種性の順解脱分を起し、乃至堪達種姓を轉じて不動法種姓の順解脱分を起し、聲聞を轉じて獨覺及び佛を起し、獨覺を轉じて聲聞及び佛を起し、若し佛種姓の順解脱分を起し、已ては即ち轉すべからず、極めて猛利なるが故に、又説く順決擇分にも亦六種あり云云、今便に轉向餘乘の義を示さんとするに、要解師の料簡を依用す、要解に云はく、問ふ毘婆娑宗に聲聞證果の後に轉じて獨覺となるの説ありや、答ふ是れなし、問ふ若し爾らば何んが故に論十二卷八丁左に云はく、獨覺に兩説あり、初説云云、光解して曰はく、先さには是れ聲聞にして前三果を得たる人、後に第四の勝果を得たる時、轉じて獨勝覺と名づく、前解を正と爲すと、此の文豈證果已後轉證あるに非ず耶、答ふ光記の辨する所甚だ道理に非ず、此の辨一たび起りしより、久しく學者を惑はし、誤て毘婆娑宗に果人轉根ありと謂はしむ、殊に思はず、此の説直に婆娑論七卷九丁、六十八卷六丁、論廿三卷八丁等の説に違するを彼れ轉根の義を散説して未だ一處として聲聞の果人餘乘に轉向すると云ふ文ありを見ず、理も亦あることなし、惟論十二卷八丁の前説は蓋し乃ち異生將に勝果を得んとするるとき轉じて獨勝となるの義にして、是れ果人轉向には非ざるべし、若しも聖後の轉根となさば、定て是れ論主が異部の説を述べしものにして、有部の説に非ざるや必せり、果人轉根は是れ異部及び大乘の所説なり、瑜伽雜集智論等に之を説く、大乘義章十八卷、瑜伽倫記八上等云云、今按するに論主は有部の正説を以て有餘師と云て説を出して云はく、彼れ先さには是れ異生にして、曾て聲聞の順決擇分を修し、今自から道を證す獨勝の名を得たり已上、故に知ぬ彼の前説は有宗の説に非ず、恐らくは論主の自義歟、又光記は但、論文に任せて釋を爲し、有部宗の説として釋を爲せしに非ず、故に失あることなき歟、今更に畧圖を以て有

り、初説云云、光解して曰はく、先さには是れ聲聞にして前三果を得たる人、後に第四の勝果を得たる時、轉じて獨勝覺と名づく、前解を正と爲すと、此の文豈證果已後轉證あるに非ず耶、答ふ光記の辨する所甚だ道理に非ず、此の辨一たび起りしより、久しく學者を惑はし、誤て毘婆娑宗に果人轉根ありと謂はしむ、殊に思はず、此の説直に婆娑論七卷九丁、六十八卷六丁、論廿三卷八丁等の説に違するを彼れ轉根の義を散説して未だ一處として聲聞の果人餘乘に轉向すると云ふ文ありを見ず、理も亦あることなし、惟論十二卷八丁の前説は蓋し乃ち異生將に勝果を得んとするるとき轉じて獨勝となるの義にして、是れ果人轉向には非ざるべし、若しも聖後の轉根となさば、定て是れ論主が異部の説を述べしものにして、有部の説に非ざるや必せり、果人轉根は是れ異部及び大乘の所説なり、瑜伽雜集智論等に之を説く、大乘義章十八卷、瑜伽倫記八上等云云、今按するに論主は有部の正説を以て有餘師と云て説を出して云はく、彼れ先さには是れ異生にして、曾て聲聞の順決擇分を修し、今自から道を證す獨勝の名を得たり已上、故に知ぬ彼の前説は有宗の説に非ず、恐らくは論主の自義歟、又光記は但、論文に任せて釋を爲し、有部宗の説として釋を爲せしに非ず、故に失あることなき歟、今更に畧圖を以て有

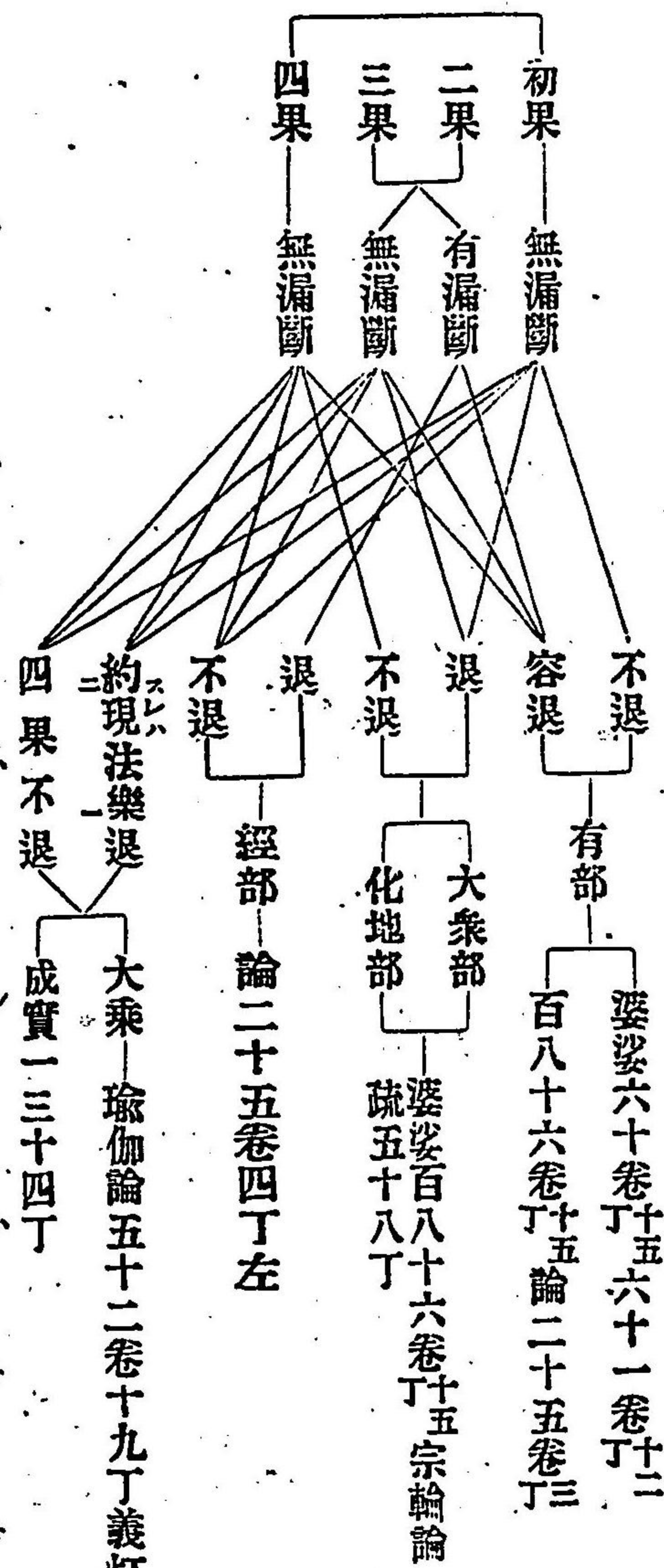
部の正義を示さむ



此宗所立唯預流果必定無退以斷迷理見道惑故諦理眞實楷
 定可依聖慧已證必無退理後之三果許有退果以修道惑是迷
 事故事相浮偽無定可依斷迷彼惑有失念退

三には四果の退不を明す此の中に三初には正しく今宗の退不を明す二には餘部の退不を明す三には六種羅漢を別開して七種と爲すを明す今は即ち初なり此宗所立等とは謂へらく此の有部宗の所立は預流果は決定して退するとなし其の理由は迷理の見所斷の惑を斷するを以てなり見所斷の惑なるものは苦集滅道の四聖諦の理に迷ひ苦なるものを樂と思ひ無常なるものを常住と思ひ四

諦の實理を知らざらしむる惑なり然るに一たび入見して其の迷理の惑を斷じ四聖諦の理を證得したなれば其の諦理は眞實にして虛妄のものに非ず故に楷定して依るべきものなり是に由て無漏の聖慧を以て一たび證せし後ち再び其の理に迷ふの道理なし故に初果必不退とて退くことなしと知るべしさて楷とは式なり法なり正き條理のあることなり即ち四聖諦の理は色心等の諸法の上に條然と具有せし眞理なり後之三果等とは一來不還阿羅漢の後の三果は時として其の位を退き阿羅漢か退きて不還となり不還果か退きて一來果となり一來果か退きて預流果となることもあり即ち之れも容有なり必有に非ず時としては異縁の爲めに退くこともありと云ふ意なり以修道惑等とは此の修所斷の惑は迷事の惑とて諸法の事相に迷ひて起る惑なり即ち彼の金可愛とか此の者は不可愛とかの事相に迷ふて起るものなり元來諸法の事相なるものは浮偽とて確實ならぬもの故卒然失念して見違ひ易きものなり故に後三果の人は不圖失念して迷事の惑を起し其の果を退くことあるなり之を後三果容退初果必不果と云ふなり今畧圖を以て四果退不の相を示さむ



(五百三十二)

若大衆部預流果有退。羅漢無退。若經部宗預流應果俱無退。聖道證故中間二果亦有漏道證故有退也。然一切從果退須臾必得。無有命終而不得者。譬如壯士雖蹶不仆。

二には餘部の退不を明す。若大衆部等とは謂へらく實疏二十五卷八丁左の文に依る實疏には宗輪論疏を引けり。彼計の初果有退の理由は四箇の道理あり。一には初果は初めて一たび無漏智を起し見惑を斷じられたるも未だ無漏を修習せざるが故に。二には預流の聖は緣に見惑を斷ずれども未だ修惑が身中を離れざる

が故に。三には所修の聖法も未だ圓滿せず。即ち極果に至らざるが故に。四には無漏の聖道も未だ堅牢ならざるが故に。此の四箇の道理に由て初果有退を立つるなり。又大衆部の第四果無退の理由は婆娑論百八十六卷十四丁に彼の計を擧げて曰はく。世間の現喻に瓶破れたれば唯残りの瓦あるのみ。再び瓶とはならざるなり。諸の阿羅漢も已に金剛定に於て一切の煩惱を破し已りたれば。再び諸の煩惱退あるべからず。又木を焼きたれば灰となる。更に木とはならぬ。羅漢も智火を以て諸の惑を燒き已りたれば。更に煩惱退を起すべからず。若經部宗等とは經部宗の所立は初果は退なし。中間の二果は退もあり。不退もあり。若しも無漏道斷なれば退なし。若しも有漏道斷なれば退あり。正理六十八卷三丁光記二十五卷七丁等の如し。彼の經部宗の計の意は羅漢に退果なし。六種性の別なるは現法樂住を退するに由る。決して無學果を退することなし。俱舍論主も經部師に明ひ玉ひたり。故に論二十五卷四丁左四行に彼の説理に應ずとの玉へり。又大乗の説も總へて無漏道を以て斷じたるものは必ず果を退せず。彼の六種性の如きは現法樂住を退するに就いて立てたるものなり。決して其の果を退するには非ず。義林章五本三丁右に云はく。小乗の中には果を退失するを名づけて退と爲す。大乘の中に

(五百三十三)

は禪定現法樂住を退失すと云へり、又同二末十六丁左了義燈四本十三丁右も亦同じ。然一切從等とは然れども即ち其の果より退することありと雖も必ず須臾にして必ず其の果を得ず、決して其の果を得ずして其の中間に死すると云ふことなし、須臾とは久しからずとの謂なり、一たび擇滅を證得したる人は設ひ退果しても慚愧増上の力の故に必ず暫時にして本に復するなり、譬へば壯士の蹶くと雖も仆れざるが如し。

上明六種又開爲七。第六不動分二。先來利根者名爲不退。後修得者名爲不動。

三には六種羅漢を別解して七種と爲すを明す。上明六種等とは謂へらく上に明せし六種羅漢を別開して七種と爲す、即ち第六不動種性を分つて二と爲す、本來利根のものを名づけて不退となし、無學果を得て後ちに練根修得せるものを名づけて不動と爲すなり、婆娑論六十二卷五丁左には評家の意は一を本性不動と名づけ二を練根不動と名づくとは是なり、光記二十五卷十八丁左對見すべし。

上來所明四向四果。若論其性者四向皆以無漏五蘊爲性。七十五法中無表心王大地法十大善十。尋伺得四相。擇滅無爲皆通四果。

四果皆以無漏五蘊擇滅爲性。七十五法中無表心王大地法十大善十。尋伺得四相。擇滅無爲皆通四果。

四に四向四果の體性を明す。上來所明等とは謂へらく是れは七十五法の中に於て四向四果の體性を明すなり、預流向乃至阿羅漢向の四向は皆無漏の五蘊を以て體性とす、無漏五蘊とは戒と定と慧と解脱と解脱智見なり、七十五法の中に於ては道共戒の無表と第六心王と大地法の十と、大善地法の十と、尋と伺と得と四相とを以て皆四向の體性と爲すなり、四果皆以等とは四果の體性は前の四向の體性の上に更に擇滅無爲を加へ體性とす、即ち擇滅は離繫果にして四果の聖者の所證得の法なり。

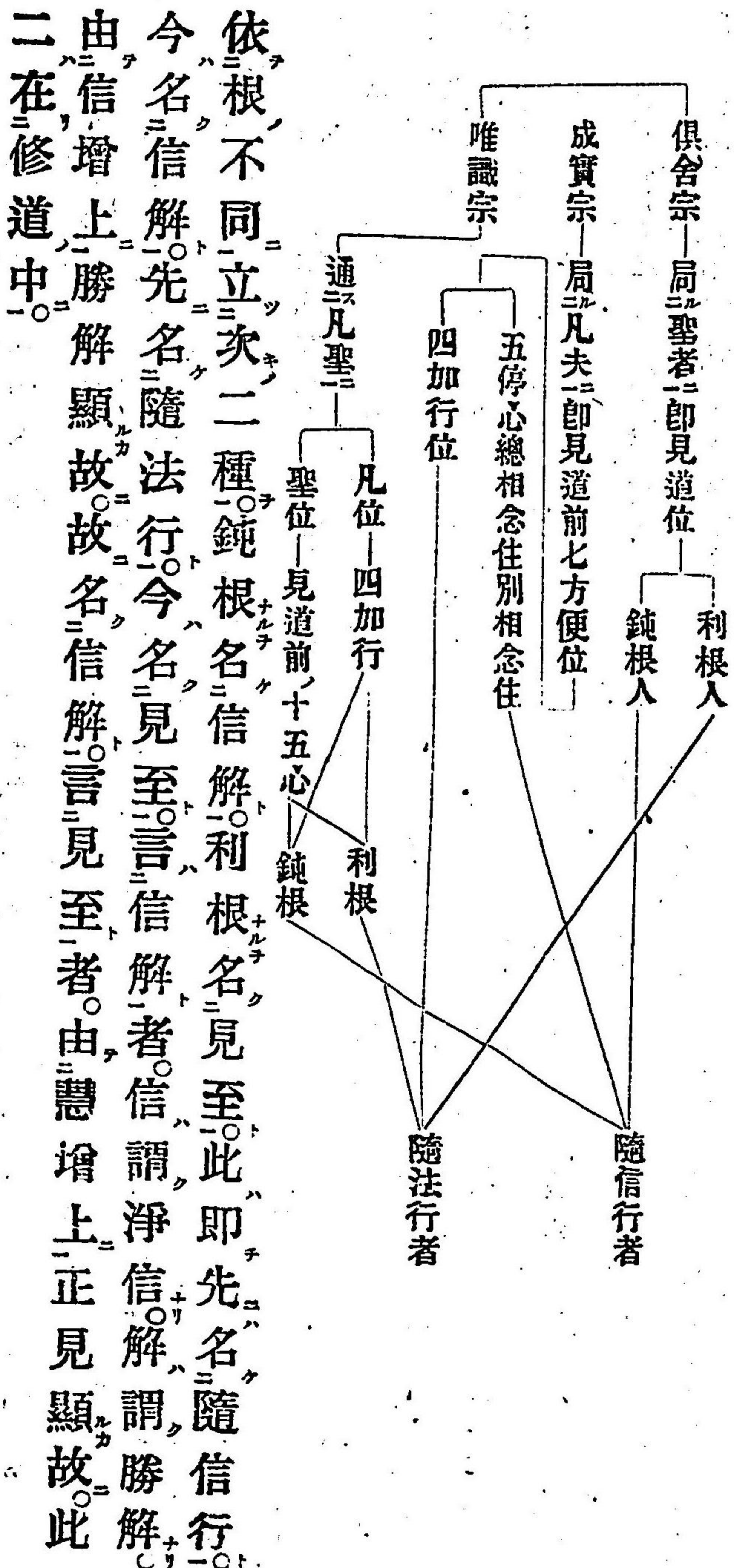
又明七種聖人一隨信行。二隨法行。三信解。四見至。五身證。六慧解脱。七俱解脱。

五には七種の聖人を明す、此の中に二初には標列、二には別釋、今は即ち初なり、文釋は知るべし。

依加行異立初二聖。謂隨信行者。彼先信他隨行義。故隨法行者。彼於先時由自披閱契經等法。隨行義。故此二在見道中。

二には別釋此の中に四初には隨信行隨法行を釋す二には信解見至を釋す三には身證不還を釋す四には慧解脫俱解脫を釋す今は即ち初なり依加行異等とは謂へらく此の隨信行と隨法行との二の聖者は加行の異なるに依て立てしものなり初の隨信行の聖とは前加行の時に於て他の佛とか菩薩とかの教へを信仰し其の信仰に由て漸々修行し來りしものなるが故に隨信行者と名づくるなり者の字は人者にして牒者には非らざること知るべしさて此の隨信行者につき俱舍論二十三卷十四丁右六行已下に二釋を作れり一には見道の行者が隨信行を有するが故に隨信行者と名づく即ち隨信行の他の一分の名を取て者の上に加ふが故に一分取他名の有財釋なり二には隨信行を慣習し習ひ込んで性質とするを隨信行者と云は、隨信行即者の持業釋なり是れ即ち見道鈍根の人なり婆沙論五十四卷五丁右已下詳釋あり對照すべし隨法行者等とは此の隨法行の人は前の加行の位に自から契經等の教法を披閱し其の教法の指南に隨て修行するか故に隨法行者と名づく此の隨法行者の釋名は上の隨信行者の釋名に準じて有財釋と持業釋との二釋あること知るべし故に俱舍論廿三卷十四丁右八行に此に準じて隨法行者を釋すべしと云りさて此の隨信隨法行に就き諸宗の

不同あり今零圖を以て其の相を示さん。



二には信解見至を釋す依根不同等とは謂へらく此の信解と見至との二種は根機の利鈍の不同に依て分るゝなり即ち修道の位に於て根の鈍なるものを信解と云ふ信解の者は鈍根なれば己れの見解が少なくして唯他人の教へを聞きて